

譚奇俗風報画

秘蔵版

緊縛傑作写真とアブチック名作秘画の総集版



目で見る変態風俗絵巻

画報風俗奇譚・秘蔵版 昭和57年8月15日発行（毎月一回15日発行）通巻第3号

目で見る変態風俗絵巻



定価 200円



はじらい (ヘンドリック・ゴルツイウス作の銅版画)



“20世紀”と称された美少女 (G・シュミューズ筆)

ま
ひ
る
の
艶
肌

まひる—庭では風も死んで、静寂が占めている
まひる—女がひたひたに縛られて賣られている
まひる—誰も知らない、私だけの美しい肌が光る



盤上の人魚

丸テーブルの上におかれた いわば これは人魚の生き
づくり 生きたまま縄目を受けて 嗜虐の箸をつけられ
るのを 待っている 肌がキラキラと光り うるみを帯
びてしっとりしてくるとき 彼女は 心の奥のほうから
不思議な感情の波が高まり 押しよせてくるのを感じる





柱 背 負 い

十字架ならで床柱を背負わされた女 ひきむかれた乳房
と裾を割る素足の白さが 目にしみて ああ悦虐の時





空中ハリッケ

地上10メートルの木の枝にくくられた裸身の女は、カラスの餌食か、悪魔のいけにえか

田上恵子・え





白肌への執念

白い肌に針をさし 絵のぐをうずめる感触が、身ぶるいする。



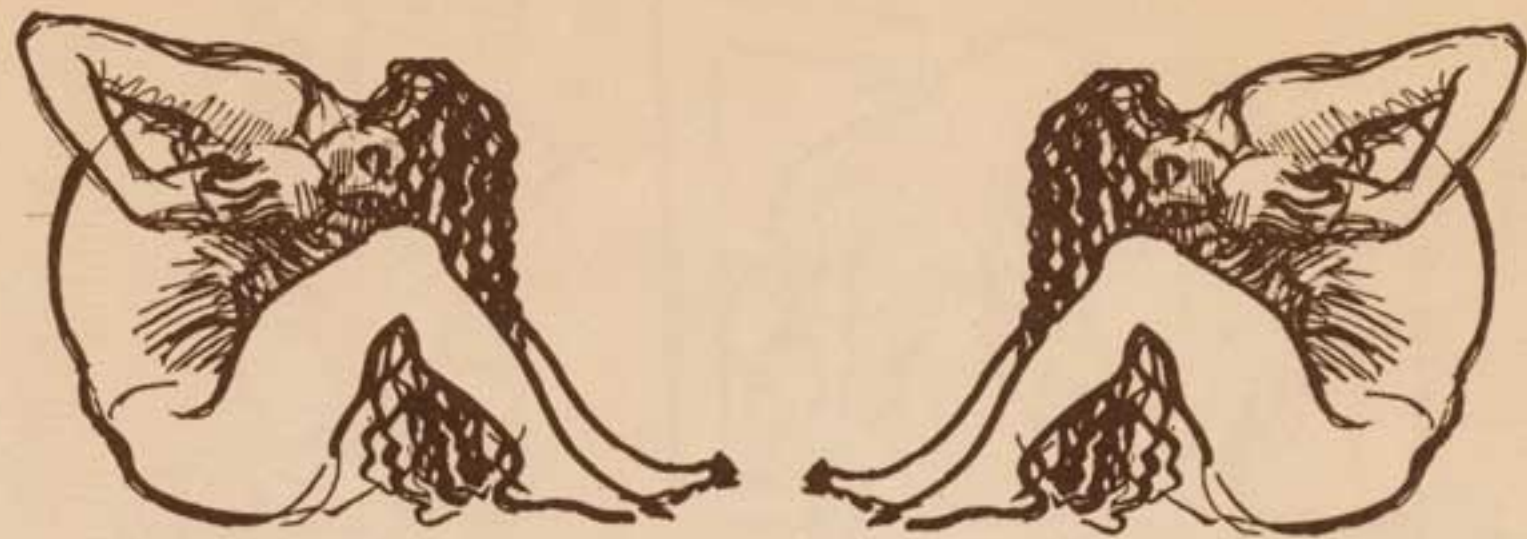
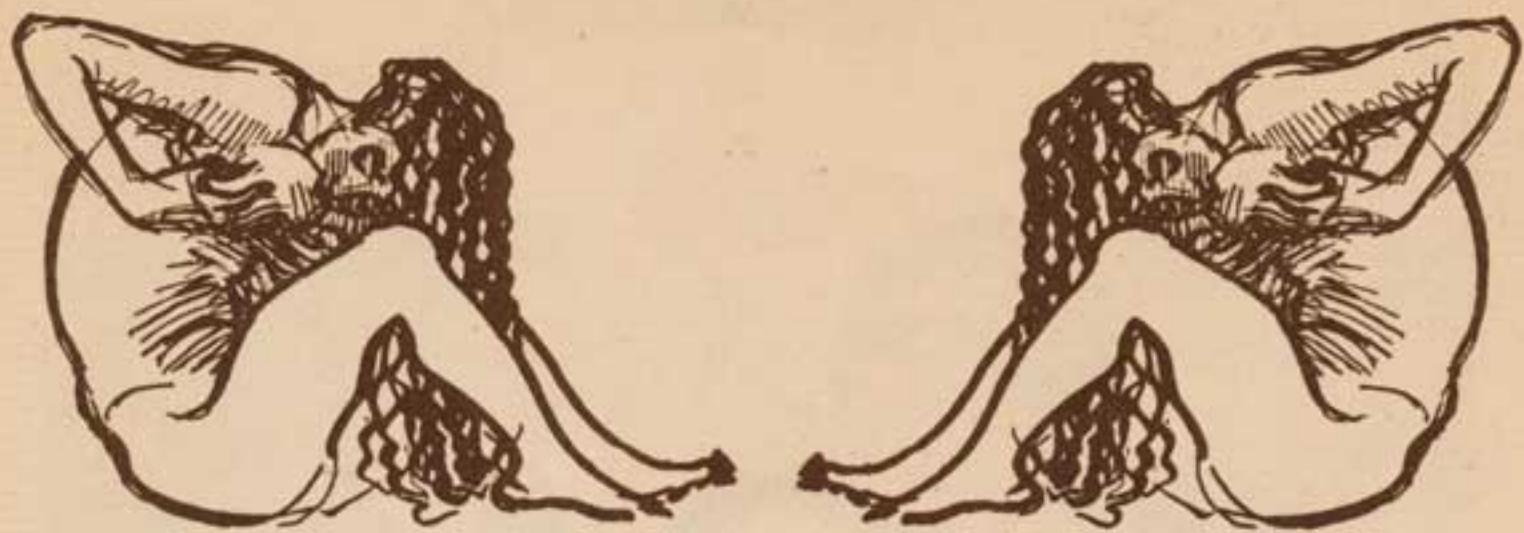
卍 吊 り

足がどこへいつているのか 手がどうなっ
ているのか ちょっとわからない姿勢の卍吊り

田上恵子・え



トッチャン坊や (マコ筆の諷刺画・ウィーン性科学研究所所蔵)



画報風俗奇譚 秘蔵版 目次

多色刷写 眞

まひるの艶肌……………(七一)
盤上の人魚……………(一八)
柱背負い……………(一〇)

第1グラビア

二人無残……………(二五) 眼帯をかけた女……………(三四)
格子にはりつけられて……………(二六) あるポーズ……………(二六)
椅子の世界……………(二八) 華やかな裸身……………(二八)
囚姿五態……………(三三) 女体観音……………(三〇)

多色刷口 絵

空中ハリツケ……………(田上恵子(一一))
白肌への執念……………(江馬美久(一二))
吊り……………(田上恵子(一四))

第2グラビア

鏡の中のナルシスト……………(三二)
白肌のデュエット……………(三三)
裸女キリスト……………(三四)
竹で責める……………(三六)
長椅子のポーズ……………(三八)
投げだされた女……………(四〇)
もだえる女体……………(四二)
階段緊縛……………(四四)
めしいた囚人……………(四六)

第3グラビア

柱しばり……………(田上恵子(一五))
格子責め……………(江馬美久(一六))
異虐図絵……………(田上恵子(一八))
椅子の囚人……………(田上恵子(二〇))
嗜虐のポーズ……………(田上恵子(二二))
衣桁つるし……………(田上恵子(二四))
静かなる責め……………(田上恵子(二六))
庭園の憂愁……………(田上恵子(二八))
つり女……………(田上恵子(三〇))

絵集 責め

被虐のロープ・風鈴ぶり……………(田上恵子(四七))
生き埋め・車輪しばり……………(小田利美(四八))
竹責め・土人の餌食……………(江馬美久(五〇))
石を抱いて・飯盒ホルダー……………(江馬美久(五〇))

アプチック絵画館

コルセットをする女たち……………(七一)
乳房をしぼる女たち……………(七八)
レスボスの歌……………(八二)
お尻をねらわれる女たち……………(八七)
浣腸される女たち……………(九四)
靴をはいた女たち……………(一〇〇)
亀裂へのあこがれ……………(一〇二)
ズボンをはいた女たち……………(一〇六)

男をしいたげる女たち……………(九八)
猛獣と女……………(九六)
首つりの彫刻……………(一〇三)
人獣交歓の野外彫刻……………(一〇四)
乗馬する女たち……………(一一六)

小説

永遠の美と若さの泉……………(ザッヘル・マンツホニル)



上・若き男爵——酒場へ行くときの練習。B・ラビエ筆のさしえ
右・美しき乳房——H・ホルパイン作の木版画



二人無残

背中合わせに 柱を背負わされた二人の女
こころが違い からだが異なっても 求
めるものは 同じひとつの嗜虐の境地なのだ

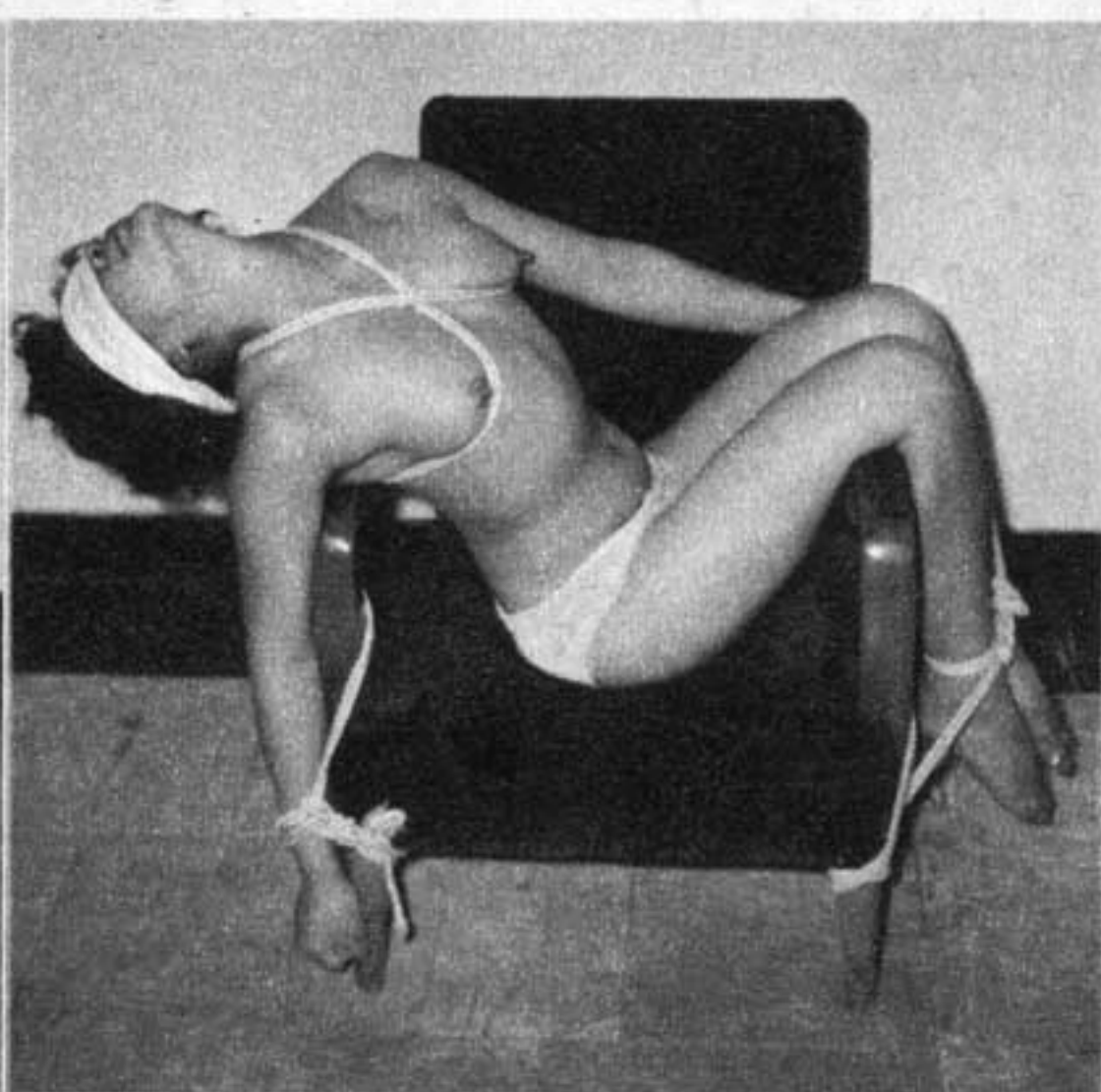


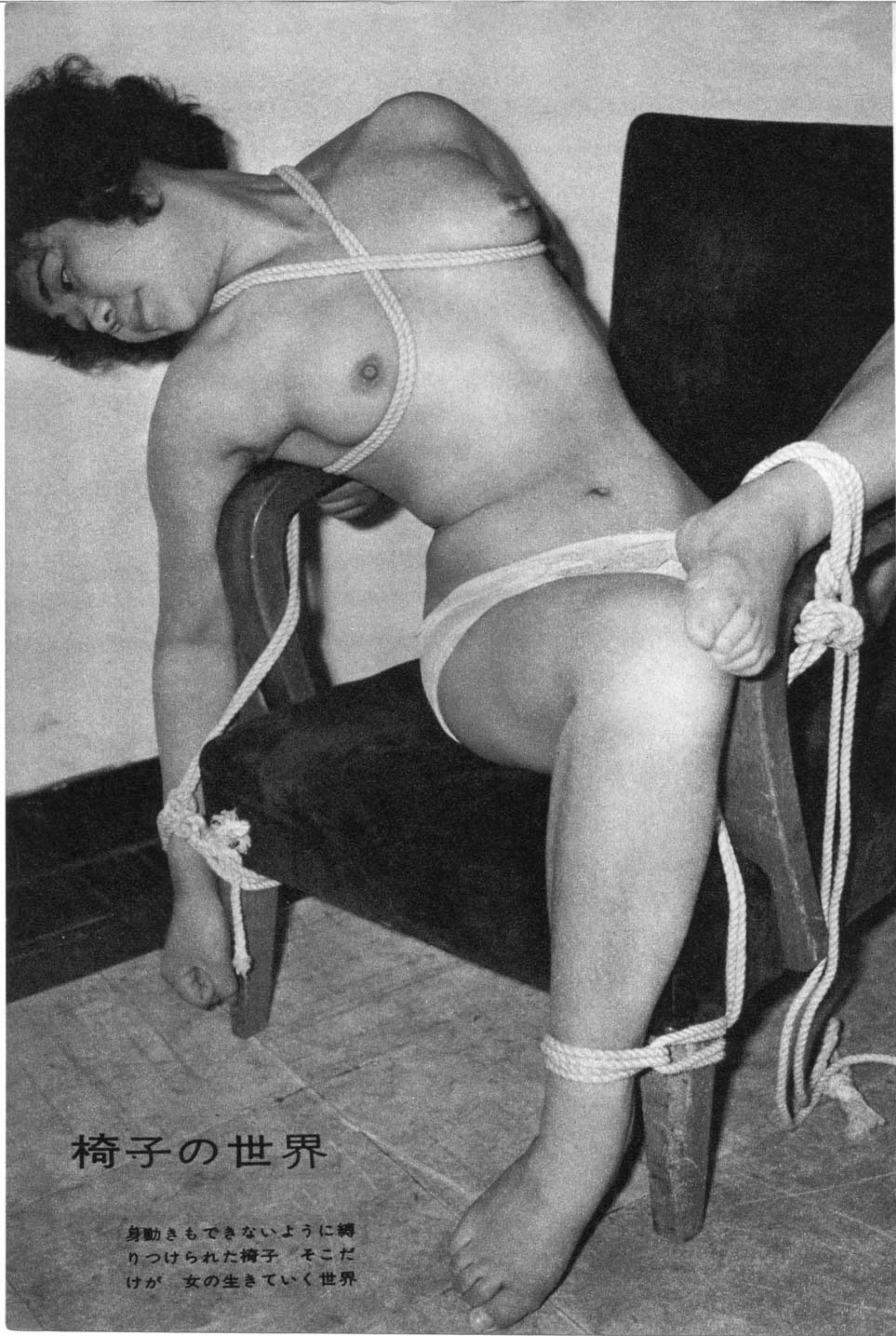


格子にはりつけられて

窓の格子が そのまま 女をつなぎとめ
るカセとなり あわれ 白肌をもだえて
も しょせんは かなしき捕われの囚虜

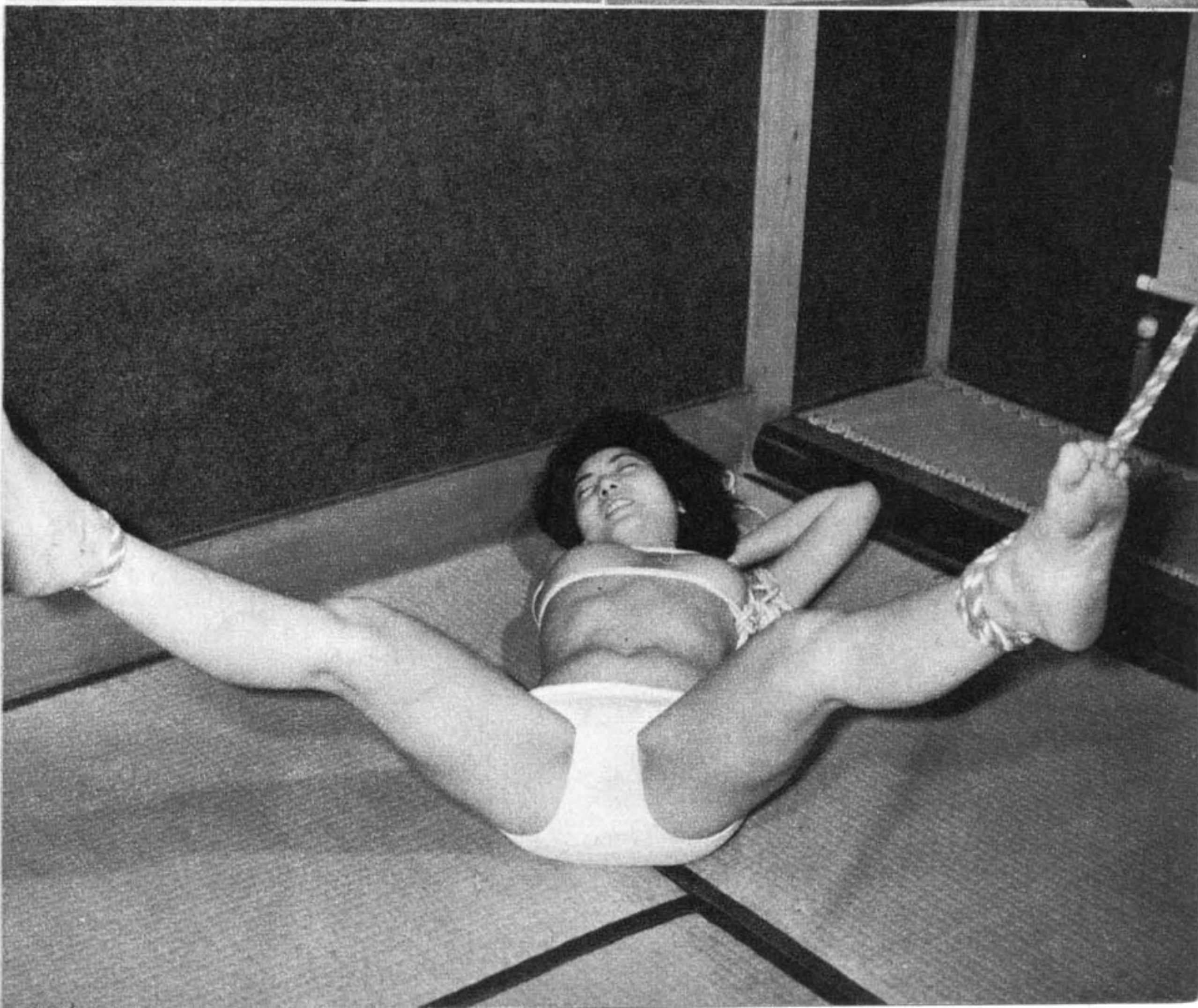
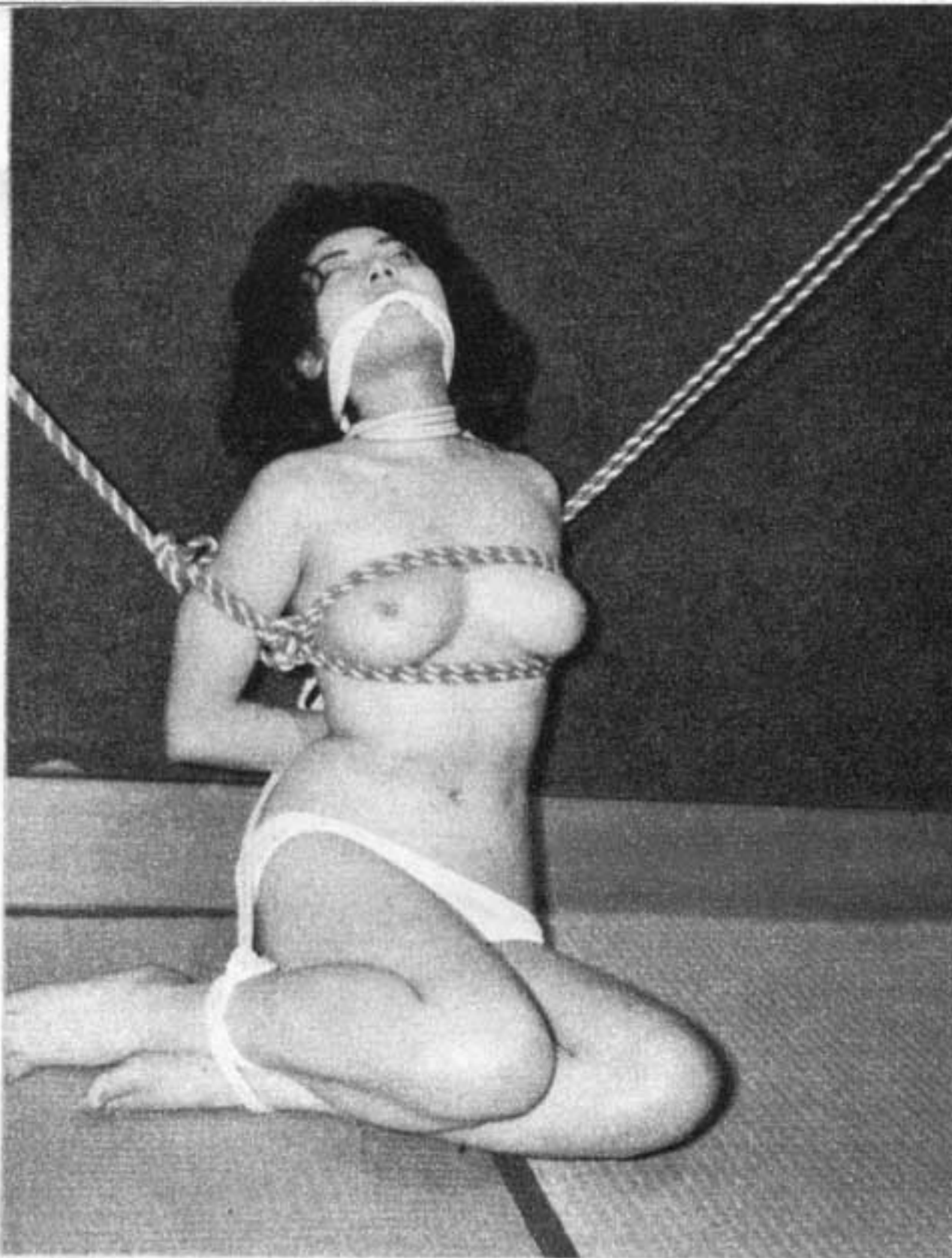




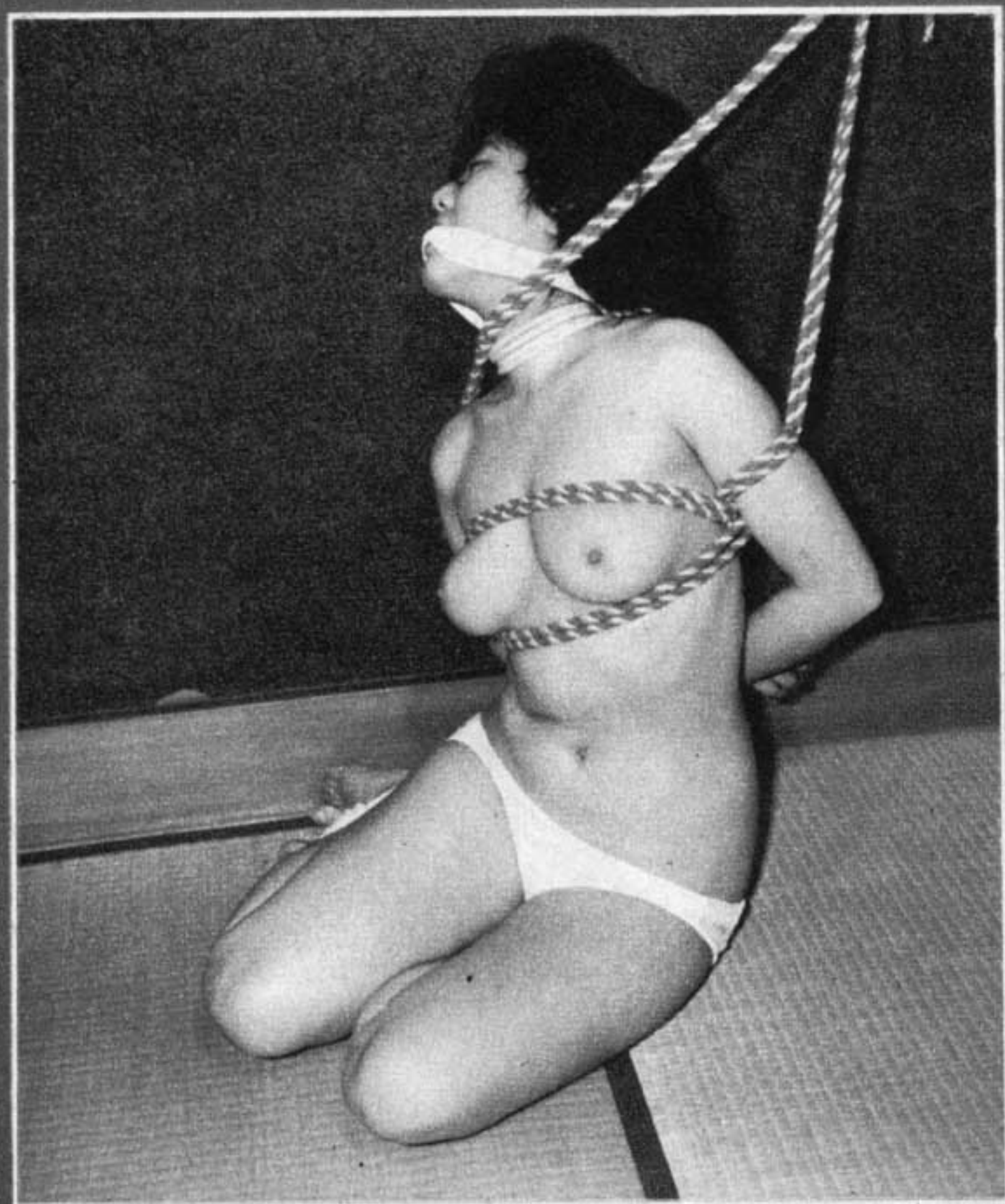
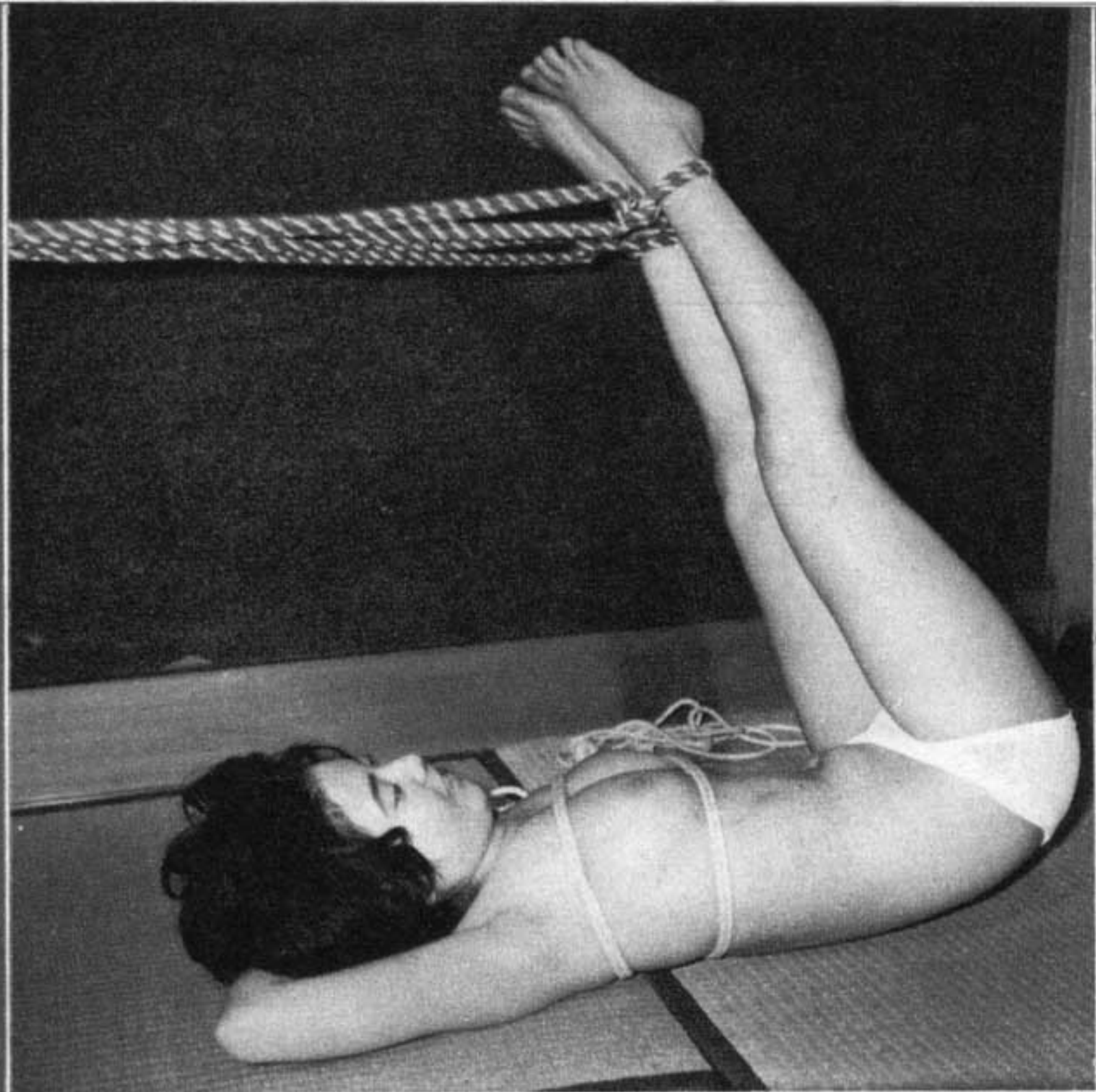


椅子の世界

身動きもできないように縛りつけられた椅子 そこだけが 女の生きていく世界



つるされた人形



あたしは あやつり人形 足をつられれば恥ずかしい股裂きの姿態を演じ 首をつられれば苦痛のうめきに身をひたす “ご主人”の意のままにつられながらも あたしは からだの奥の喜びの声を聞く



囚姿五態

緊縛のなかから 女は 高鳴るからだの血潮
を汲みとる 生きて 燃えて そして 陶酔
する 五色にいろどられた境地を 感じとる



眼帯をかけた女





片方の視界をふさがれたとき もう一方の目
は 輝きを増す そこに いのちが 凝結す
る そして 閉ざされた視界のなかに 幸福
をまさぐり 生き甲斐を求める 暗黒のなか
で 彼女が見るものは あやしい光をもった
妖美の異郷 それが チ力チ力と多彩の色を
発し 無数の征矢となつて 心臓のまっただ
なかを突きとおす 女のいのちの炎を燃やす





あるポーズ

まひるの庭に敷かれた
荒ムシロ

そこに 横たえられた
シュミーズ一枚のおんな
しかも 荒縄で

荷物のように縛り上げられ
うち捨てられている

吸う息 吐く息の音もなく
ひっそりと おんなは

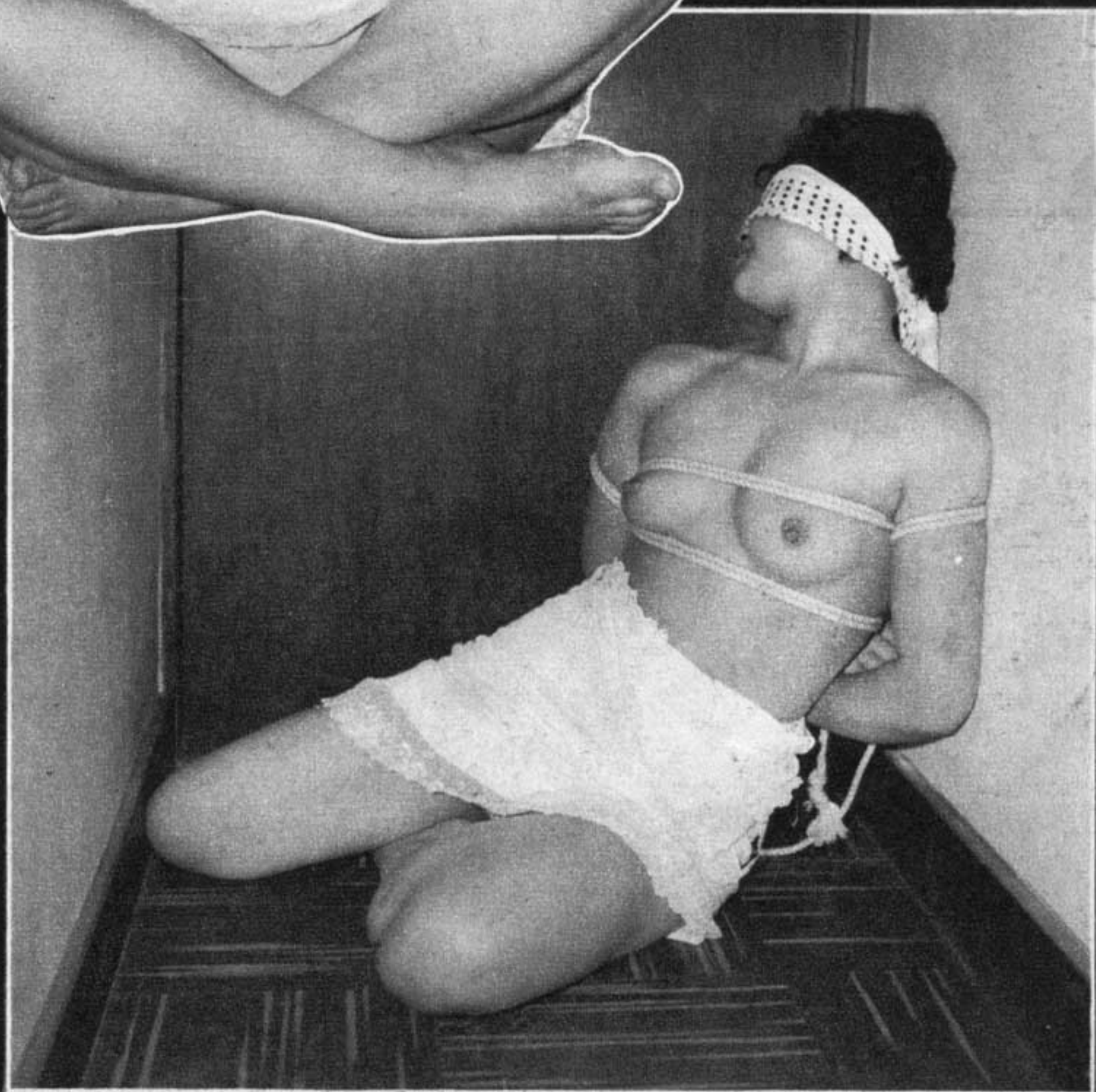
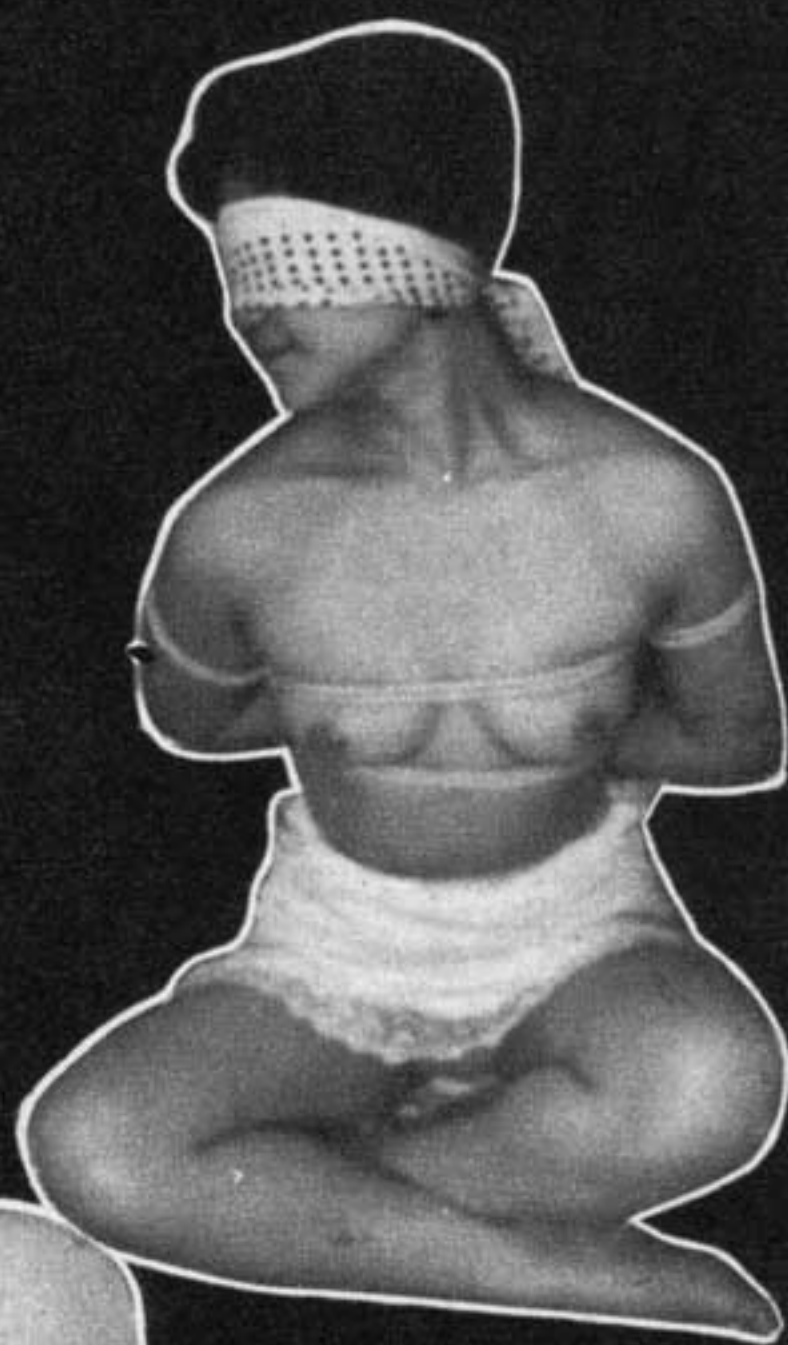
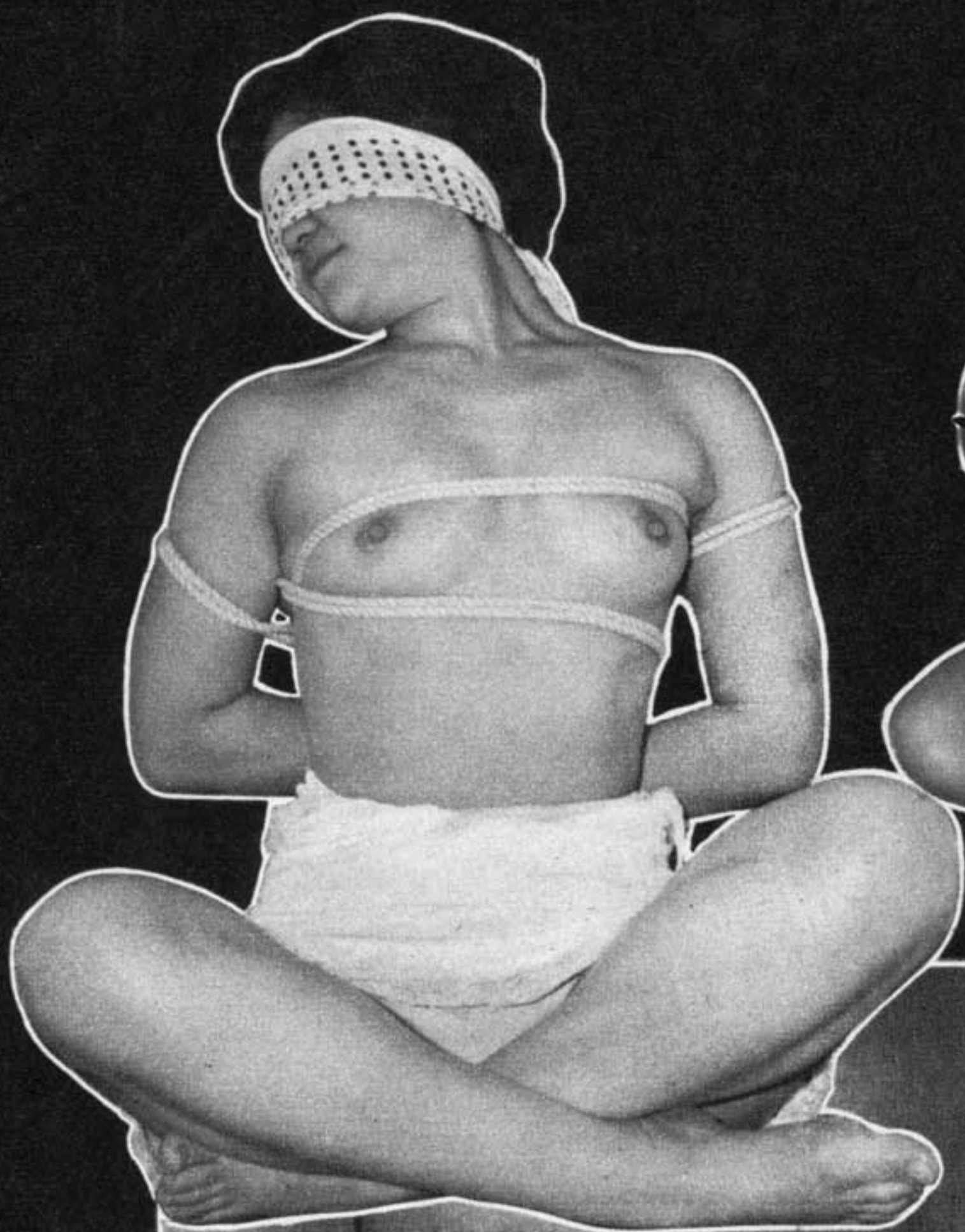
受縛の世界に遊び
恍惚の境地に没入している

それが おんなの性質
といってしまうば

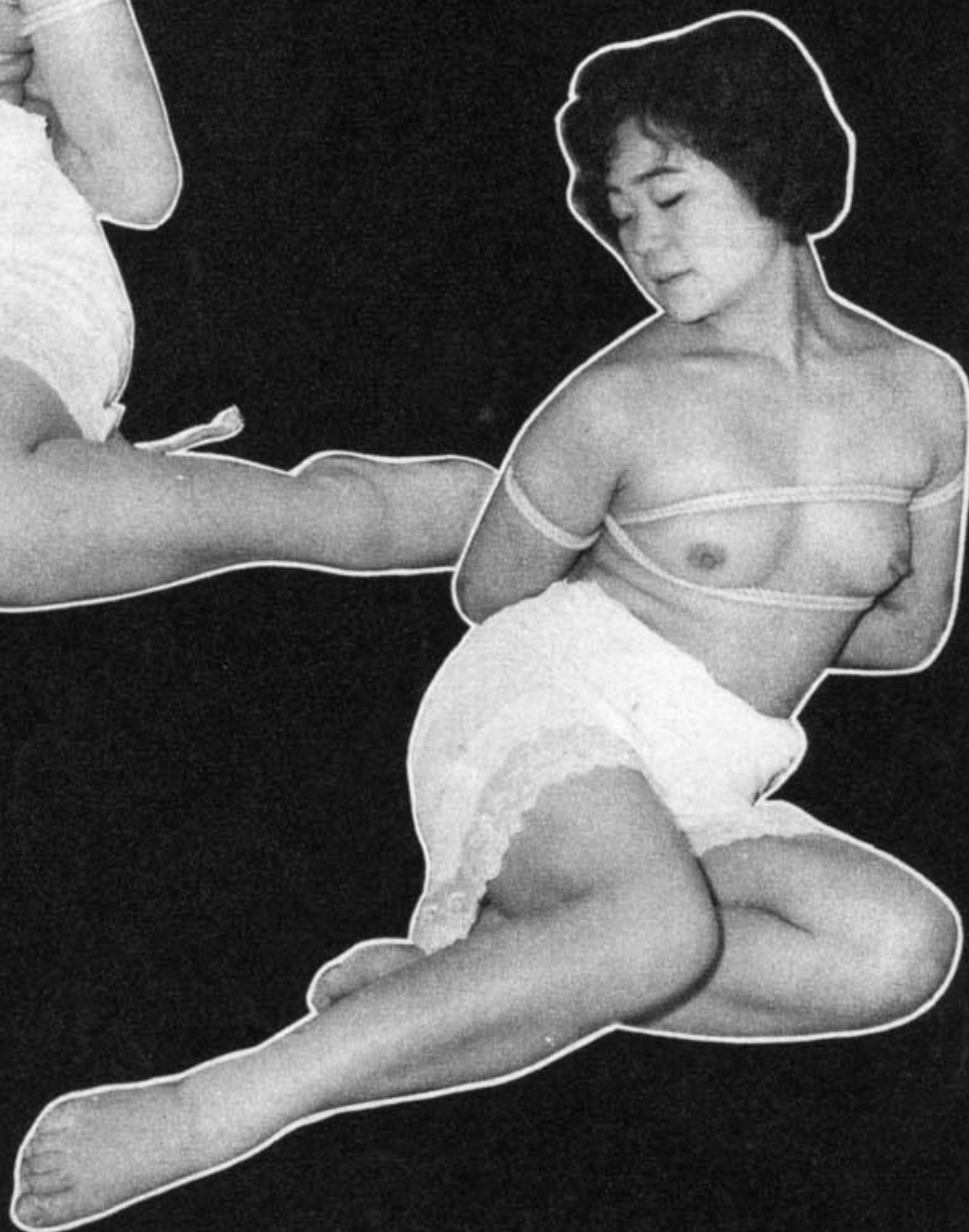
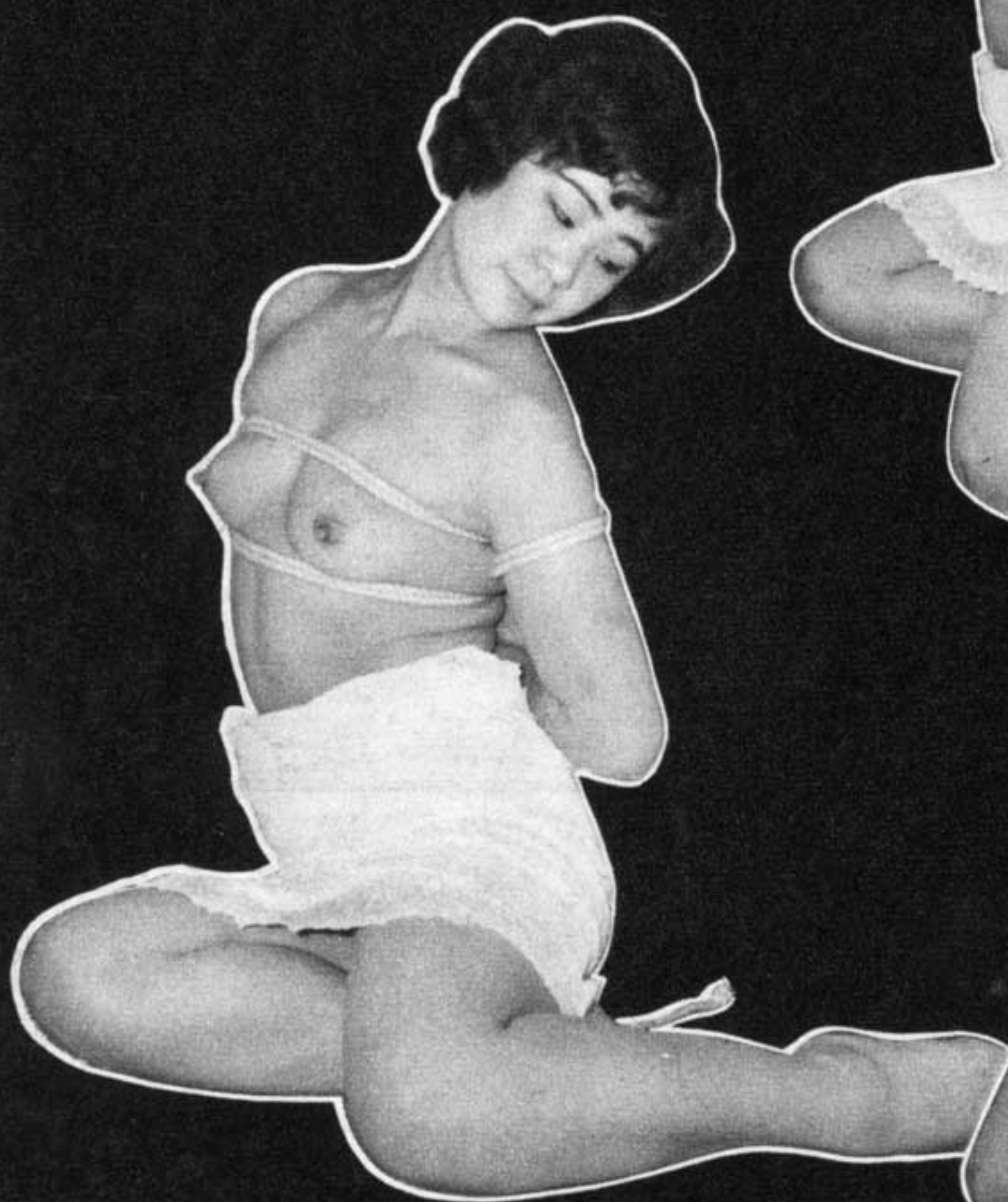
それまでだが
無残のなかからおいでる

これは あやしくも美しい
おんなの 一つのポーズ





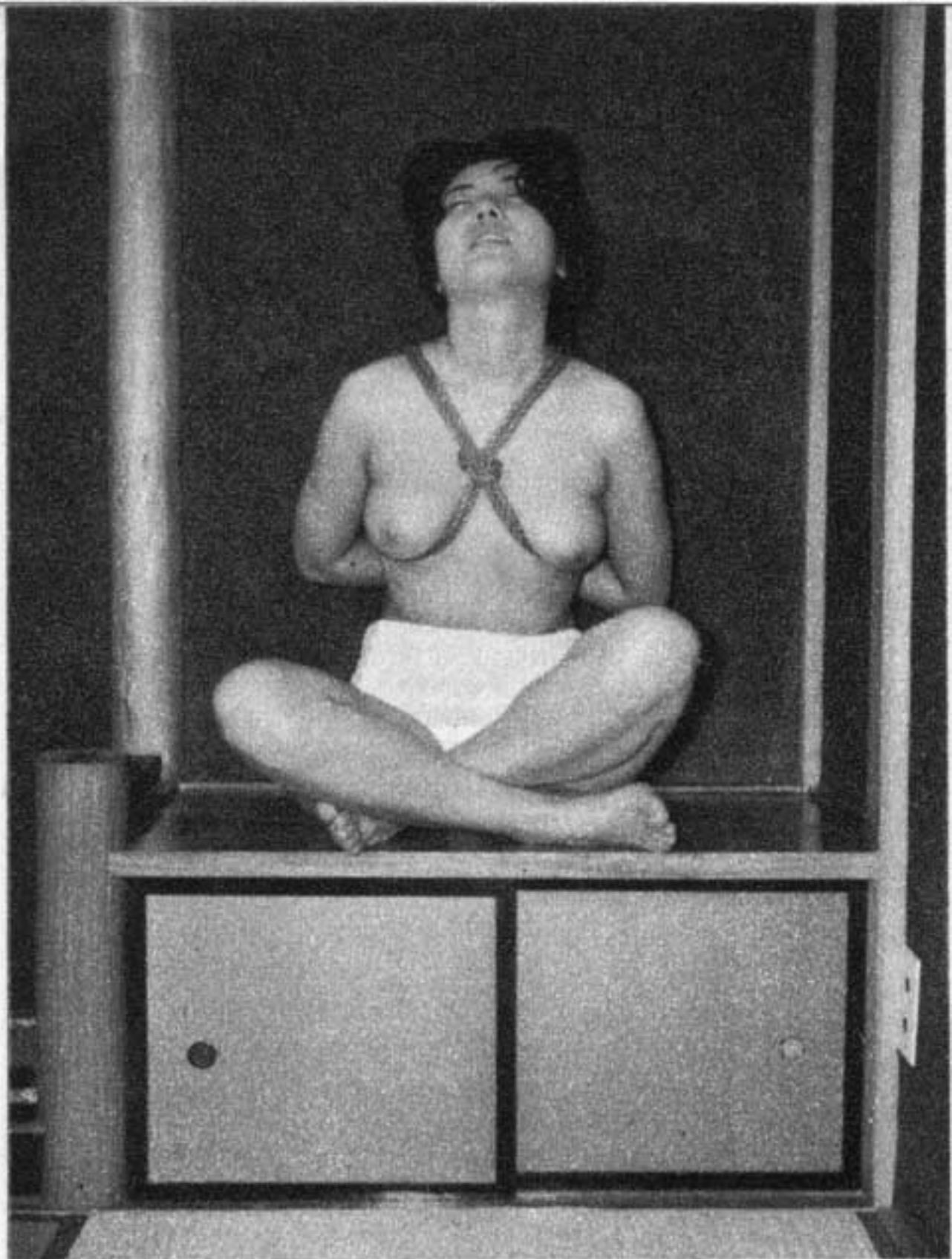
華やかな裸身



しばらく乳房が せつなくあえぎ 白い肌が しっとり汗ばむとき 女体は 一種不可思議な輝きを発する いったみれば 花道に立った人気役者のように あやしい魅力が こぼれ落ち 甘美な芽をまきちらす

女体観音

飾り棚のうえに アグラをかけた
女は しばられたホトケさま こ
のホトケさまの信者は いったい
どんな男だろうか このホトケさ
まの肌にあふれると どんな冷たい
心も燃えるし 乳房に手をのばせ
ば 石でさえ熱気をはらむという
ああ マカ不思議な霊気をほとば
しらせる しばられたホトケさま



鏡の中のナルシスト

鏡の中の わが乳房 そつとふるえて 吐息する 鏡の中の
白い肌 女のいのちをうたってる ナルチシズムの 恋の宵





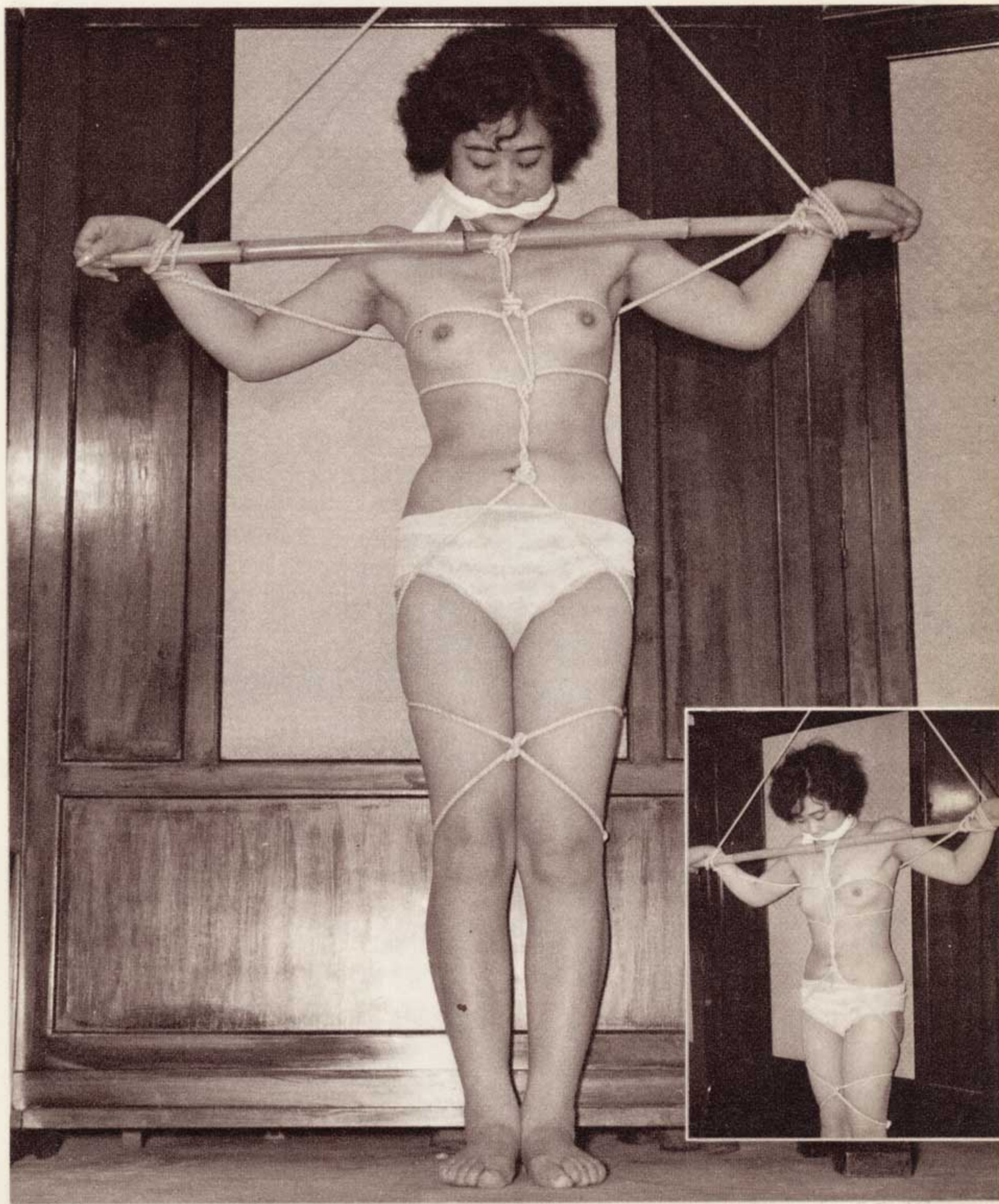
白肌のデュエット

あたしが笑えば 鏡の中のあたしも笑う あたしが泣けば 鏡の中のあたしも泣く 喜怒哀楽 すべてが同じの いわば光と影のデュエットです あたしは 鏡の中のあたしがいいわ 楽しい つまり ひとりでもふたり ふたりでひとりの ないあわさった恋のしがうみ ウラとオモテの 悲しいピエロ あたしが泣けば あたしも泣き あたしが笑えば あたしも笑う そんな奇妙なんだら模様です さて それなら 鏡の中のあたしは いったい 誰なのでしょう あたしでないあたし あたしと同じあたし ああ それでも あたしは 鏡の中のあたしが好き

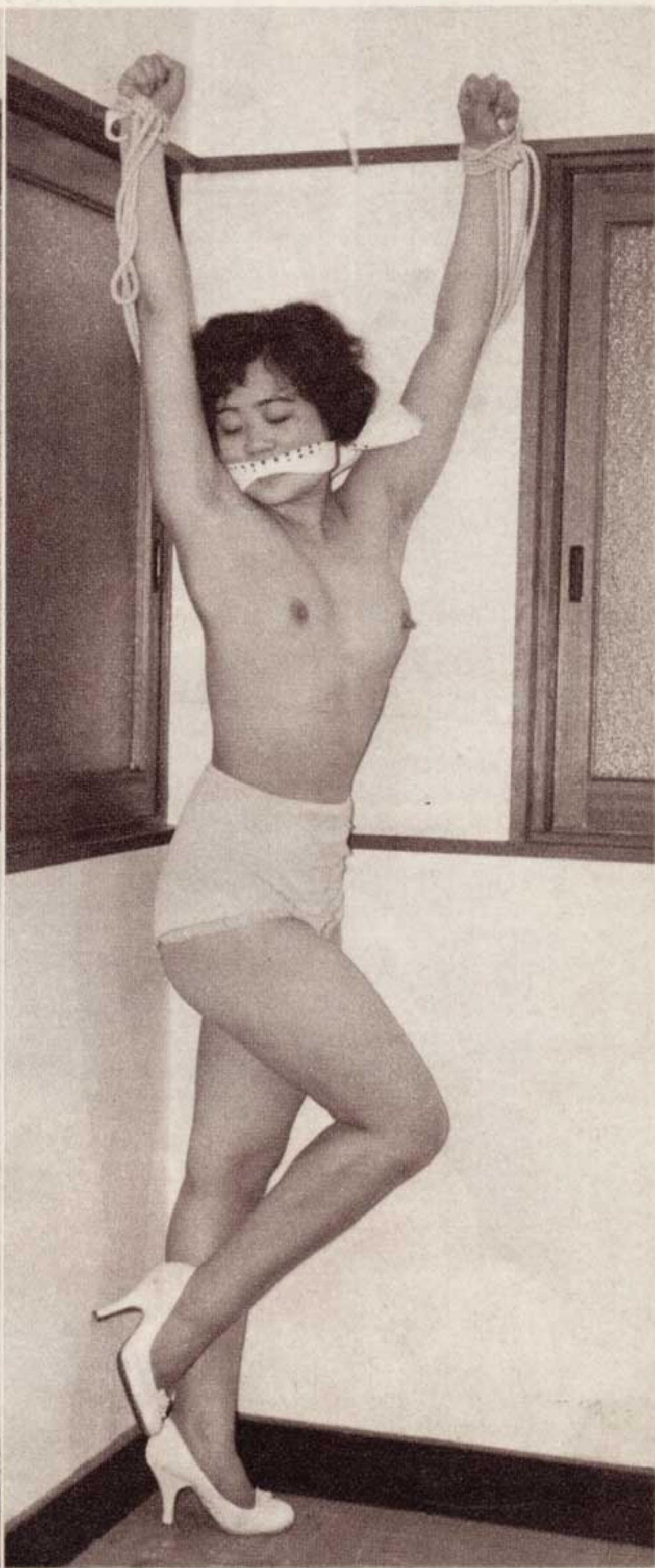
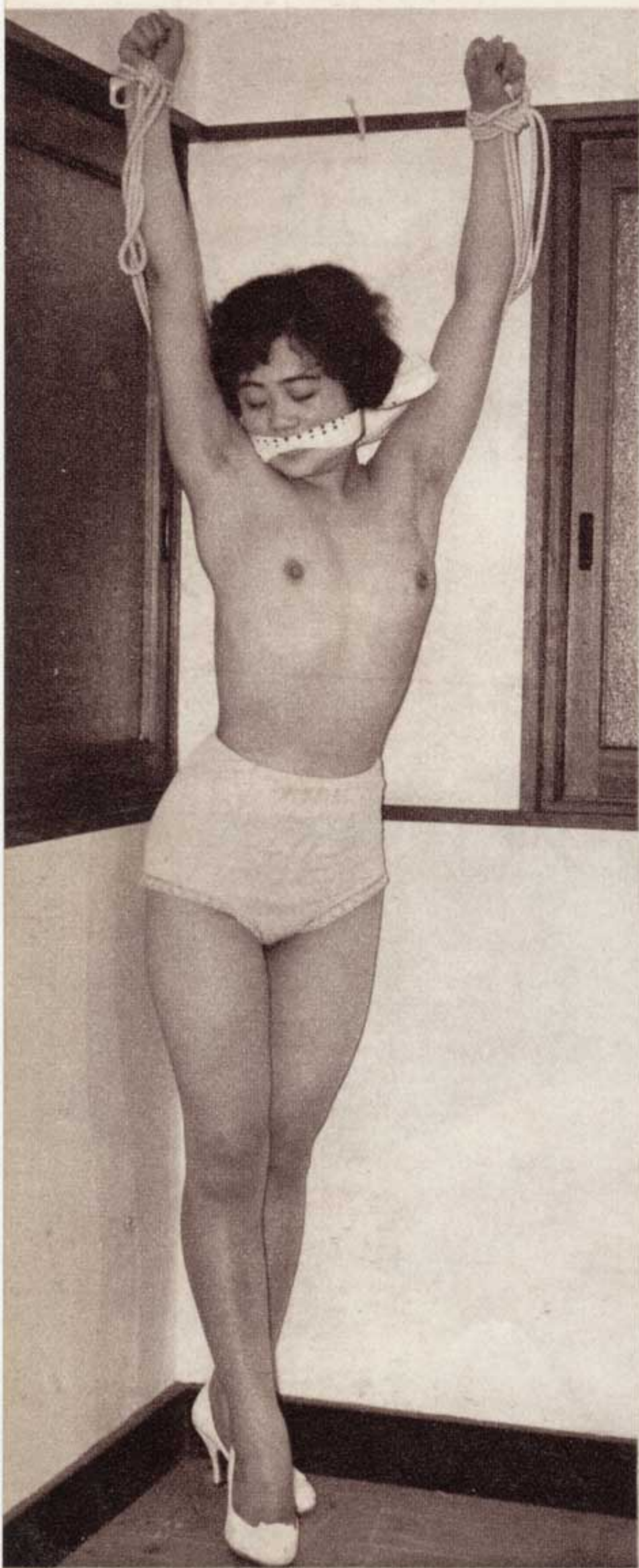


キリストは 十字架にハリツケになった
が この美しく若い女は 竹の棒をから
まれて キリストと同じ姿勢で縛られて

いる しかも 裸の柔肌に 縄がくいこ
み 手首を キリキリとさいなむ しか
も この残虐なお仕置きが女を喜ばせる



裸女キリスト



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

竹で責める





竹が腕の自由を奪い 竹がノドを圧迫する 竹が縄と組み合わされたとき 女は ひどく痛めつけられる その苦痛のなかで 女は のたうち うめき そして歓喜する その歓喜が 徐々に高まり ふつとうして 女のからだを 快美な感覚が 電流のように つらぬく 身ぶる いしても 耐えがたいような官能の波が うちよせる



長椅子のポーズ



しばらくして 長椅子に押しつけられて この不自然な苦
しい姿勢で おんなは あえぎ 身もだえして 濡れる







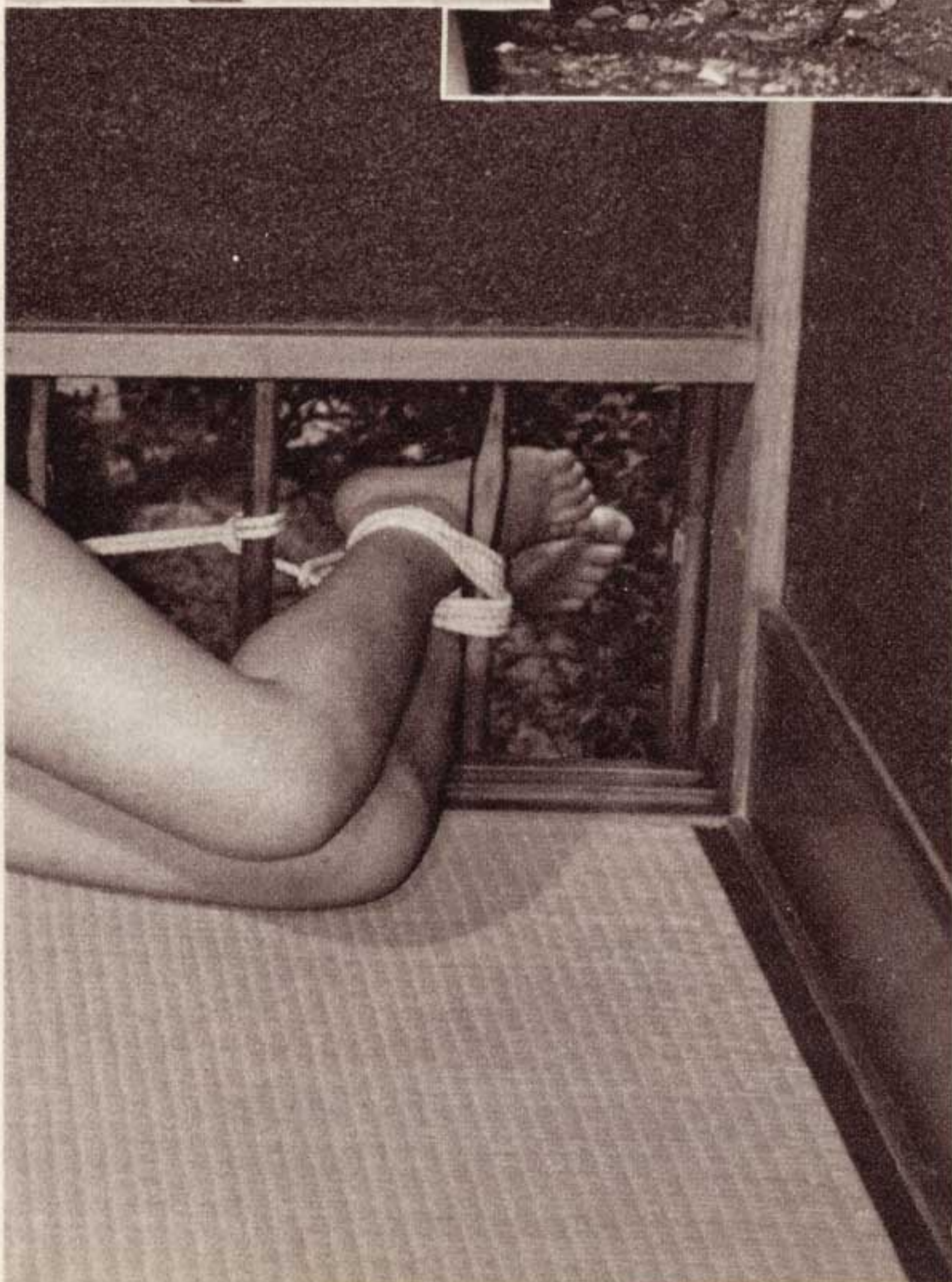
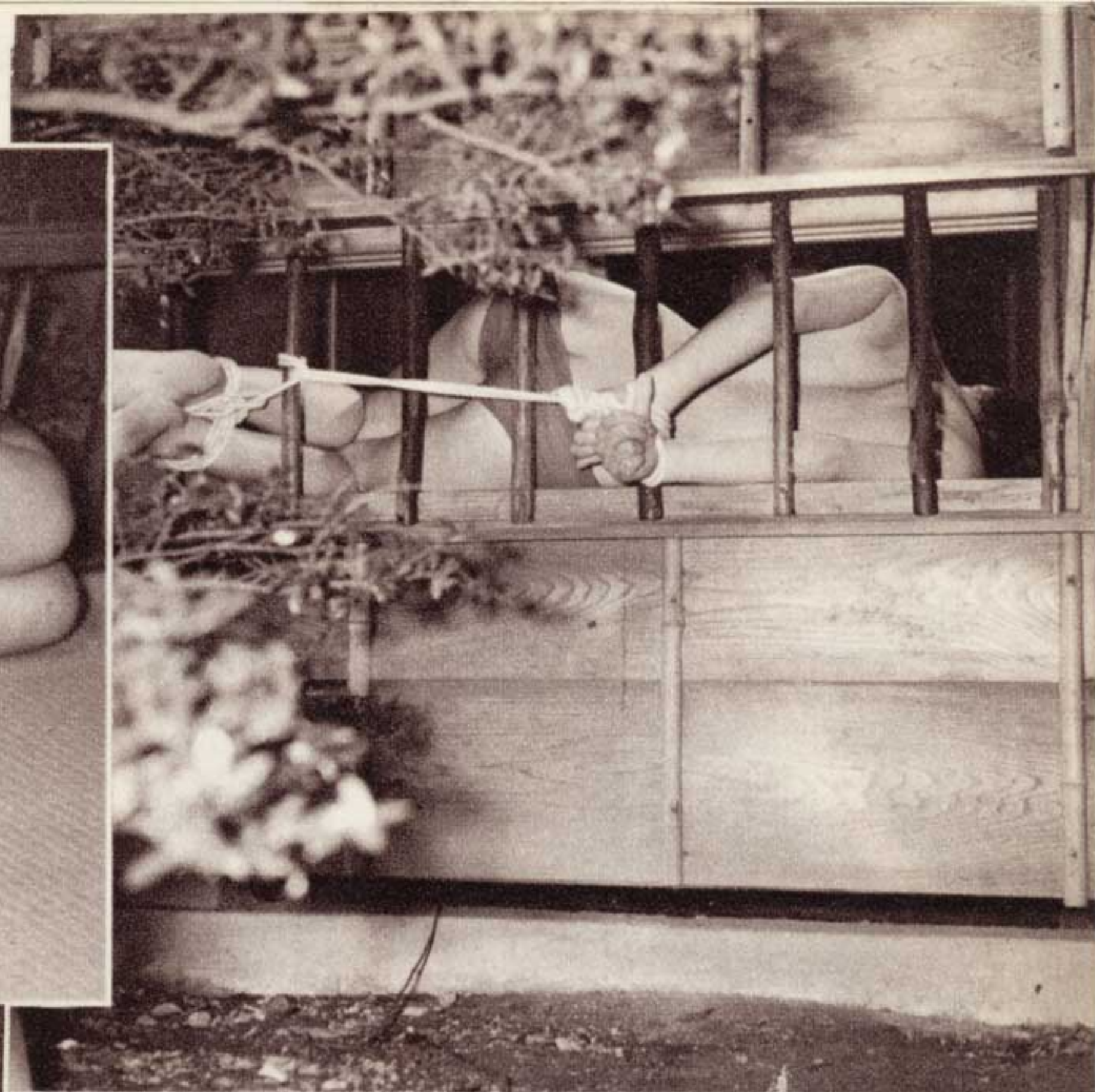


投げだされた女

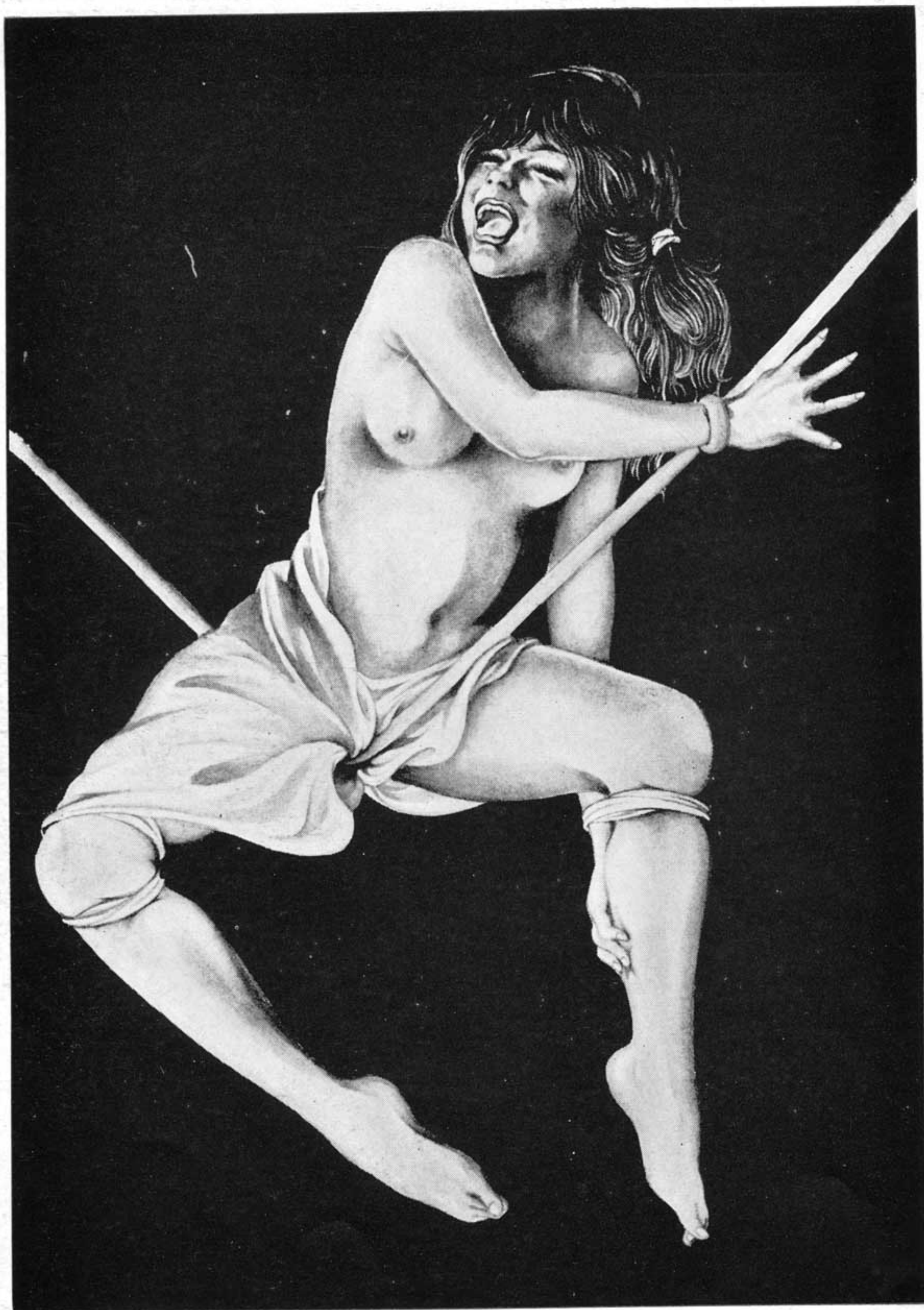


もだえる女体

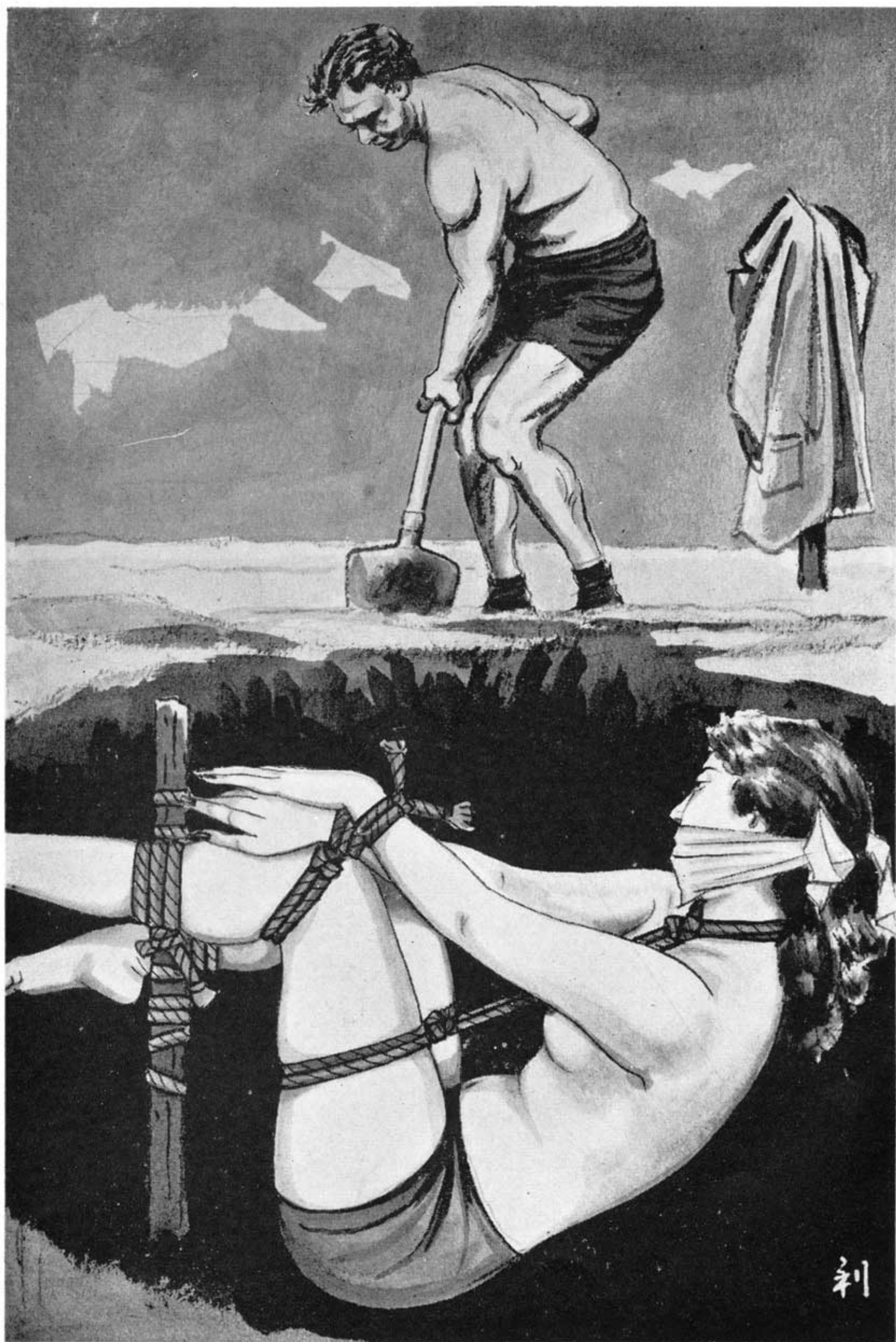
部屋の隅の小さな窓 その窓のタテ格子 その格子に縛りつけられた女体 その女体の白い肌 その白さが うす明かりに ほのぼのとおい そのにおいのただようなかで女は喜悦のさけびをあげる そのさけびは 苦痛と快樂のまじりあった いわばプラスとマイナスの反発しあう声だ







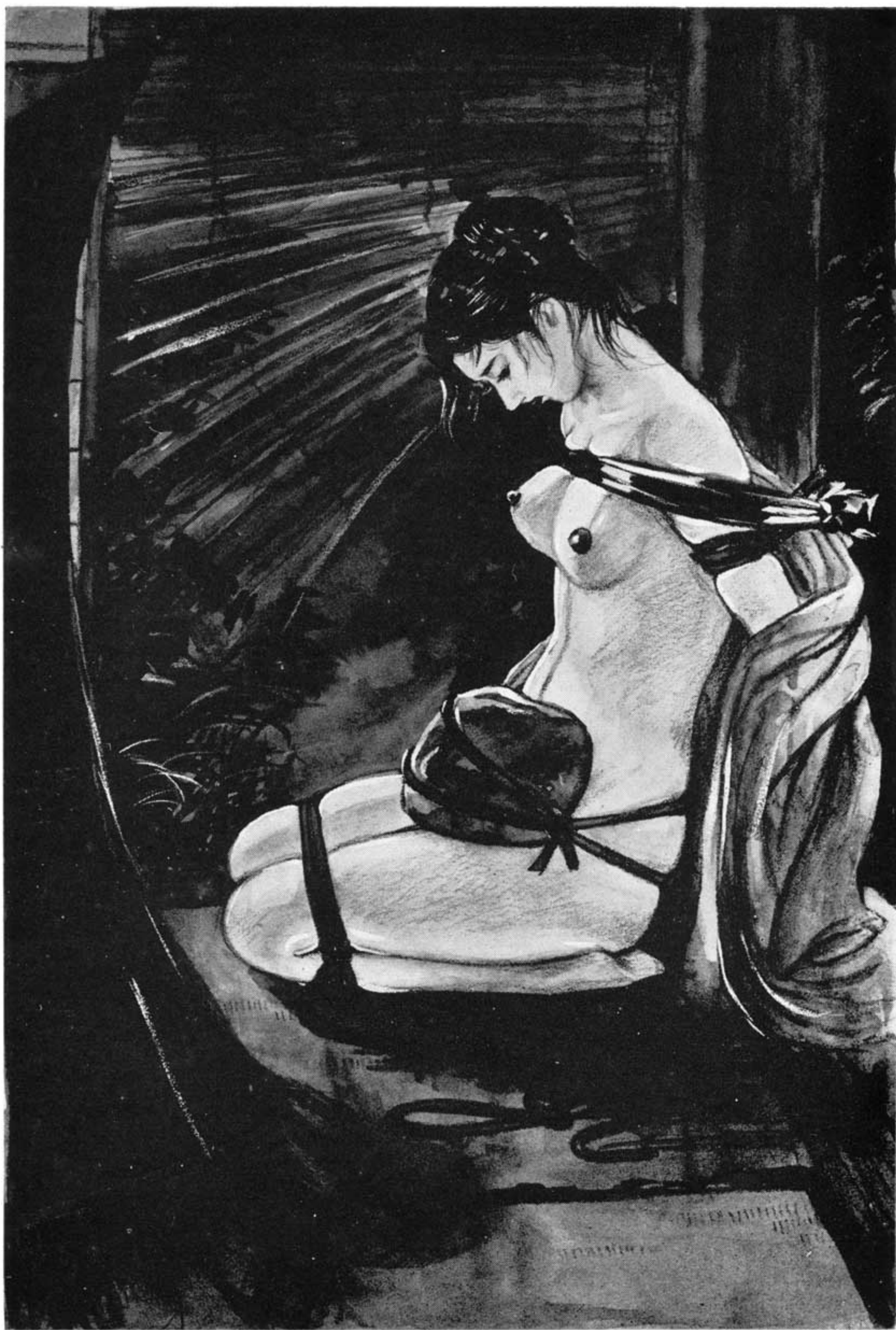
被虐のロープ 綱を乗馬に見たてたのだろうか 裸で宙づりされて 田上恵子・え



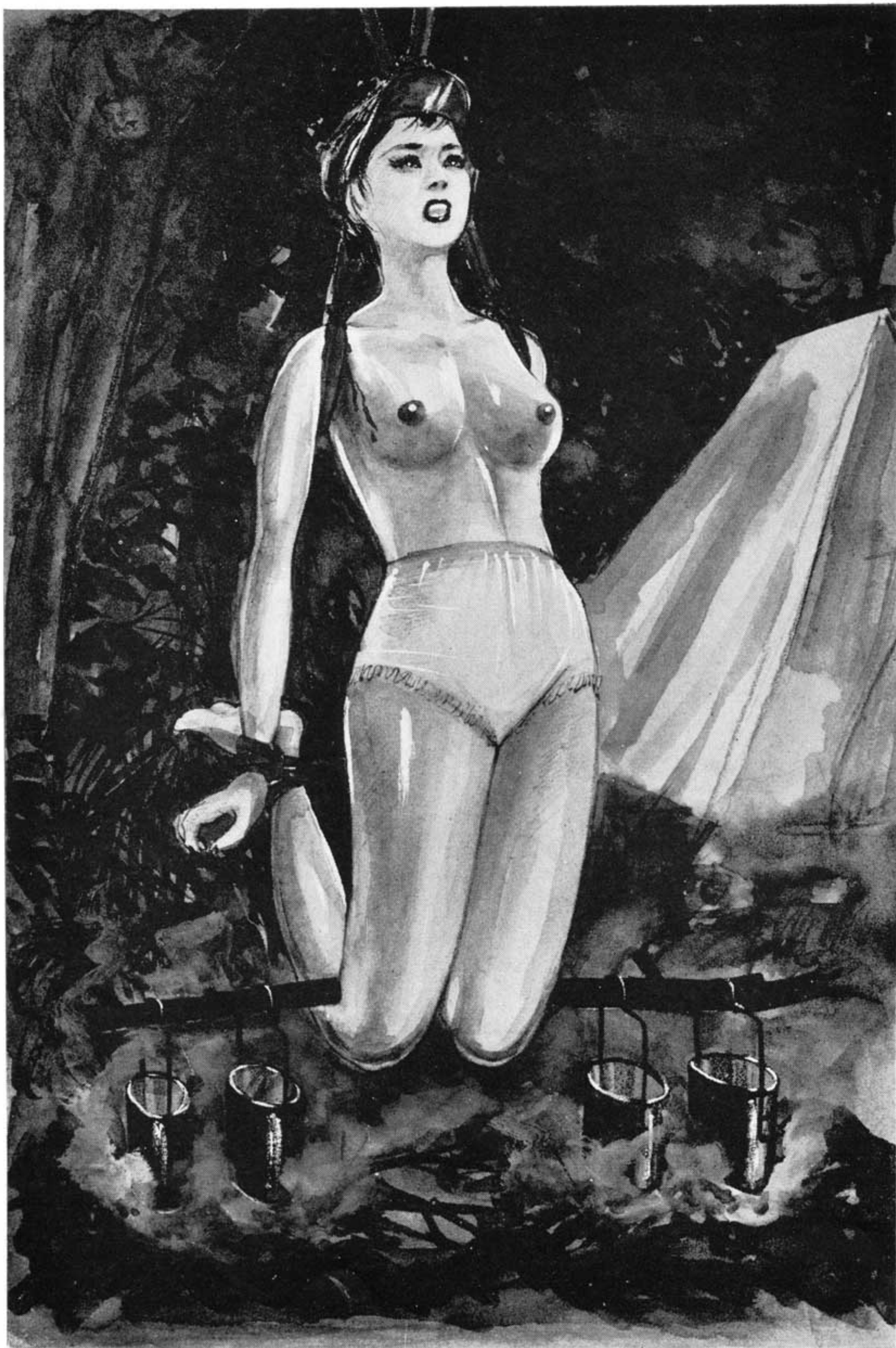
生き埋め 穴の中の杭に手足をしばられ生きたまま埋めるとは 小田利美・え



車輪しほり 歯車が噛み合わされると 縛られた裸女も回転する 小田利美・え



石を抱いて 夏座敷の角の柱に 石を抱かされて縛られた無残さ 江馬美久・え



飯盒ホルダー 飯盒炊飯のために 女は木につられ 飯盒を支える 江馬美久・え



竹 責 め 身動きできないほどがんじがらめに竹にくくられて 小田利美・え



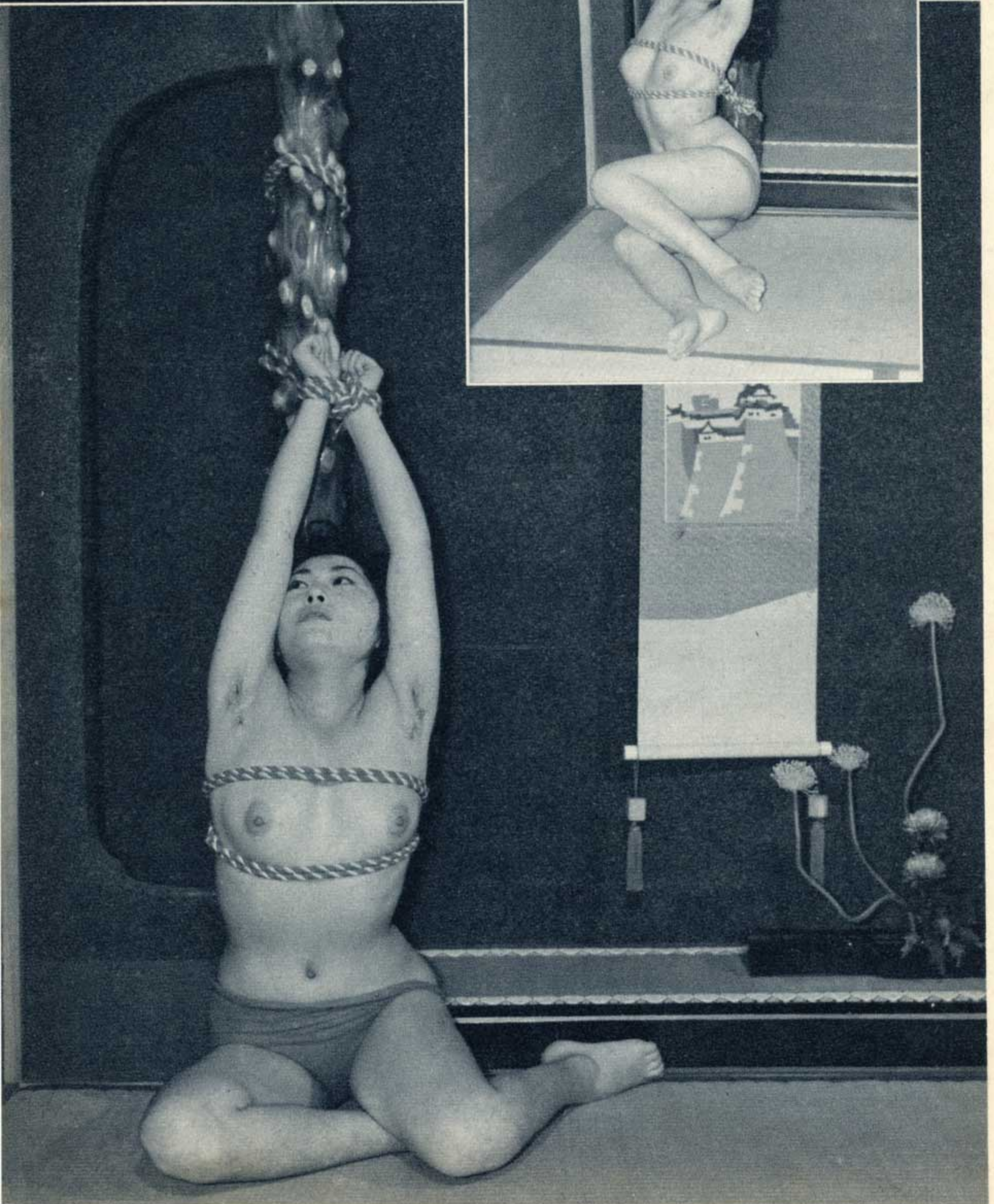
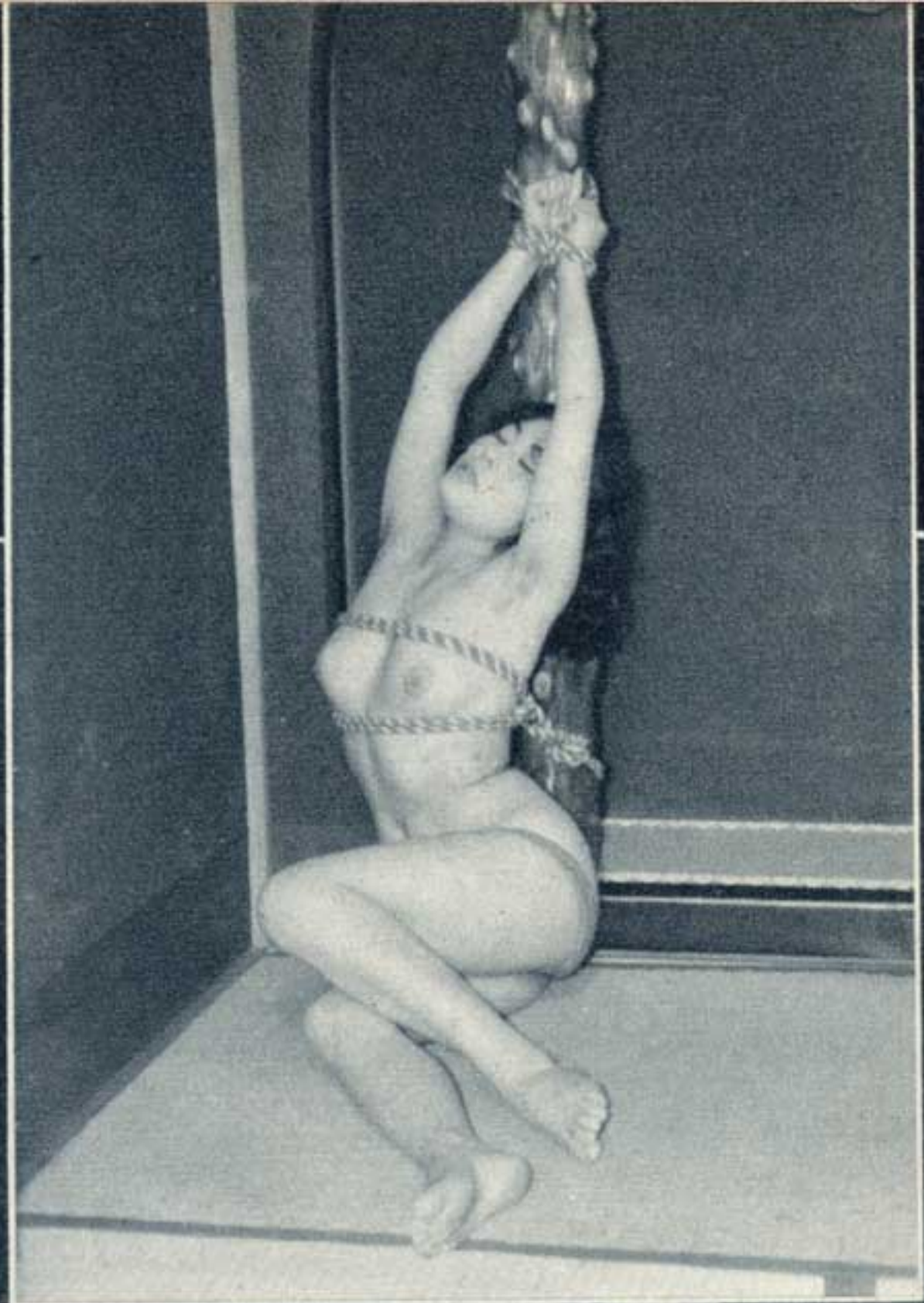
土人の餌食 美しいえものを捕え 土人は美味の期待に乱舞する 小田利美・え

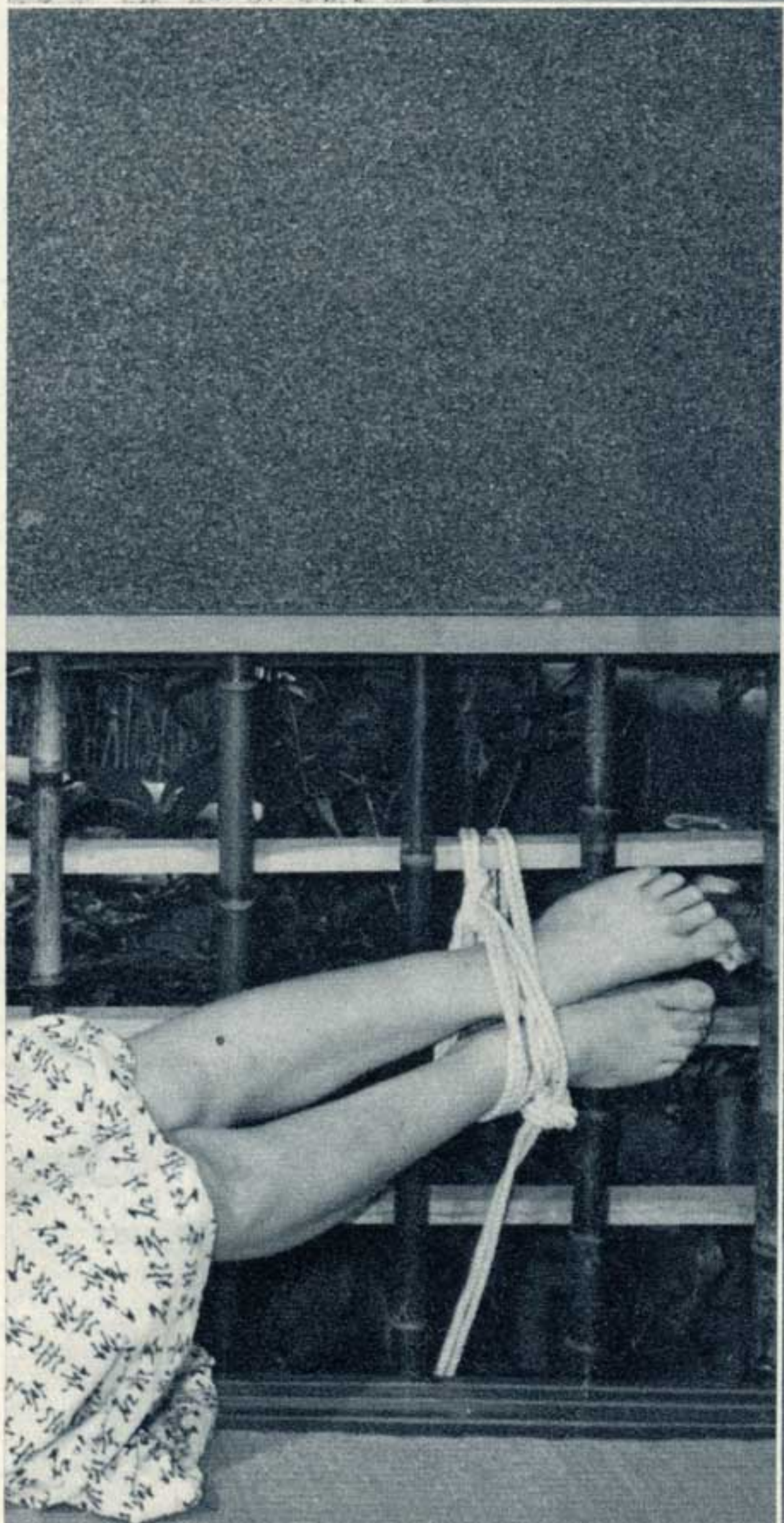


風鈴づり 鉄の輪につられた女体は 夏の風物詩の風鈴である 田上恵子・え

柱しばり

女体のなかには 奇妙な生き物が
すんでいて 悦虐の待ち望む





格子責め

手足を格子に縛られた裸
の女は 網にかかった人
魚のようになまめかしい





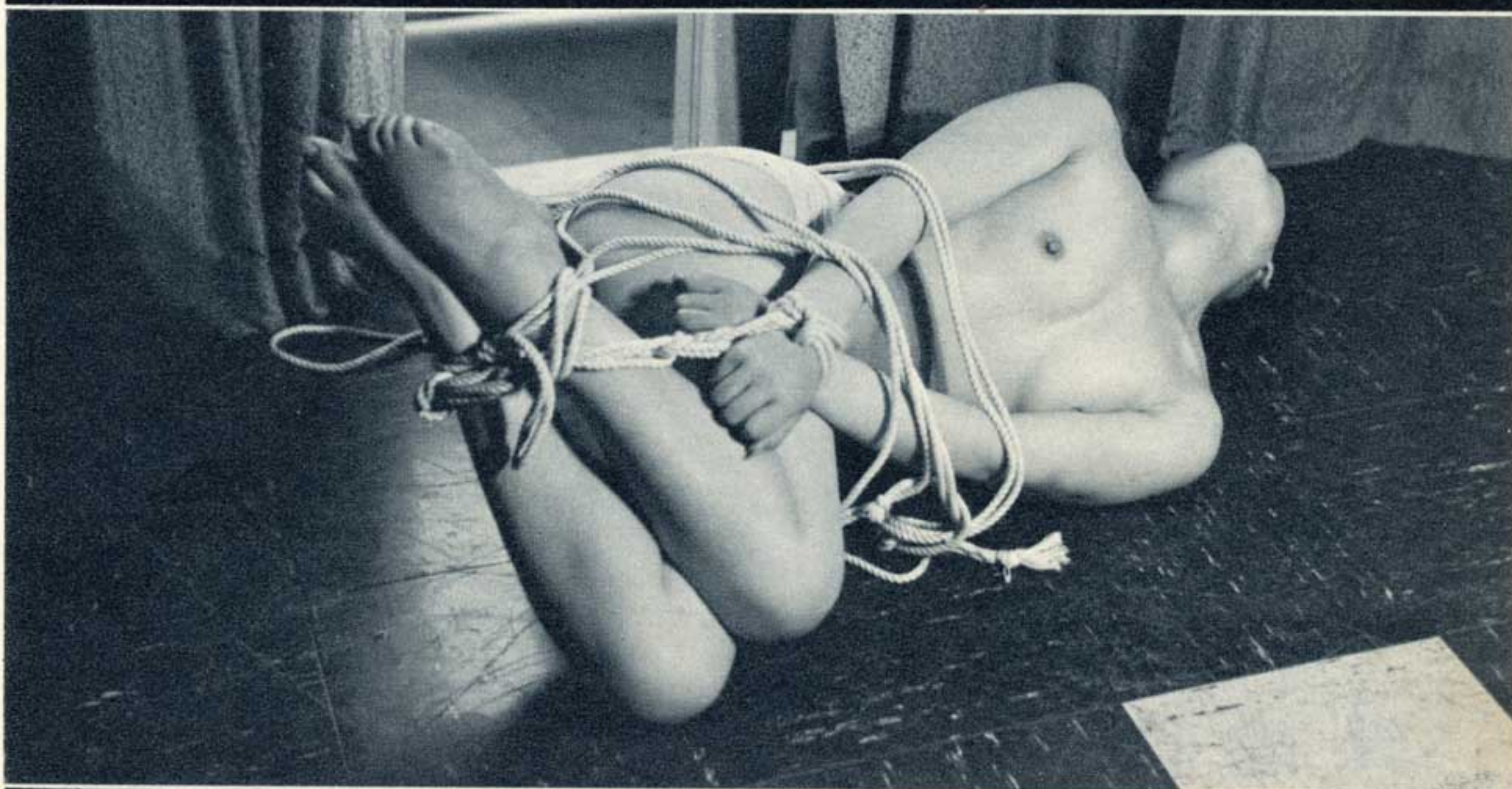
床の間に 時ならず咲いた花 それは緊縛の裸女 もがき もだえ
でも 不自由な世界から逃がれるべくもない この不当に限られた
世界には だが えもいわれぬ歓喜の泉がひそんでいるのだ 女よ



異虐図絵

椅子の囚人

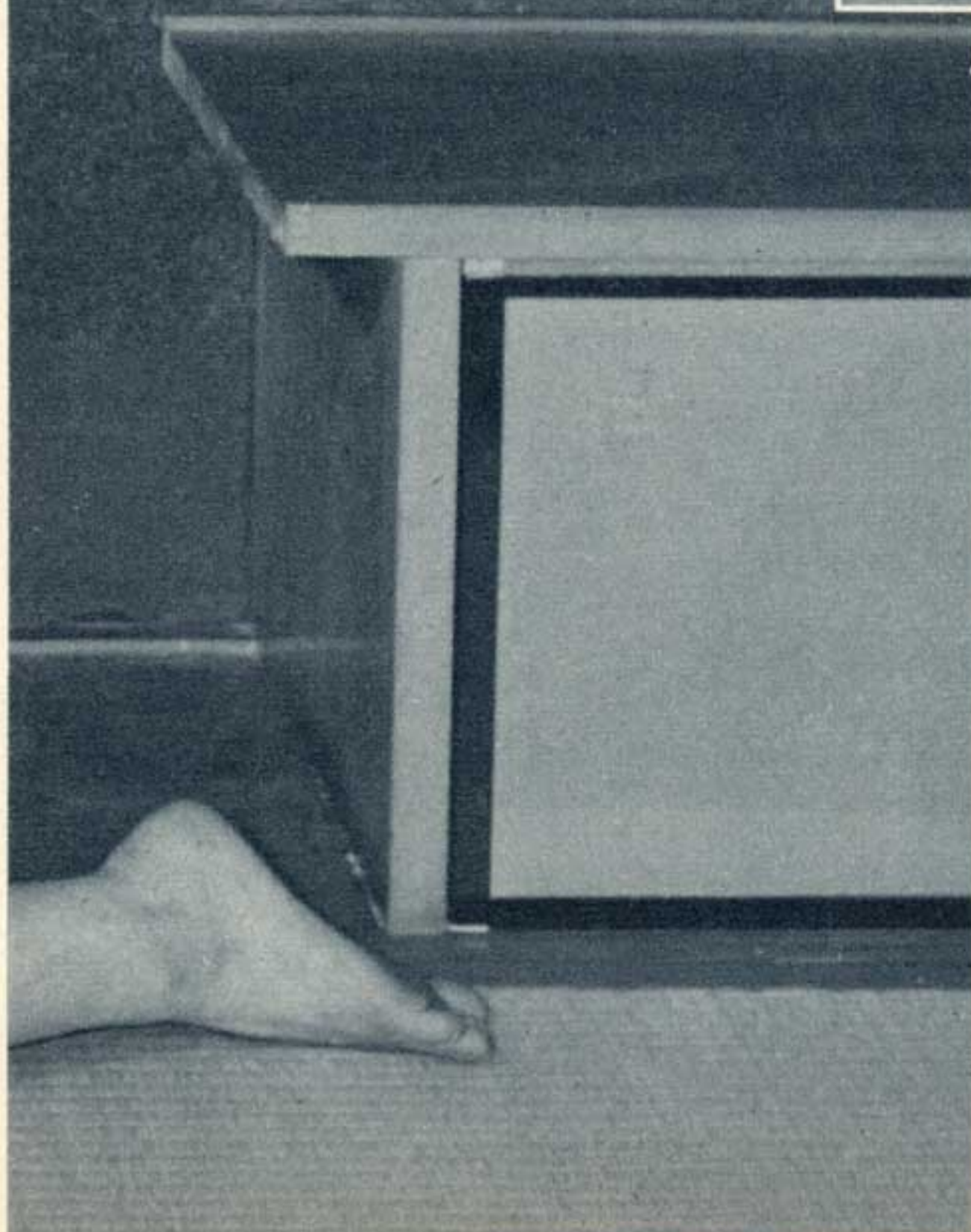
いましめの身を 椅子によ
せて 女は せつなく吐息
する その吐息から生まれ
る 多彩で甘美な 女の夢





嗜虐のポーズ

女のからだの奥には 嗜虐の心情が
 ひそんでいる 悪魔の命令のままう
 ごめくのか 神の手によってひき出
 されるのか とにかく 女のこころ
 とからだを とんでもない方向にひ
 きまわす力をもっている しかも女
 は そのことを 常に期待している



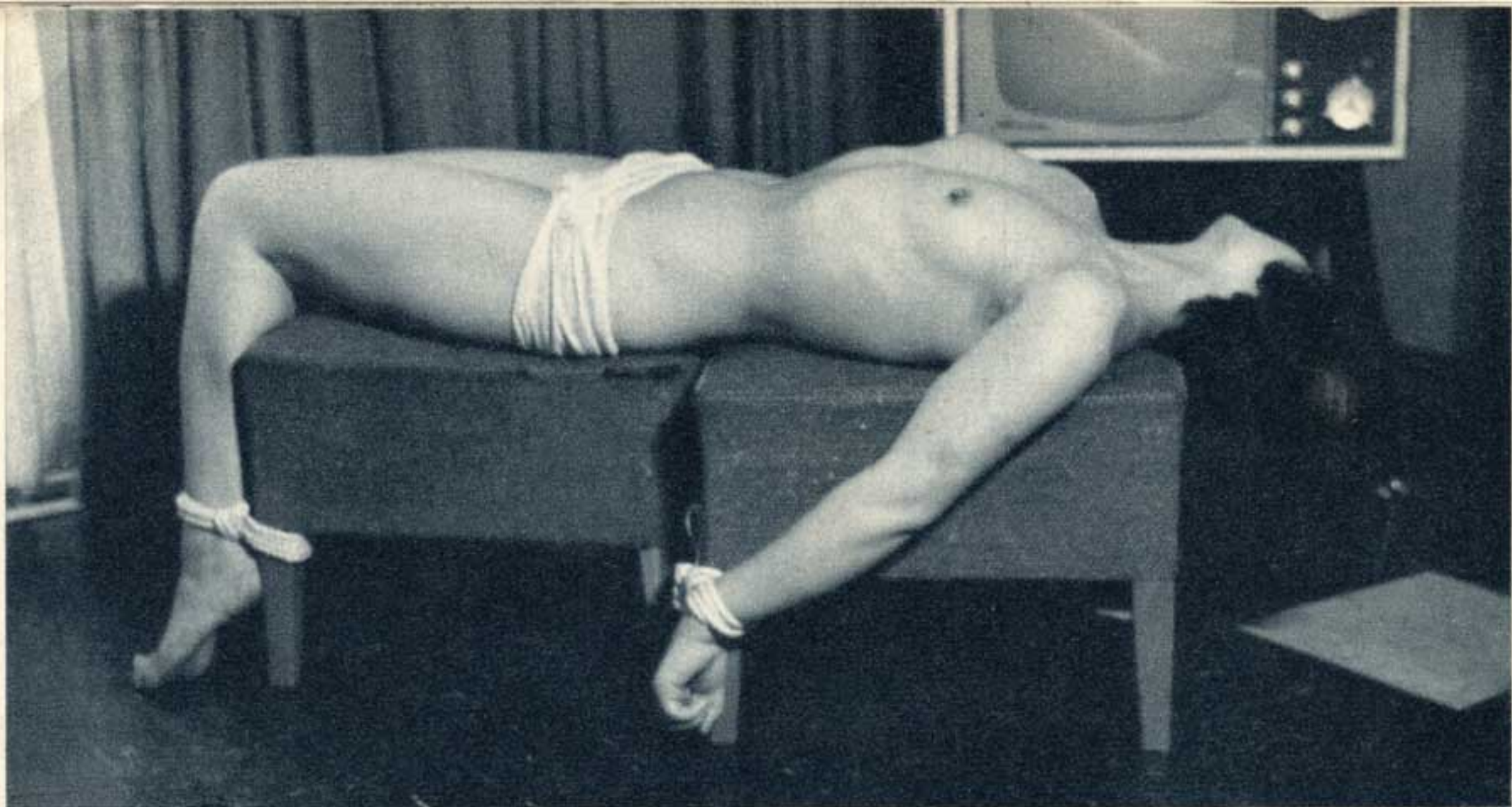






衣桁つるし

衣桁は 衣類だけかけるものでない 女の足をくくりつけ
手をつりあげ 女をもだえさせる道具にもなる その逆づ
りにされた女体が 奇妙な色気をただよわせ 妖しい雰
気をまきちらす 白い肌が蛇身のようにくねり ぬめぬめ
と ウロコのようににぶく光る 密室のしじまのなかに
ひろがって 女体をすっぽり包む 嗜虐への誘いの瞬間！



静かなる責め

ひる下がりの洋間の一隅 女が椅子にしばらくつけられて ひっそりと 次の仕置きを待っている いったい誰が 彼女を責め 彼女に声をあげさせるのだろうか





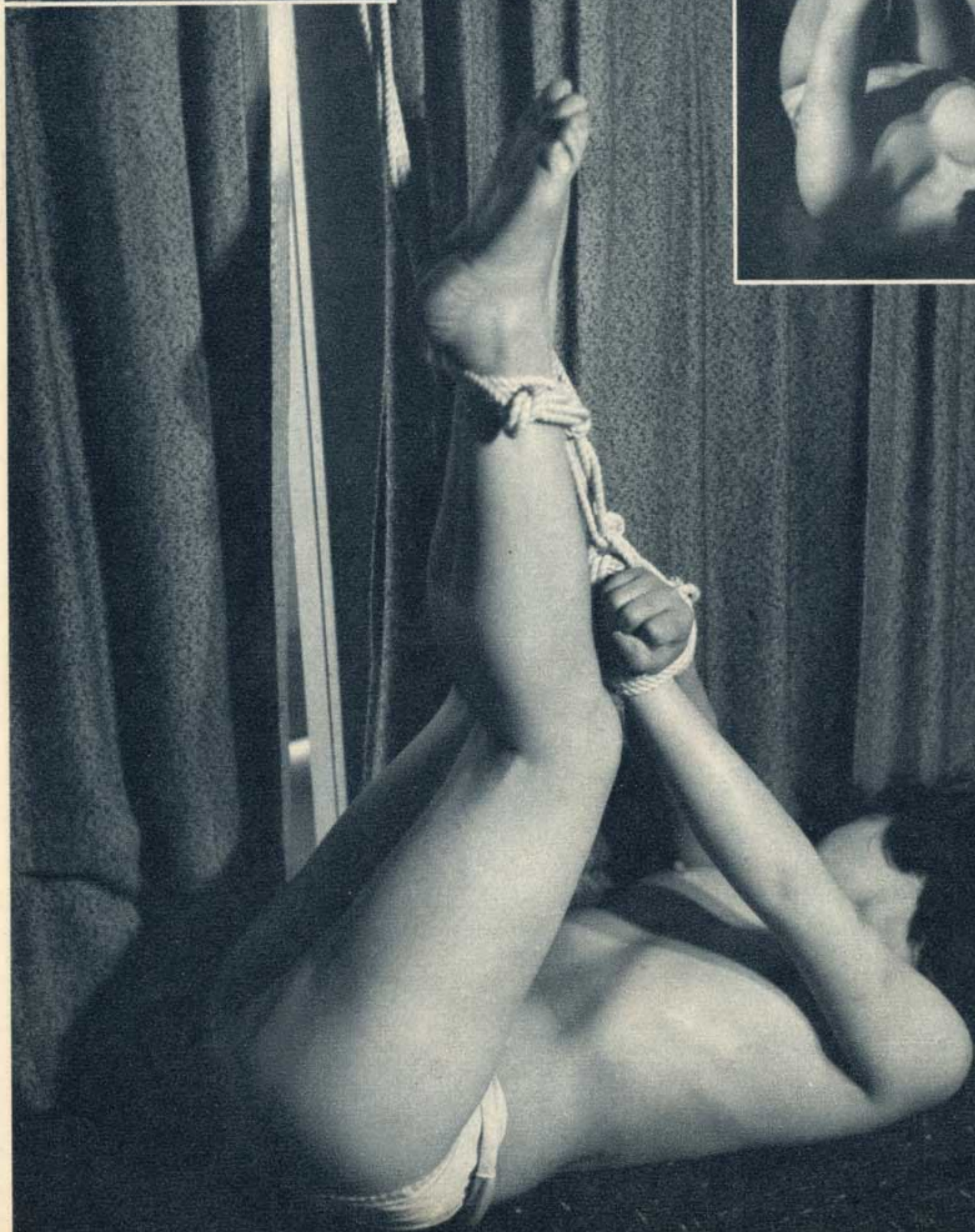
庭園の憂愁

人気のない庭園の敷き石は冷たい シュミーズ一枚の あられもない姿態で その冷たい石にすわらされた女は 上半身をむき出しにして あわれ とらわれの動物 縄が乳房をしめつけ 布切れが口をふさぐ 憂愁に満ちた女の表情に うすら日がちらついて ああ いまから 何が起こるのだろう



つり女

奇妙なもので どんな
姿態をとらされても女
は 喜びを見つけ出す

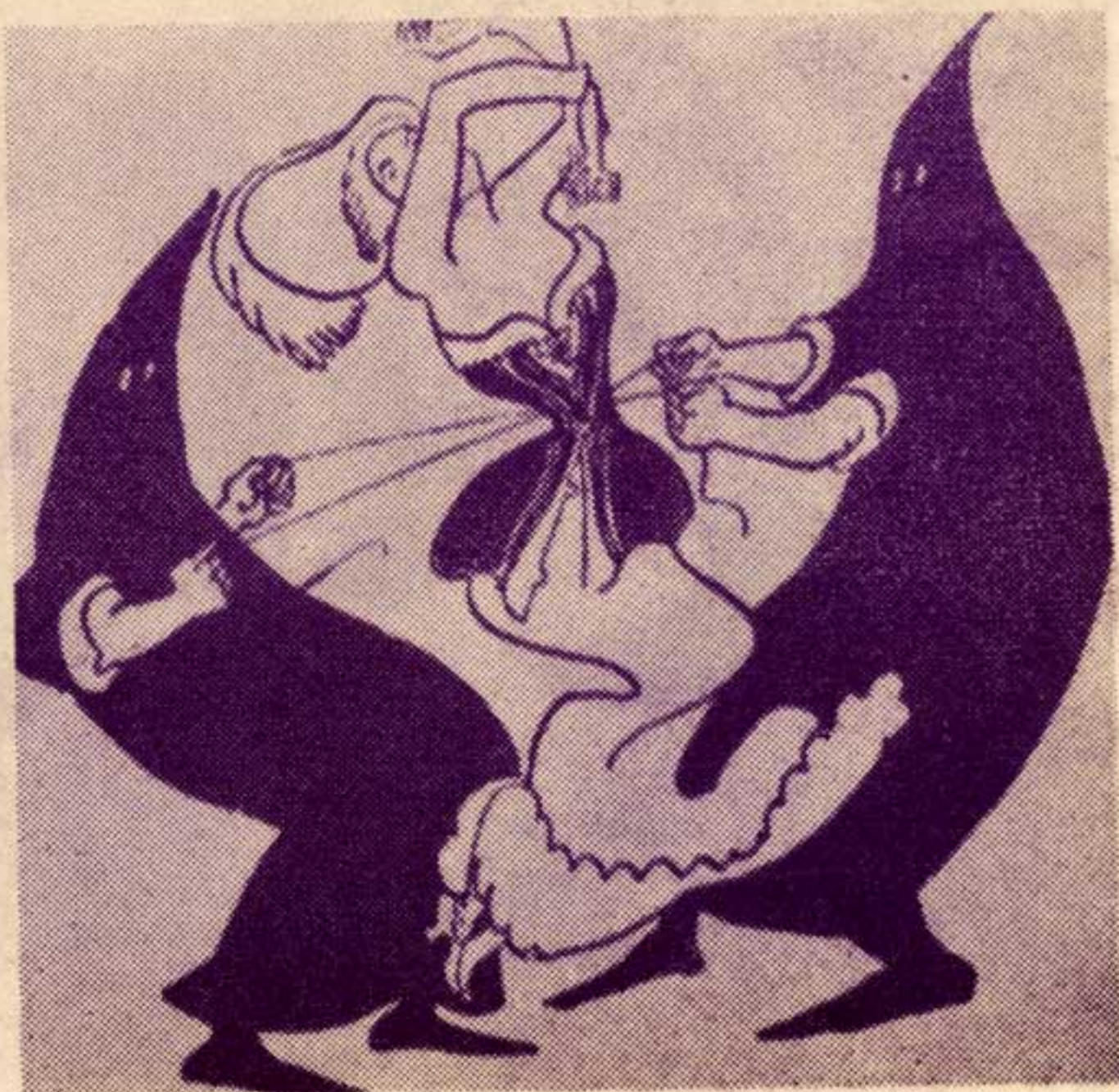


コルセットをする女たち



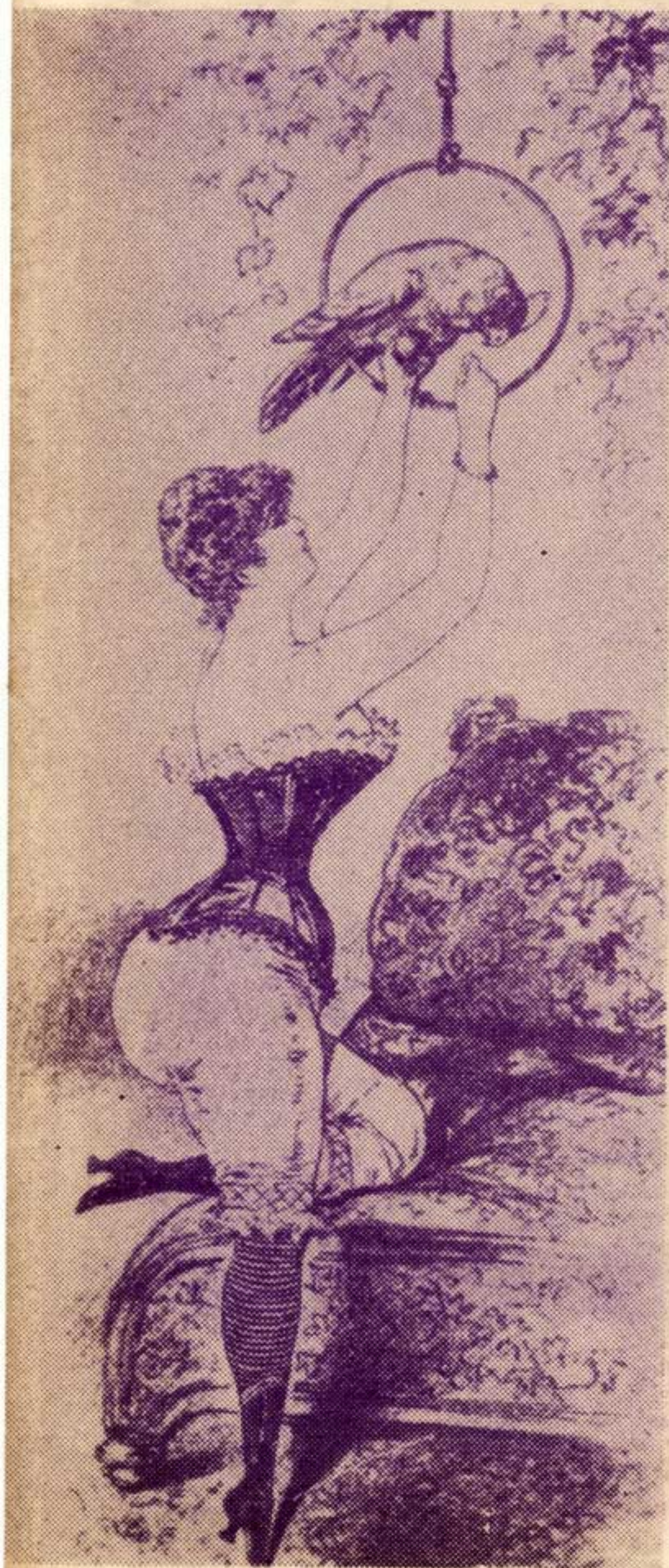
L・マルテストのペン画『コルセット・世紀末』(フルフル誌より)

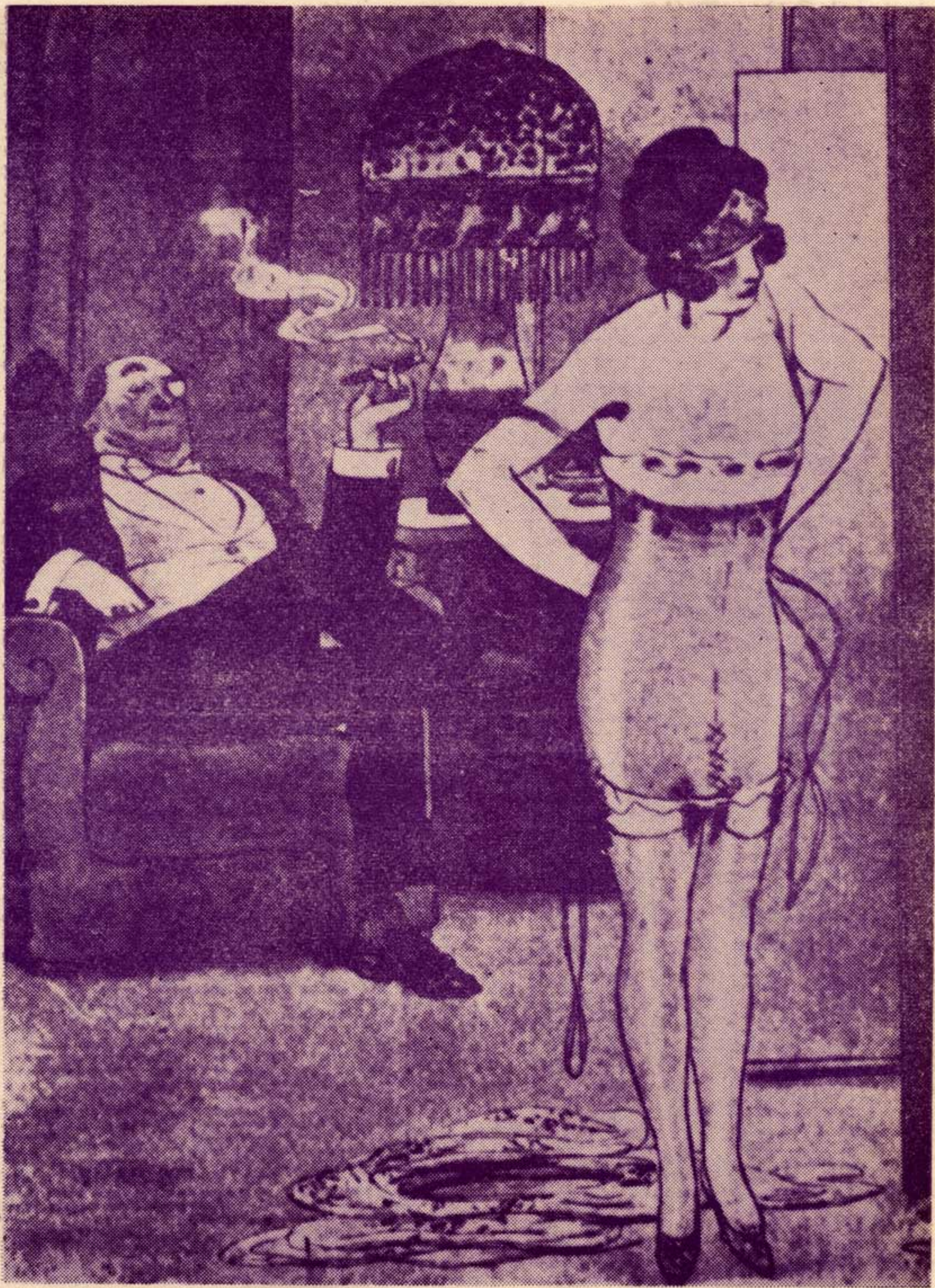
腰細ハチのようにくびれた胴が 美しい女性の肢体だという
 それなら 直径十五センチぐらいに胴をくびるコルセットは
 女性を痛めつけるのでなく 美しくする道具なのだろうか
 とにかく コルセットは 女を 美しく魅力的にする
 そして女は 美しくなるためには どんな苦痛も耐え忍ぶ



上||蜂腰はこうして作られる(1
 830年の諷刺画)
 右||新式の拷問——ヒモでギュー
 ヲと締め上げたときの苦痛、シユテ
 ルン画(『愉快な新聞』から)

下右||私によく似てる
わ——M・ブリューニク
筆のさし絵
下左||耐え難き豊満さ—
—1800年代の女性美の
理想(1880年刊のウイ
ーンの漫画誌より)

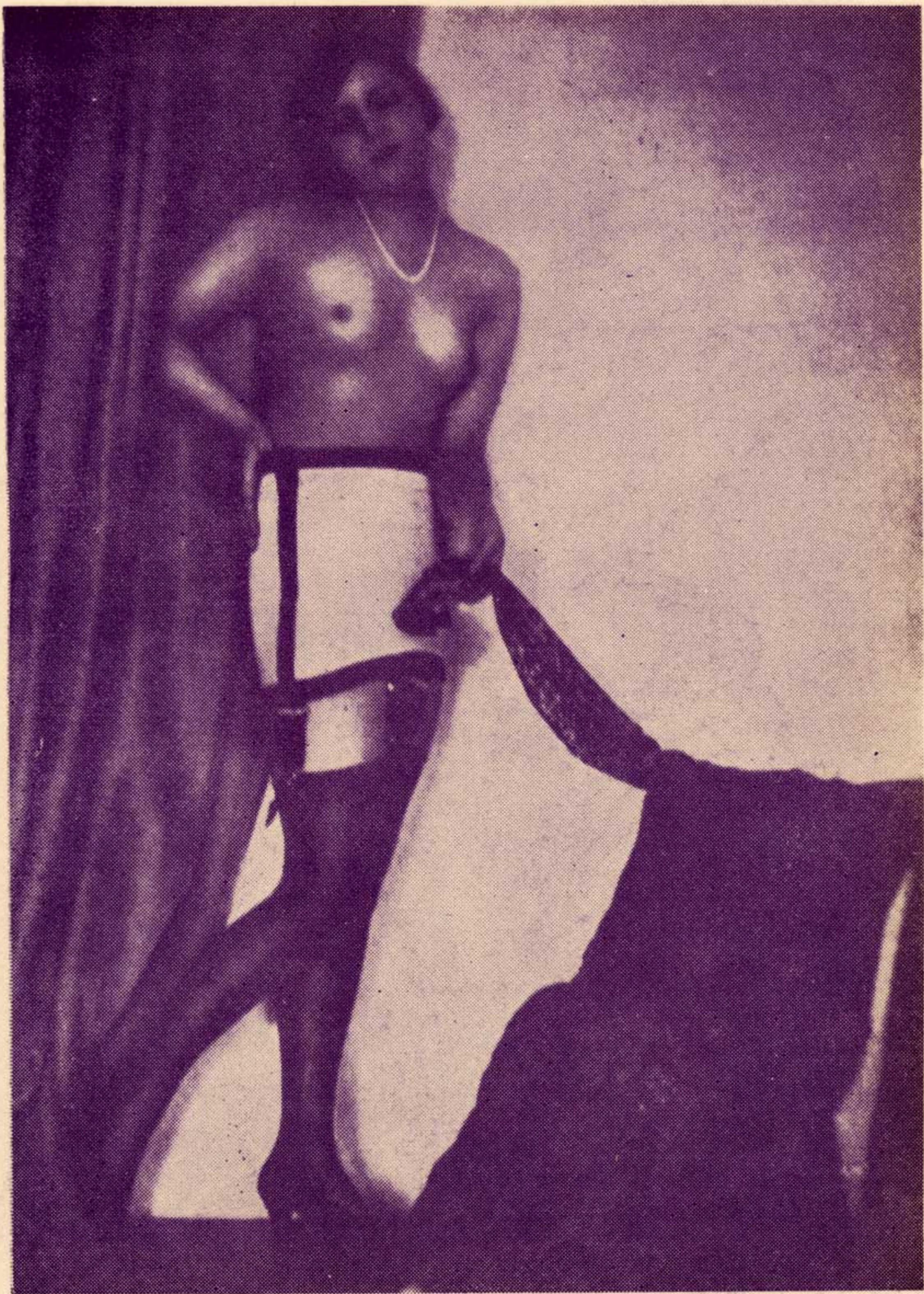




昔のようなコルセットは流行らない——A・ギュイヨーム筆（ル・リール誌より）



世界博覧会？——小世界が全部見えています。興味ありませんか？ H・ジェルボウ筆



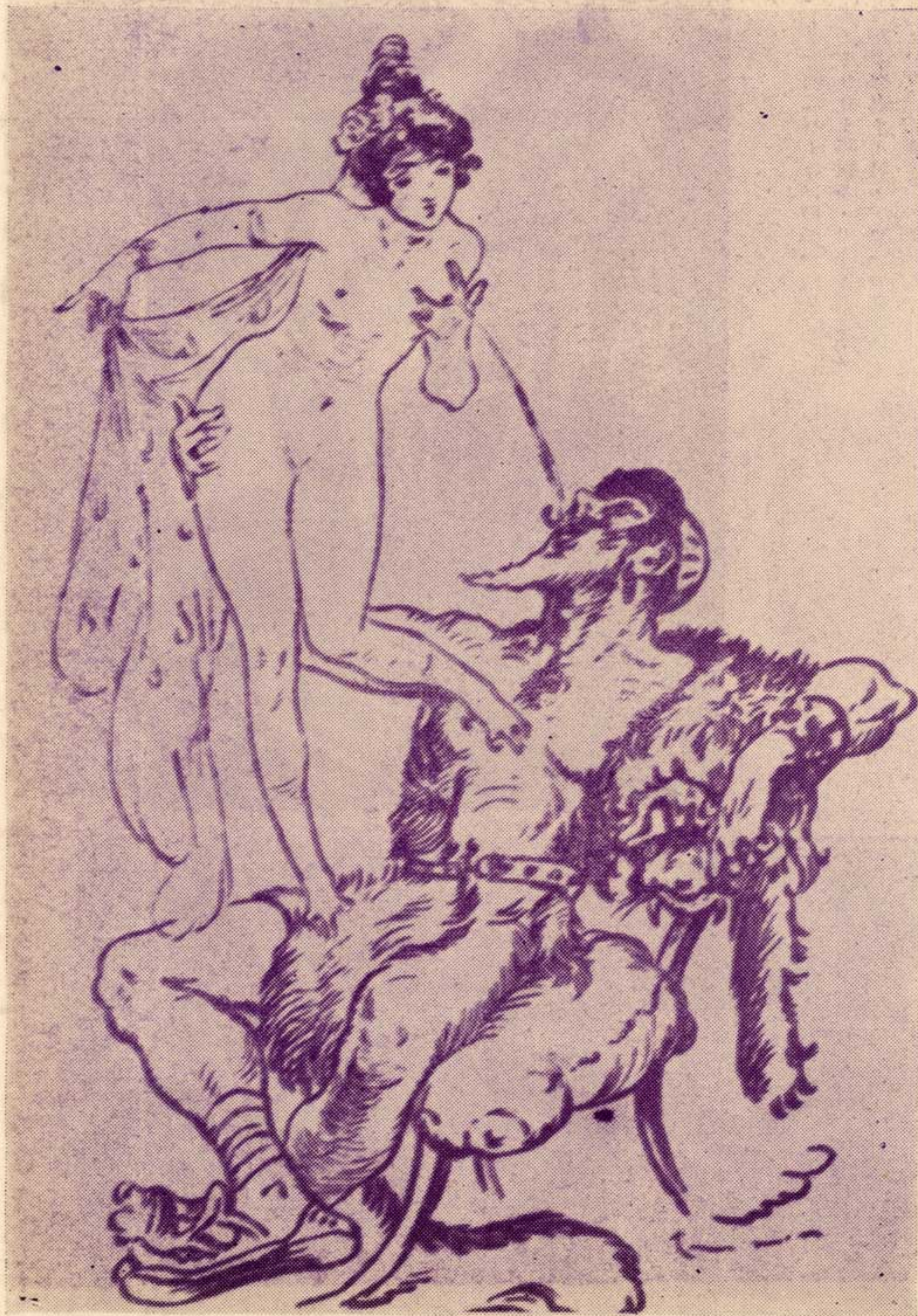
「きょうはこのコルセットでいいかしら？」——マナッセ作の写真





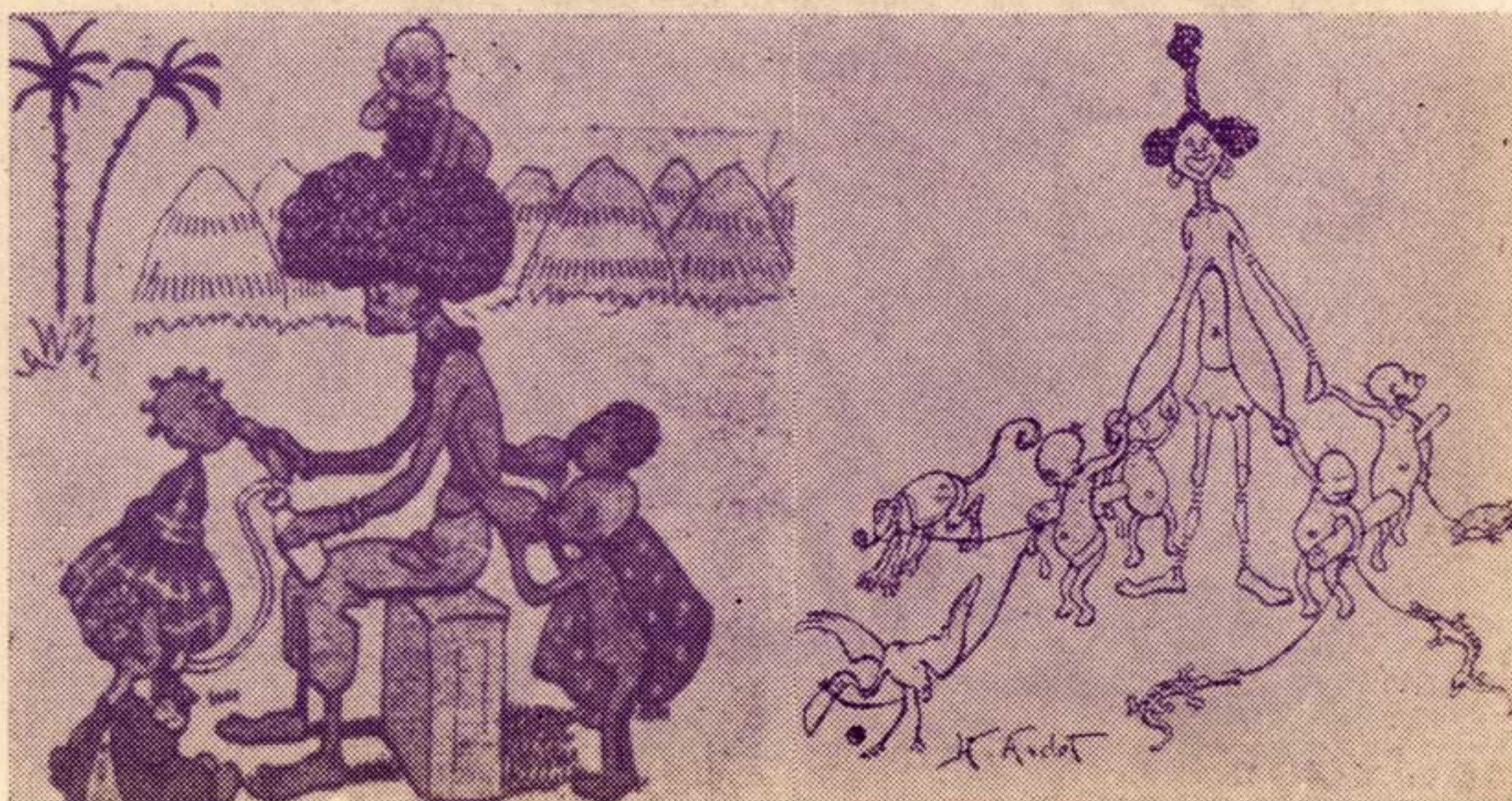
花に乳をやる女

乳房をしぼる女たち



甘露の泉——1901年刊のパリの女優および俳優たちの晩餐会のメニューに描かれたペン画

右||高温殺菌——子供にバイキンのつかないように。
 A・フエイブル筆（1901年版ル・リール誌より）
 下右||便利な黒人の母親——H・アヴェロ筆のさし
 え（ル・リール誌より）
 下左||黒人の母親はこんなに役に立つ——H・ア
 ヴェロ筆の諷刺画より）





気のいい酒保娘——A・ヴォレッテのさしえより

レスボスの歌



日は まひる
山の気は 澄み
やさしげに
山羊は 鳴き
鳥 二つ 三つ
青空に
弧を描きて 飛ぶ
ああ 静かなる
時の流れ

レスボスよ
おとめ ふたり
手を とりて
山気の中に
ひとと 寄りそう

ひとり
胴着に 半ズボン
帽子かぶりて
おとこの身なり

もうひとり
幅広き帯を結びて
おとめのまま



ささやくは
愛のことのは
恥じらいて
身をそむけても
おのずから
顔に 浮ぶは
面はゆきさくら色

家畜小屋の
豚の群れ
小さき目に
ふたりを 見上げ
はて これは
美しき眺め

レスボスよ
若きおとめの
ふたりして
うたう ヨーデル
山々に木魂して
また返りくる
恋の讃歌
ああ ふたりの
おとめよ



ぶどう棚

あおく 茂りて

その下の

木の切り株に

腰おろし

語らうは

ふたりだけの思い

愛のくさぐさ

レスボスよ

自然のなかで

湧きいでし

恋のスタイル

レスボスよ

透明な山気を吸い

美しく色どられし

恋のカタログ

レスボスよ

ああ 血は燃え

心はおどり

思いはあふれて

かぐわしくにおう

レスボスの恋よ



手を取りて
 舞うは ひな歌
 素朴にも
 ただひとすじに
 かつ 高らかに
 恋の歌
 愛の踊りに
 身を沈めて
 悔いは あるまじ
 遠いみずうみに
 たそがれの色
 やや 深まりて
 巢に帰る鳥のかげ
 かすかに淡く
 山はいま 静か
 レスボスよ
 このひとときに
 レスボスよ
 このふたりに
 ああ 火と燃えて
 輝きを 増せ
 においを 放て



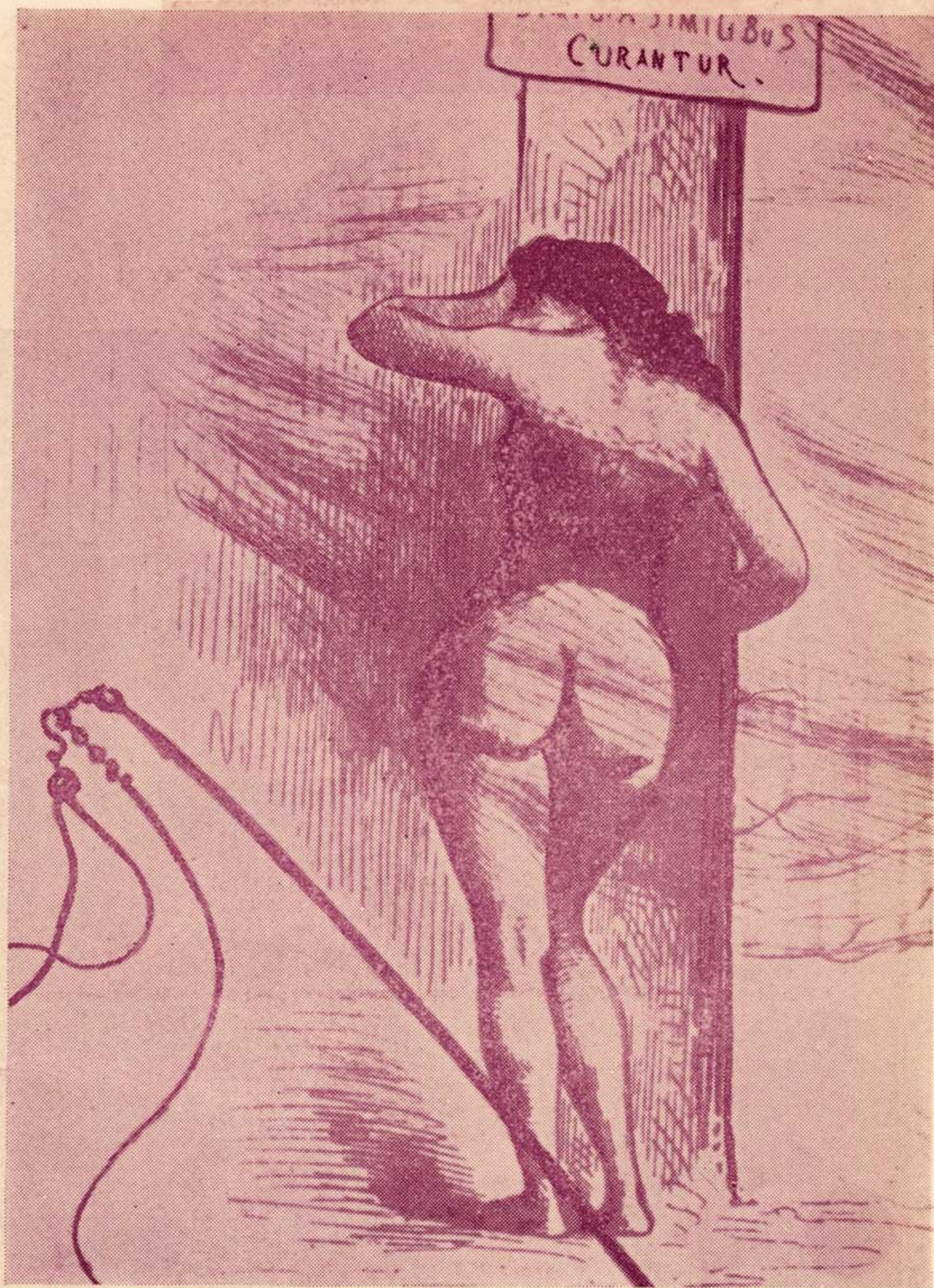
夕暮れのとばり
しずかに 落ちて
山は いま
眠りの身仕舞い
人もまた
小屋に帰りて
愛の夜の
むつごとかわす

レスボスよ
そとふれ合いし
唇と唇
かよい合う
甘き息づき

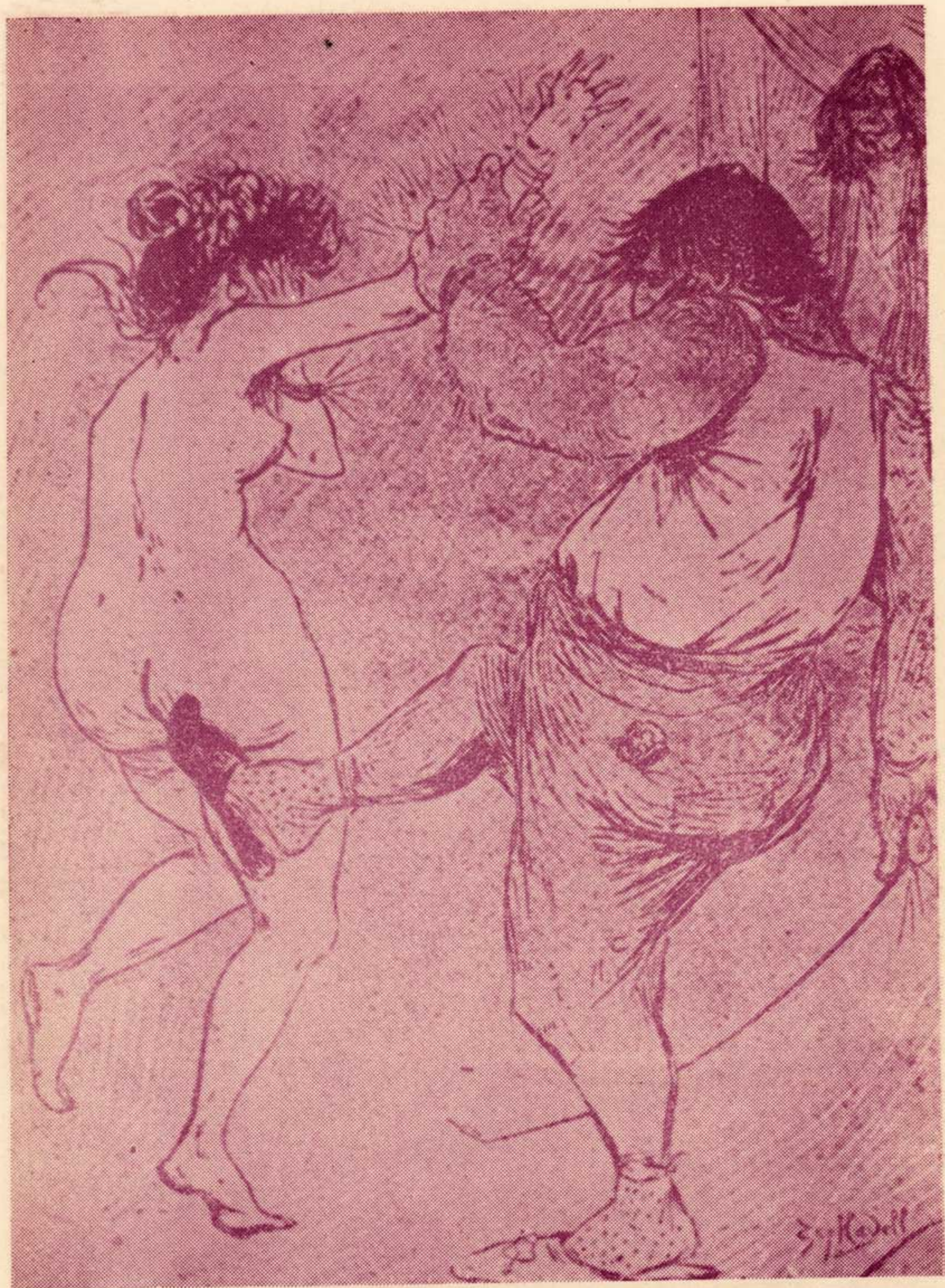
レスボスよ
腕 組み交わし
胸と胸
ひたと寄りそい
かぐわしき
甘きくちづけ
火と燃えて
レスボスよ
ああ
レスボスの恋よ

お尻をねらわれる女たち



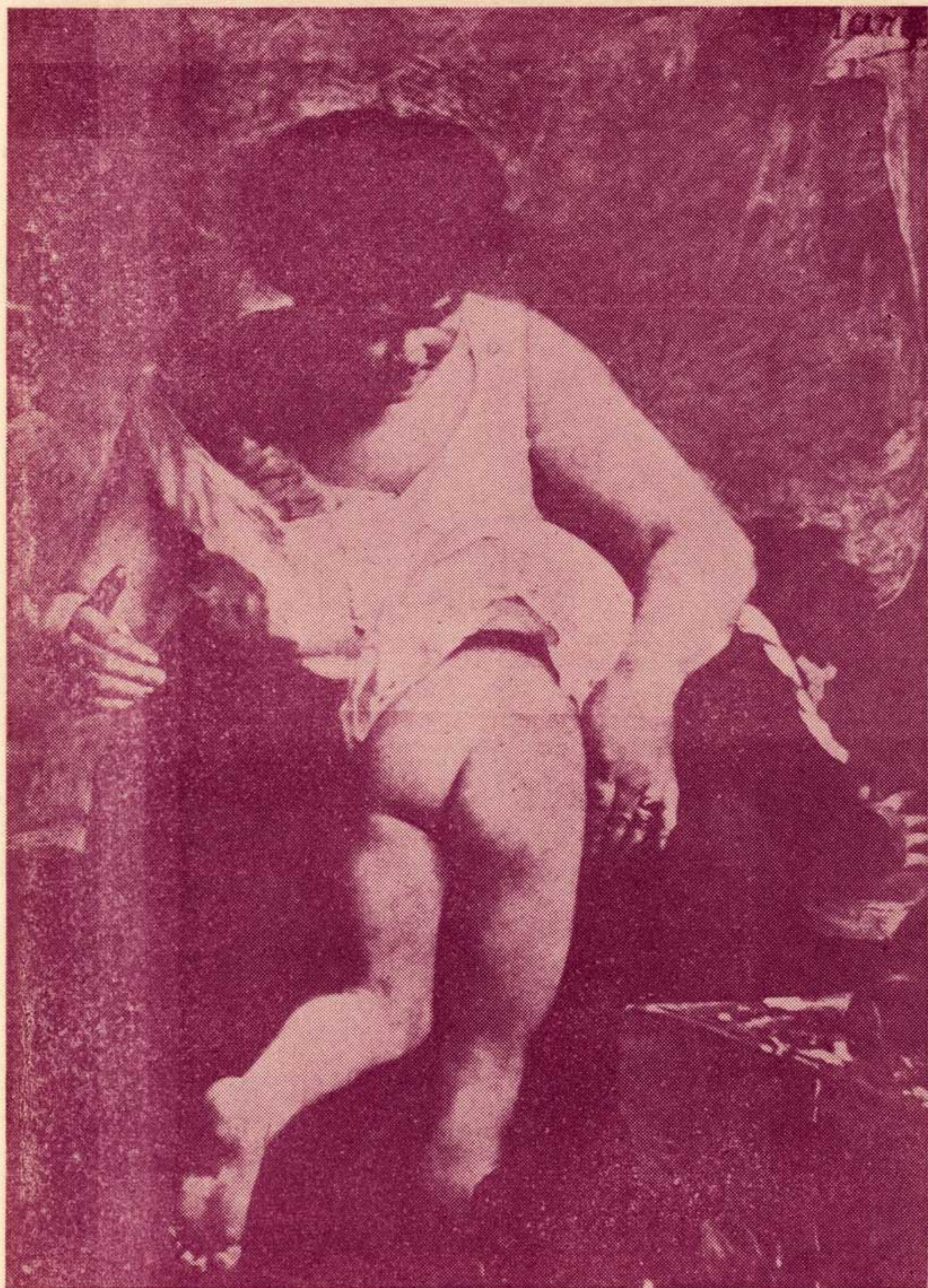


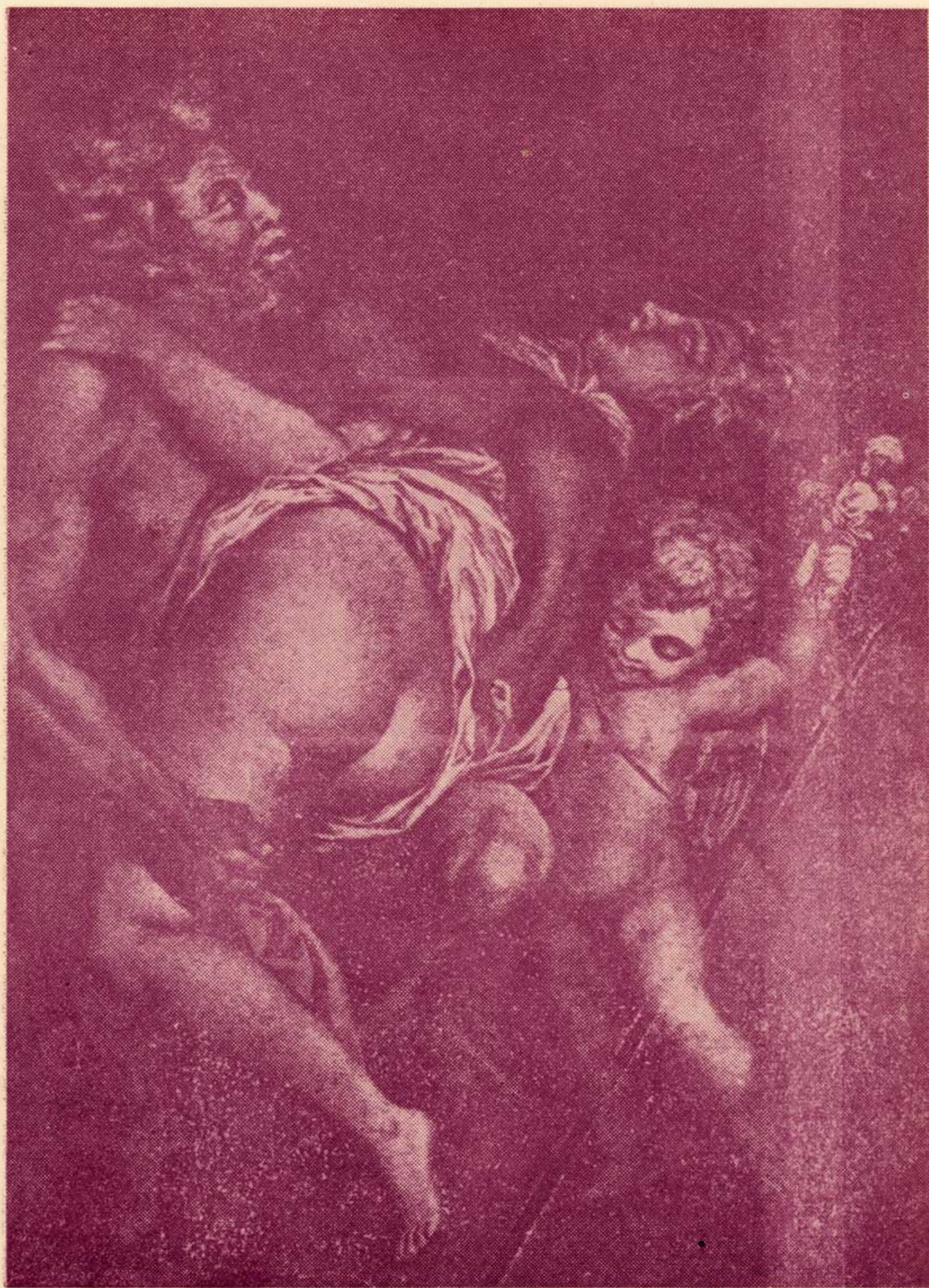
「女のもとに行くときはムチを忘れるな(ニーチェ)」——アプウ筆の版画



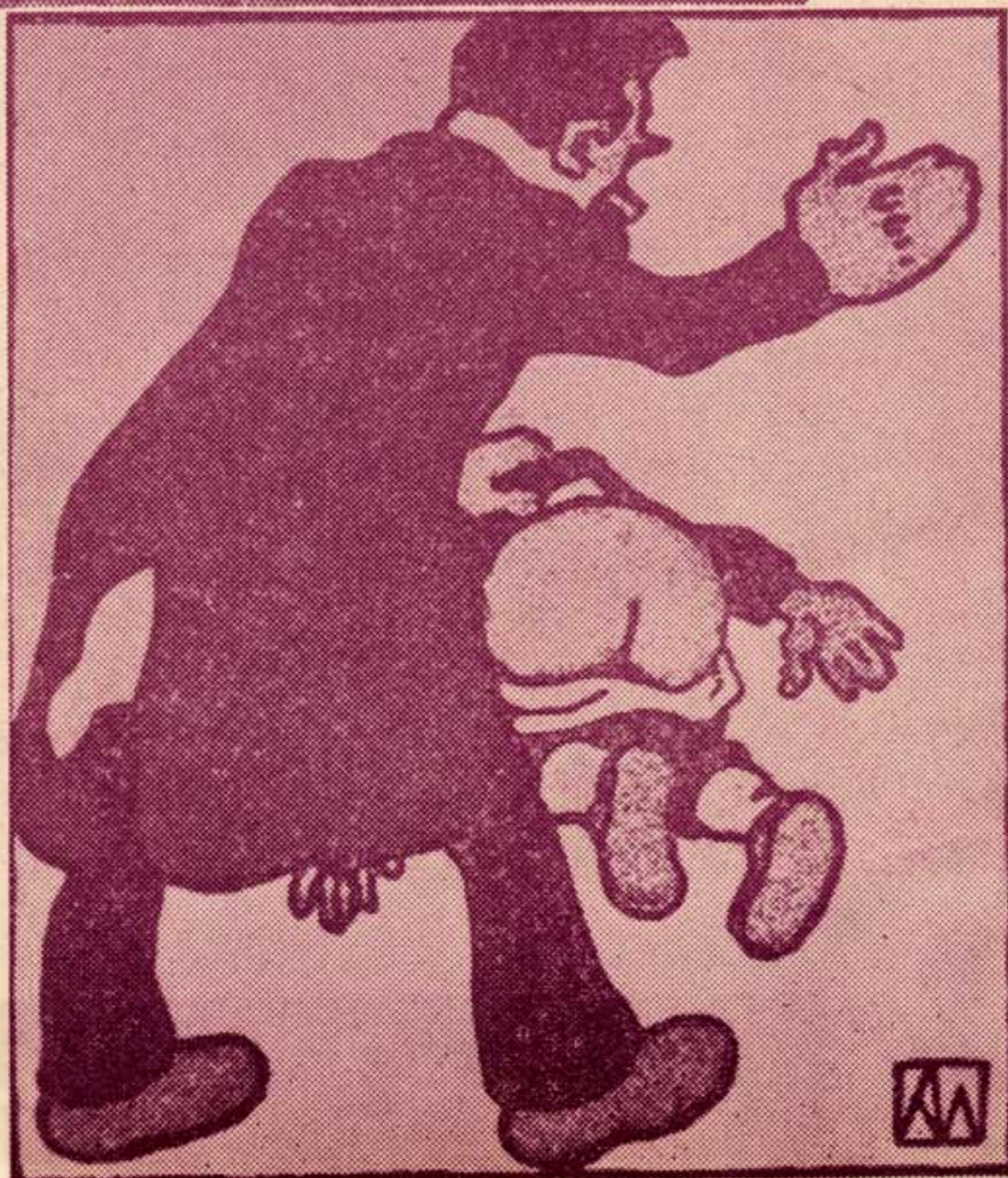
きびしいが、間違っていない——ガデル筆のペン画(1896年版のル・リール誌より)







裏切り者への処罰——レ・ヴァルペルガ筆の銅版画



上II 一打ち七匹——ペルシャ
の密画
右II 彼は卓越せる教育を楽し
む——A・ヴィルケ筆のさしえ

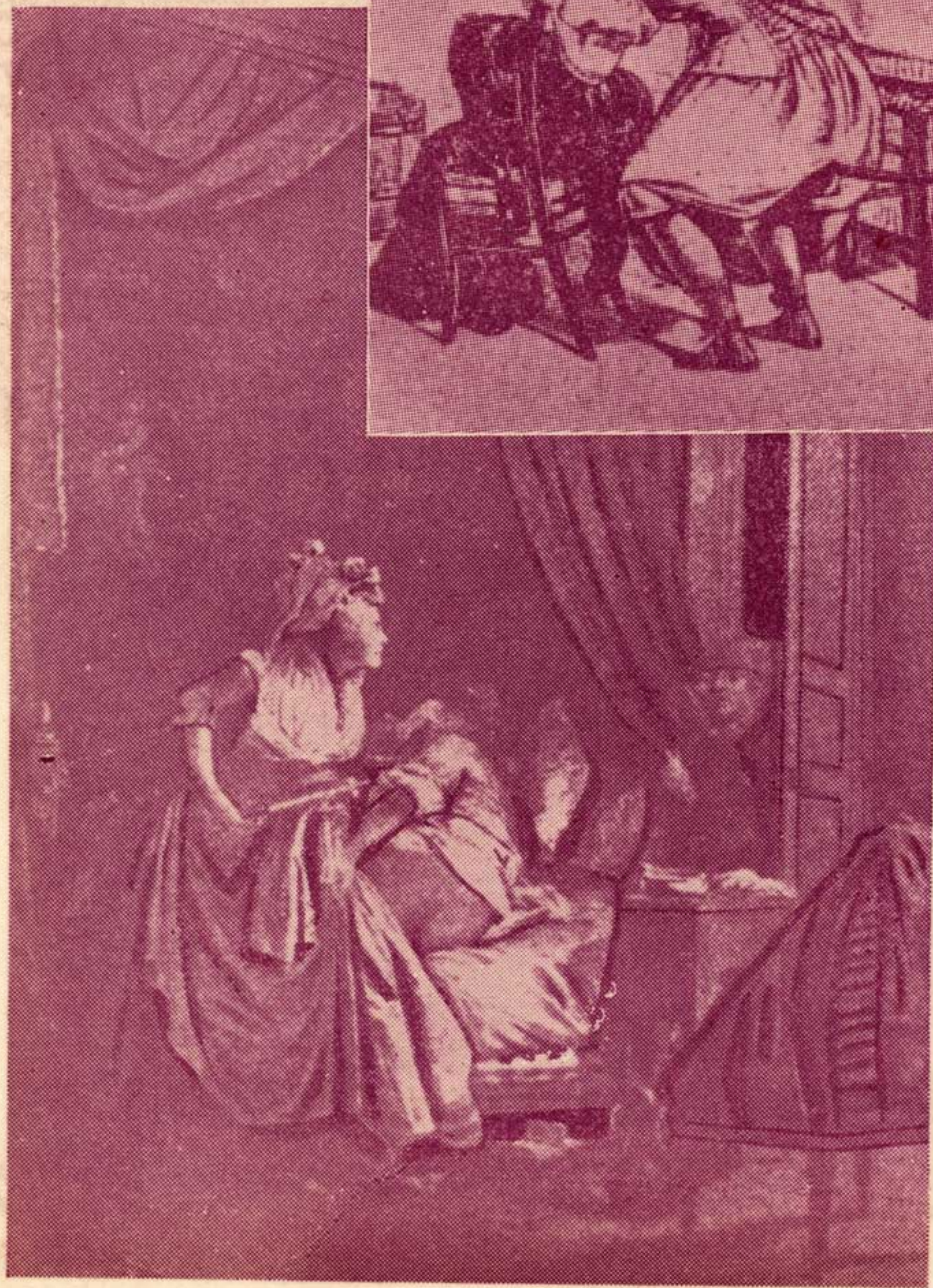


上=若き医師——実験台になる女性をさがして、レイノード・ヴィラニューヴ筆

左上=「楽になるよ!」——シャルル・フィリポンとE・モリッセ共作の版画

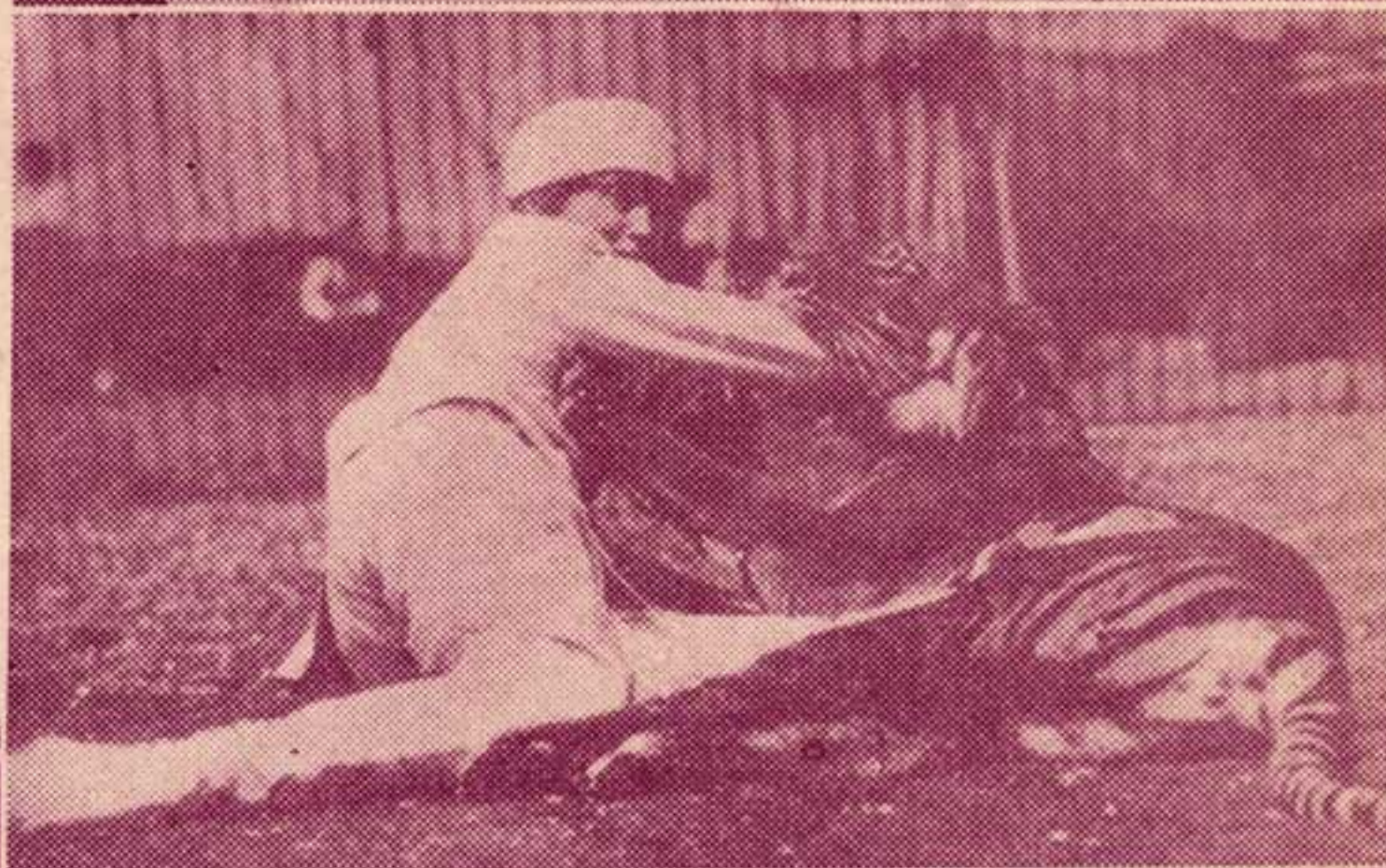
左下=妨害者——ローランス作の銅版画

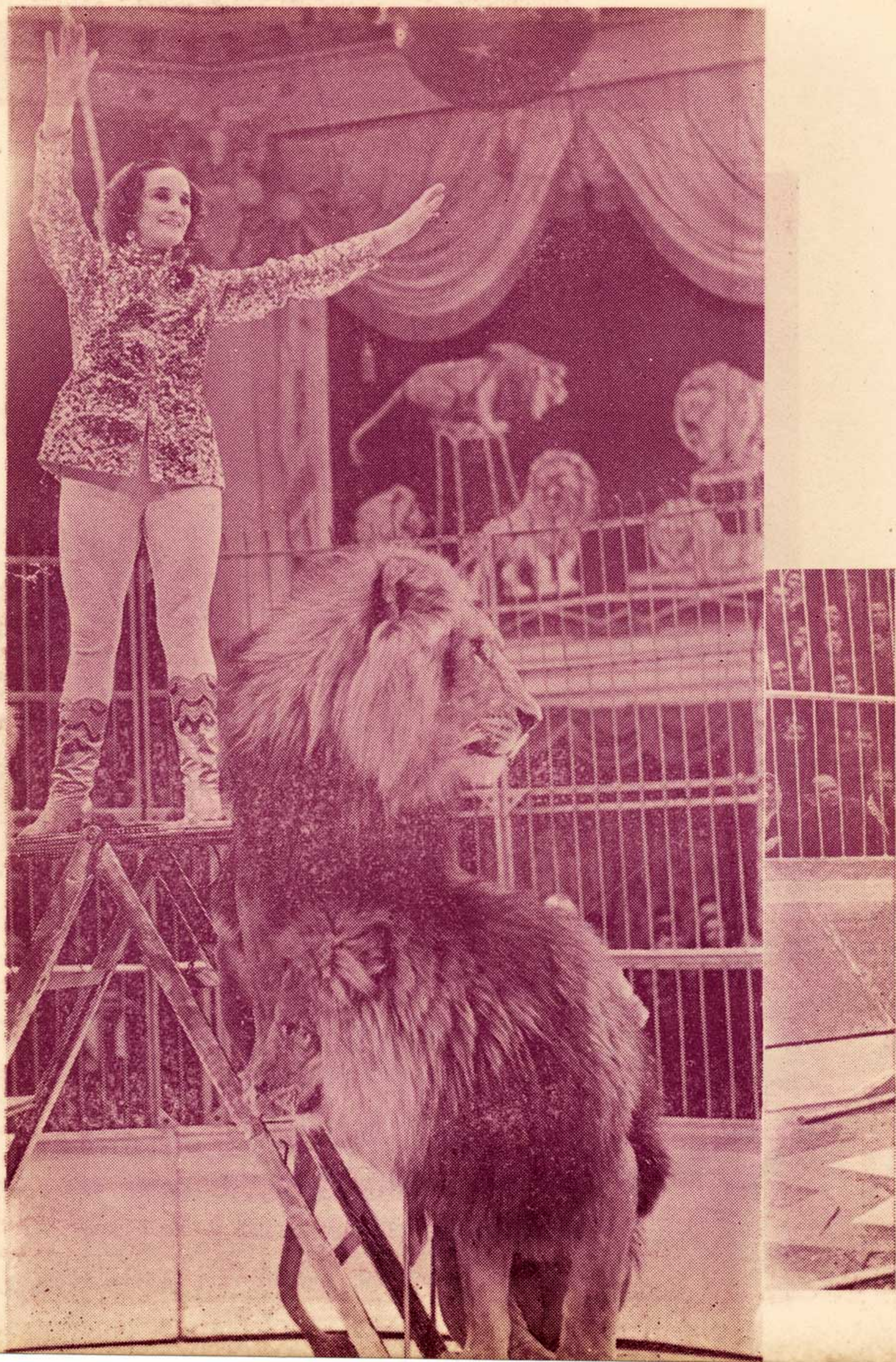
浣腸される女たち



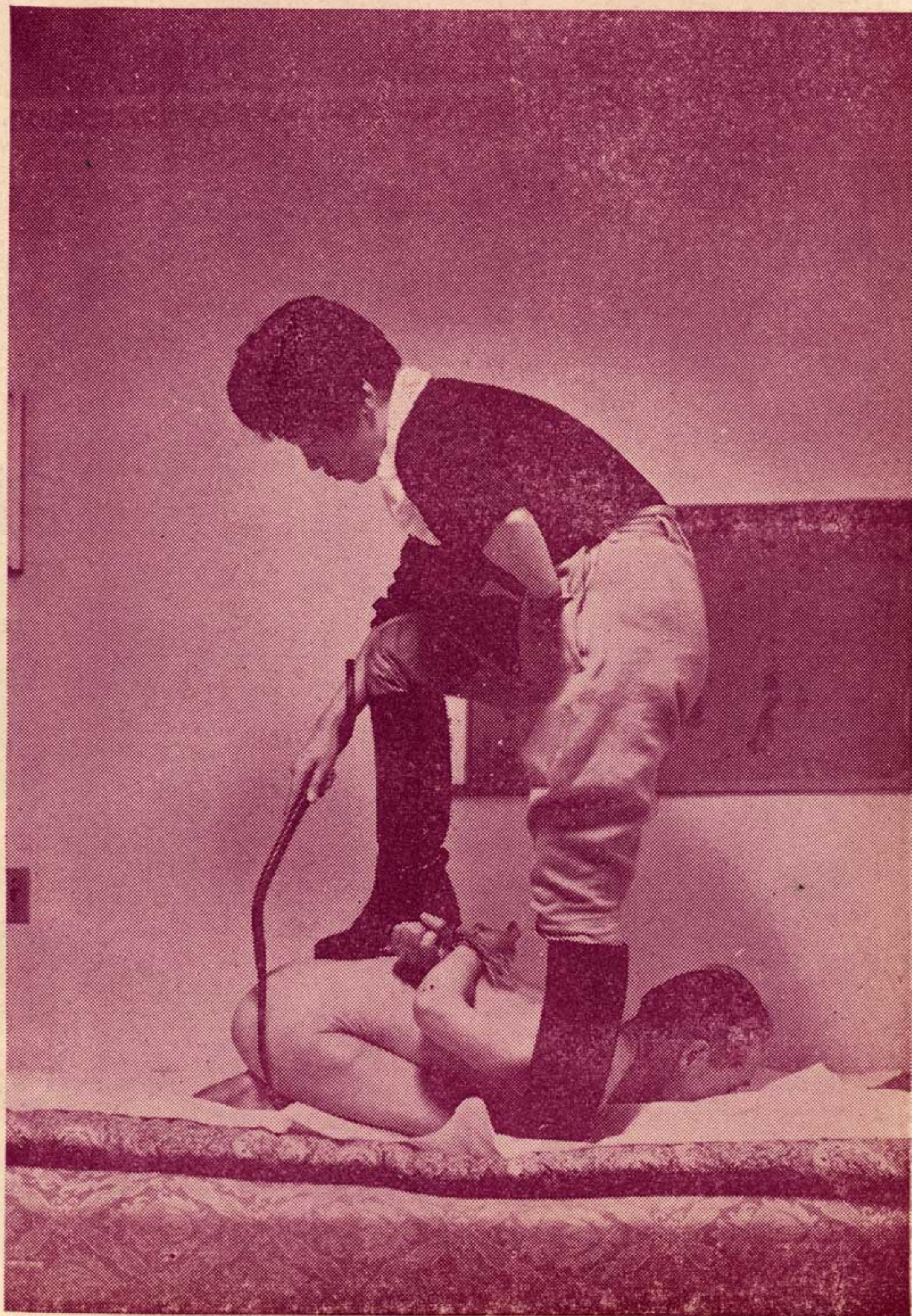
女と猛獣

右の2枚は、マーベル・スターク夫人。エセル・ベームス・サーカス当時（一九五三年）来日して、世界動物博覧会で実演したことがある。女性調教師としては、数少ない名手の一人で、弟子に日本人女性もいる。下と左は、ソ連の女性調教師タマーラ・ブスライエフ女史。





男をしいたげる女たち

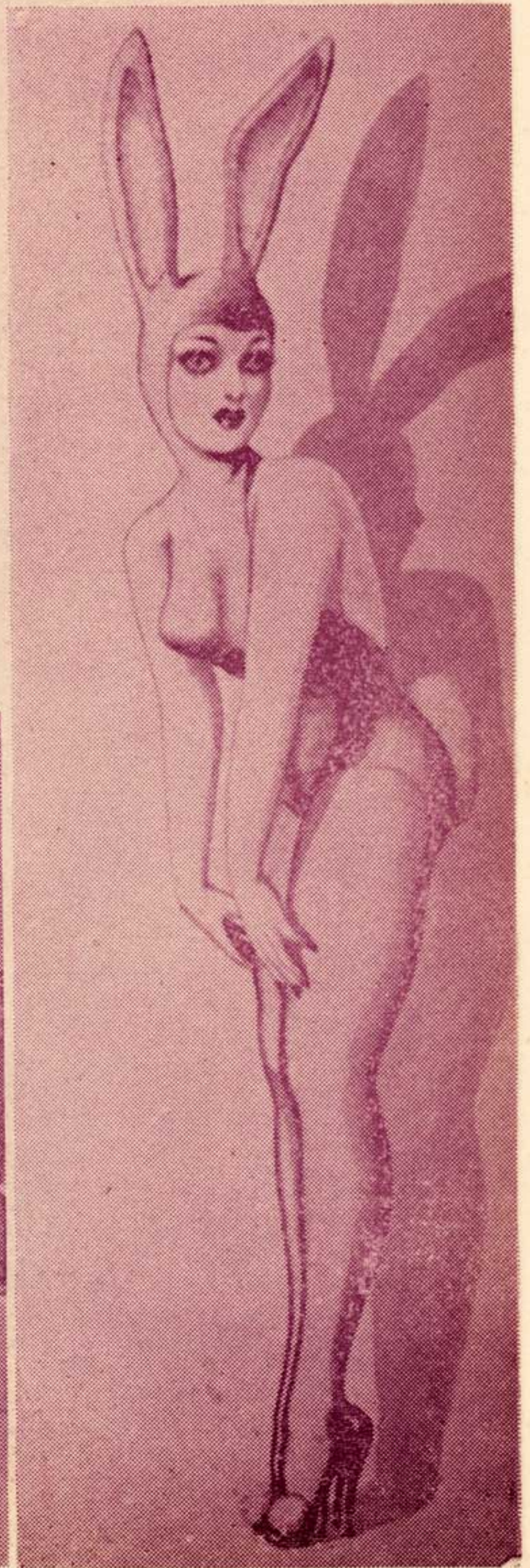


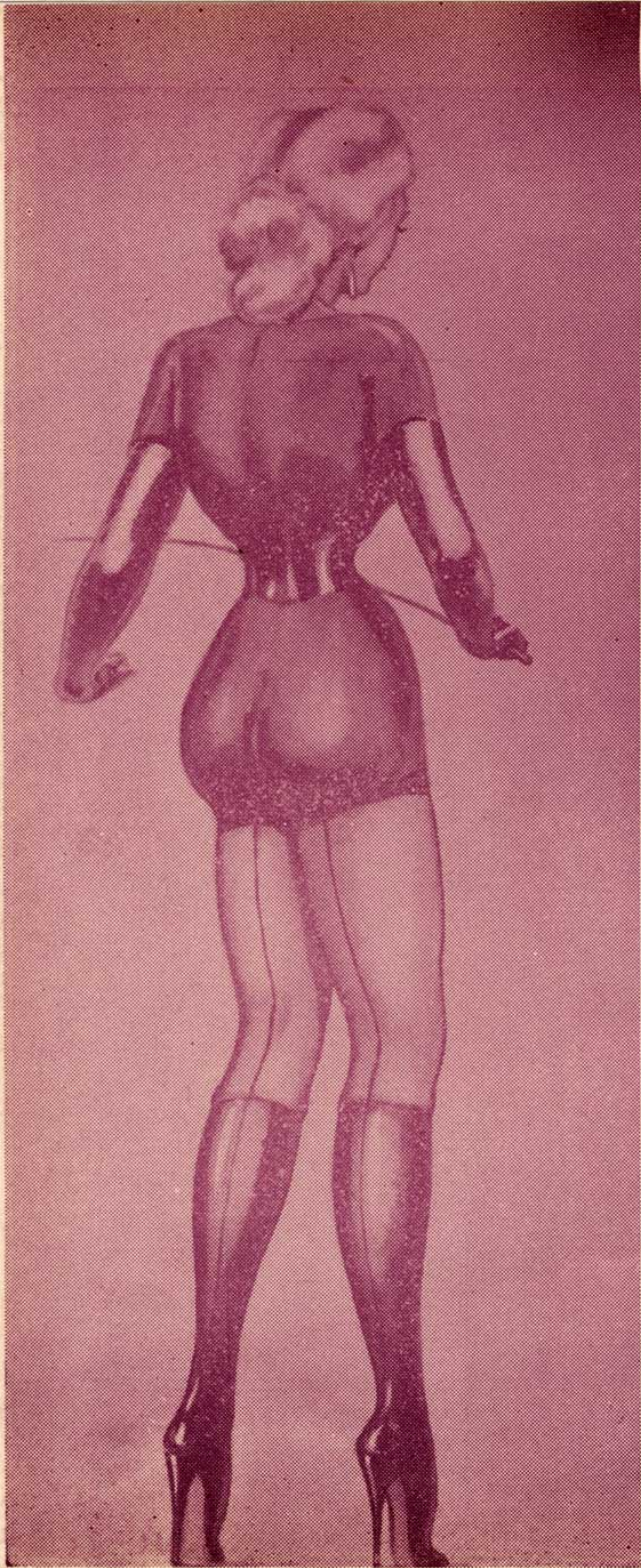


左右ともに、1951年に製作された、マゾヒスト向けの連作写真の一部

靴をはいた女たち

右端および左端はサディズム、マゾヒズムおよびフェチズムのいずれにも通用するように描かれた。アメリカのジョン・ウィリーのさしえ。彼は、この種のさしえでは、現代の第一人者である。中の3枚はアメリカのニューヨークのジュラジオの特殊靴のモード。長靴およびハイヒール・フェチンストのための作。





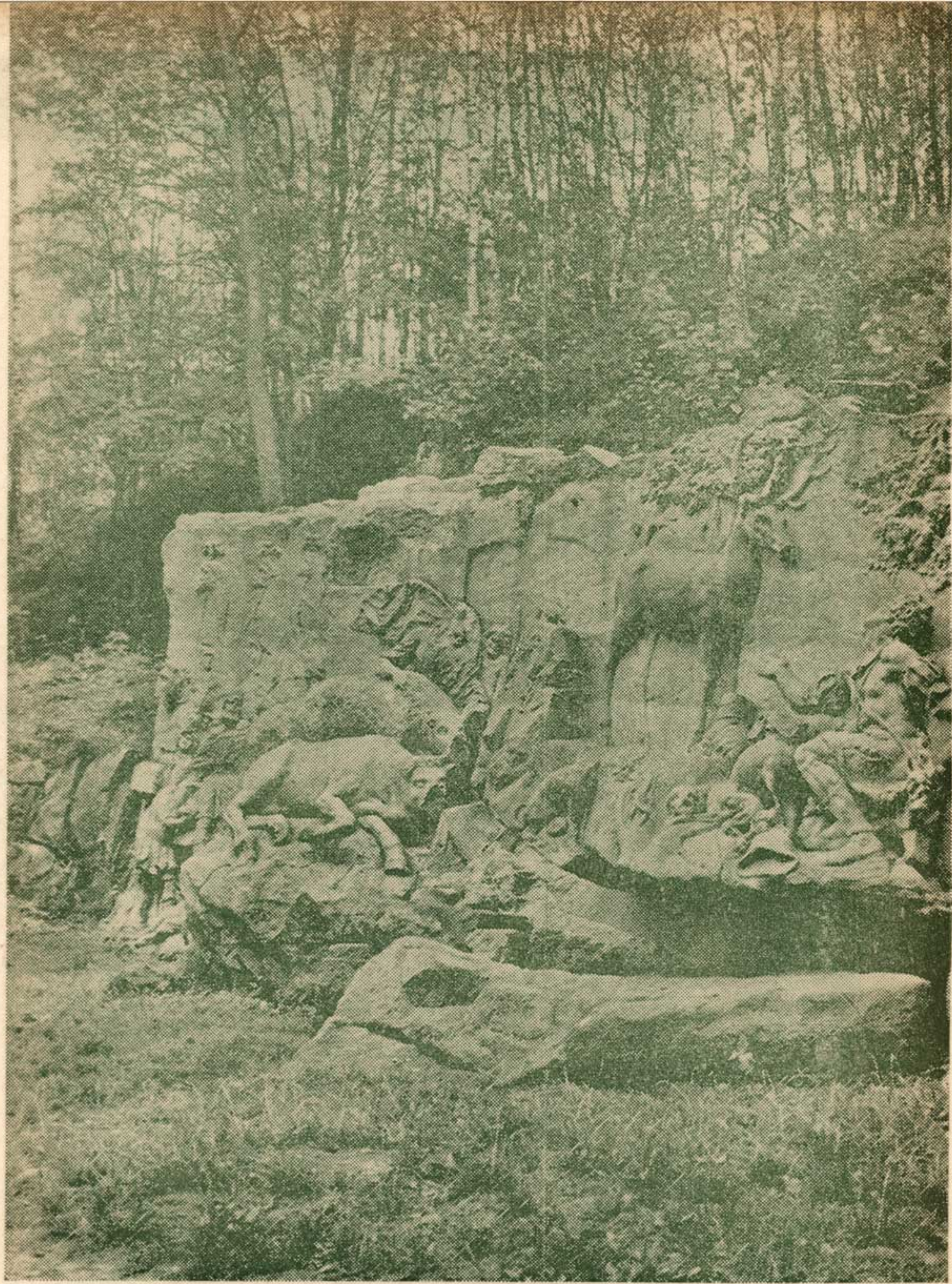




首つりの彫刻 (セント・レーザー寺院)



ブラミンクにある『人獣交歓』の野外彫刻



ズボンをはいた女たち





右=弟のズボン——1793年版のリチャード・ニュートンの絵。弟の留守に、そのズボンを姉がはいて妹に見せている。現代とは違って、この当時は、女は長いスカートをはいており、男は、ブルボン王朝時代に全盛を見たキューロットをはいて、肉体の線を誇張し

ていた。

上=金持ち——扮しているのは、フェルジナンド・ライムントとコンスタンツェ・ダアン。笑劇やオペラ・ブッフ、ファルス、またはジंकシュピールでは、よく女性の男装が見られたものである。



上＝スペインの漁夫——シャルル・ド・サイエの描いた絵で、仮装用の衣装である。

左ページの左＝芸術家たちの舞踏会「シャメラ」、フランスの舞踏衣装。

2枚とも、恐らく、カルナヴァルなど、一種の仮装舞踏会、とくに画家や音楽家の卵たちが集まってするもののためのアイディアの一つであろう。今日でも5月になると、ドイツやフランスの服飾雑誌には、この種の仮装用衣装が、極彩色で紹介されている。



右=チロルの男の衣装をつけた女優のヴィル
ディッシュ嬢——パルツェル作というのだが、
画家についても、モデルの女優についても、く
わしいことはわからない。だが、この扮装は、
『魔法のバラ』という黙劇からのものという。



ロメオに扮したクララ・ツィーグラア——ロメオに扮する女優は、むかしからしばしば見られたが、ツィーグラアについては詳細はわからない。だが、この写真のように男性的なロメオは珍しい。



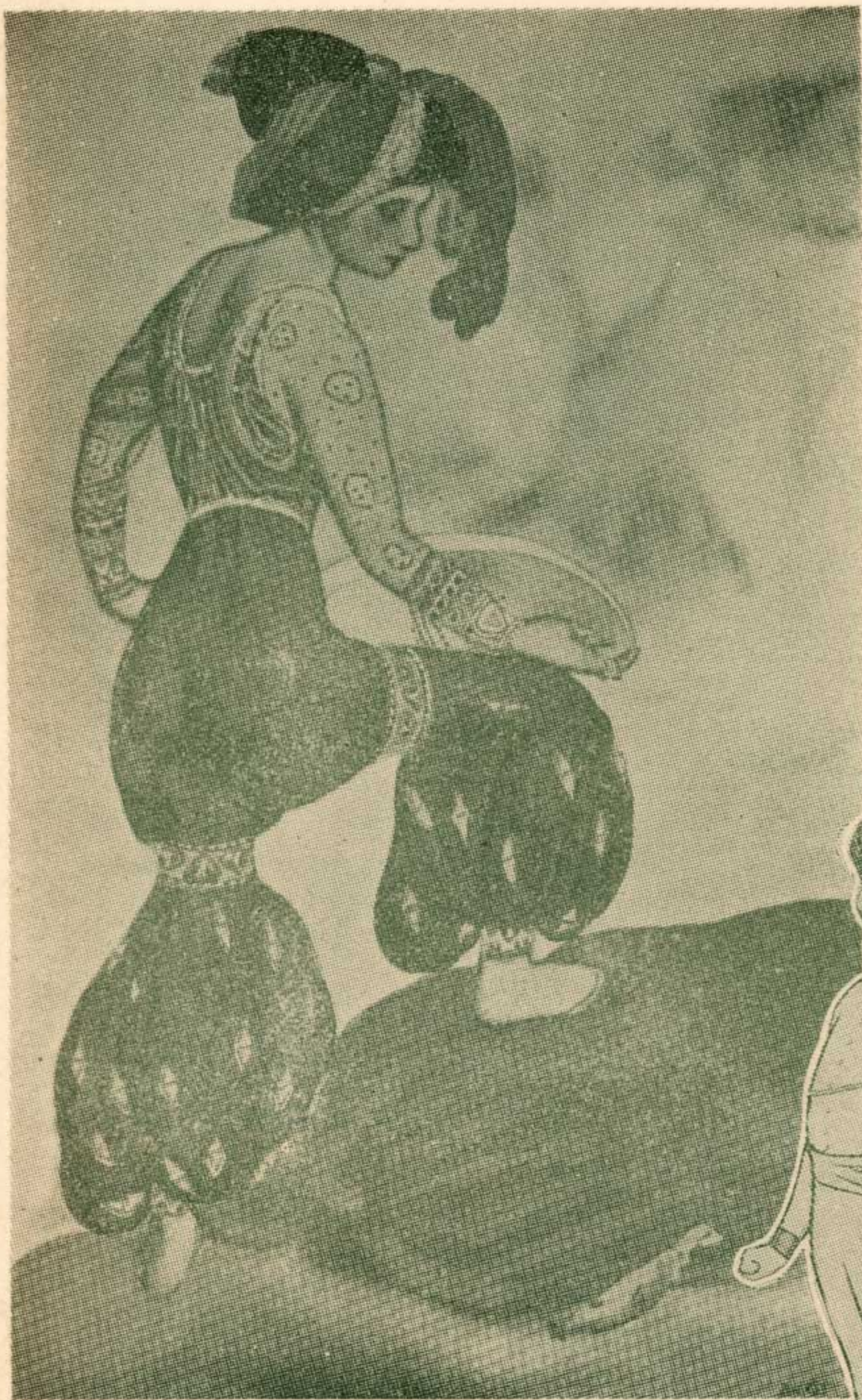
『フォルトニオの歌』に出演したミンナ・ワグナー——リヒアルト・ワグナーの最初の妻ミンナと思われる珍しい写真。ワグナーは、病篤く病床に伏していたミンナを捨てて、リストフランツの娘コジマを妻としたが、妻に対する以上の愛を、ほかの女性（某伯爵夫人という）にそそぎ、名作『トリスタンとイゾルデ』を生んで世人を驚倒した。



右=擲弾兵の扮装

左=古代戦士の扮装

ともに舞台衣装のスケッチであるが、女性用に考案されている。
案も絵も、A・グレヴェンの作。



上=女奴隷——レオン・バクストの案ならびに絵。彼は、有名なバレエの演出家であり装置家。その案は一般化されて今日でも用いられている。この絵は女奴隷の復讐がテーマ。

右=サラ・ベルナールのカリカチュア——カピエ筆で、エドモン・ロスタンの『驚』に出演の扮装・ポーズを模した。

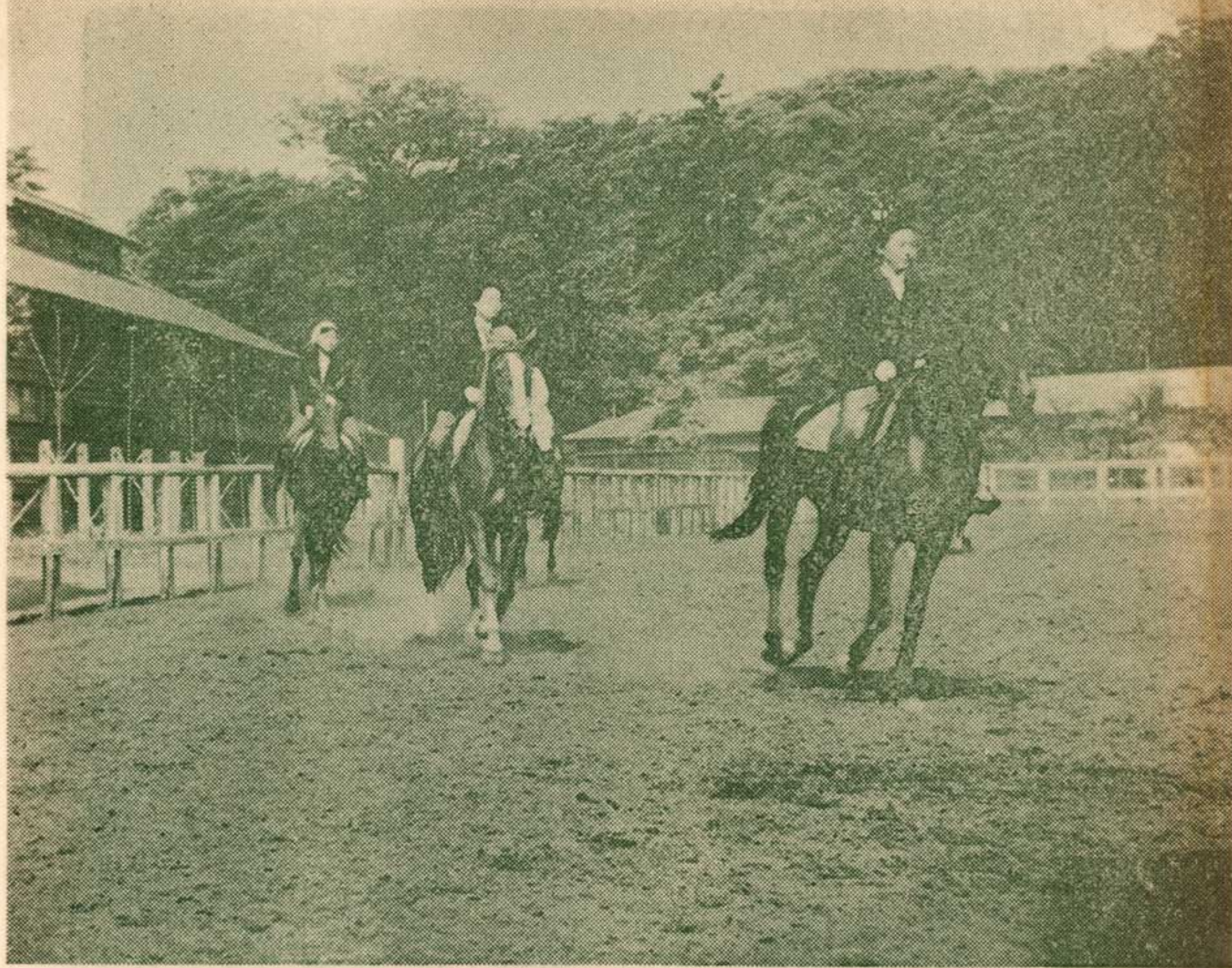


上＝ニーナ・ハルトとその相手役
——有名な、寄席の花形ボードビル2
人組。1924年ごろと思われる。

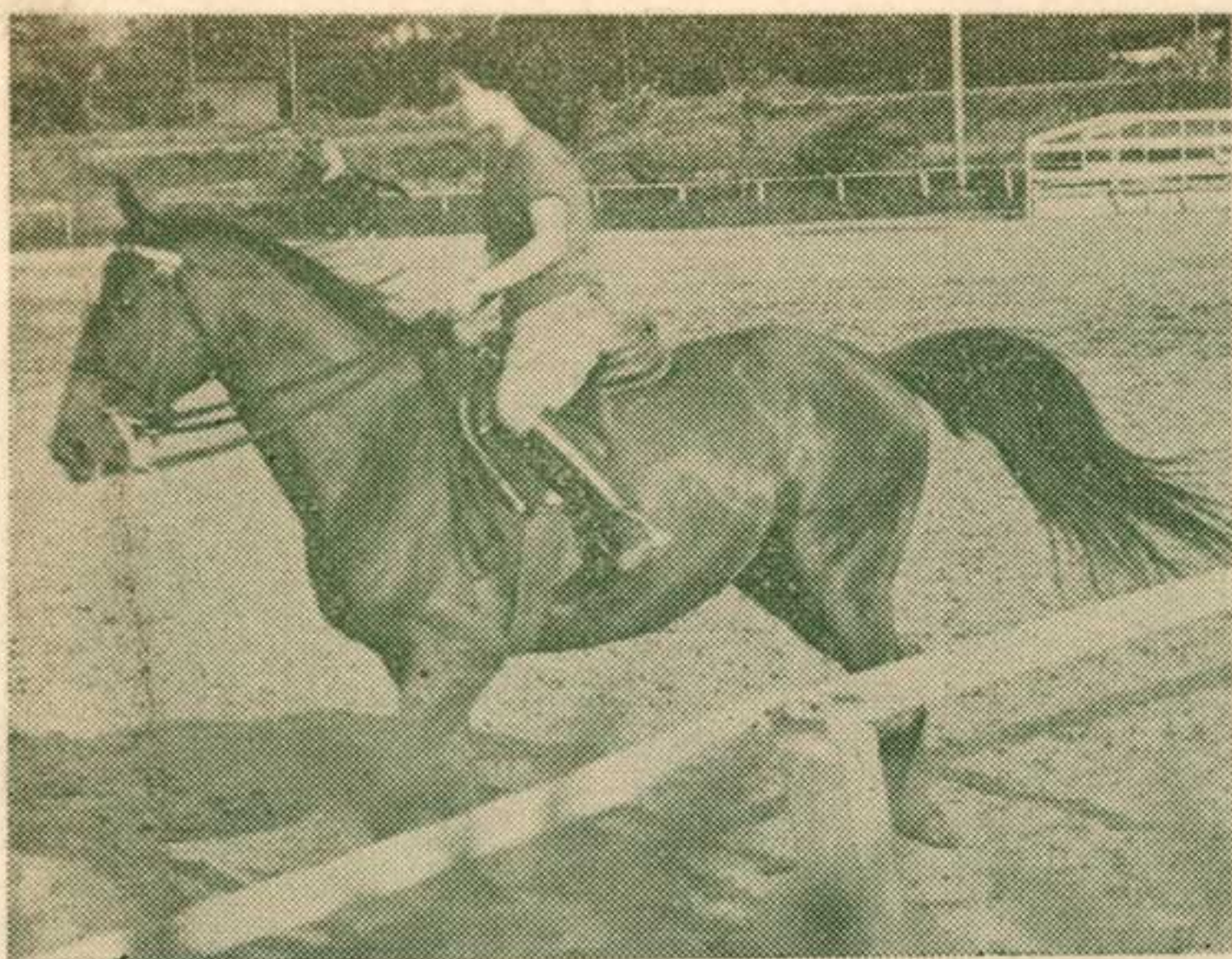
左＝コンビネーション型ズボン——
裾の広いことは1917～8年から1935年
ごろまでの特徴で、これはその珍型。



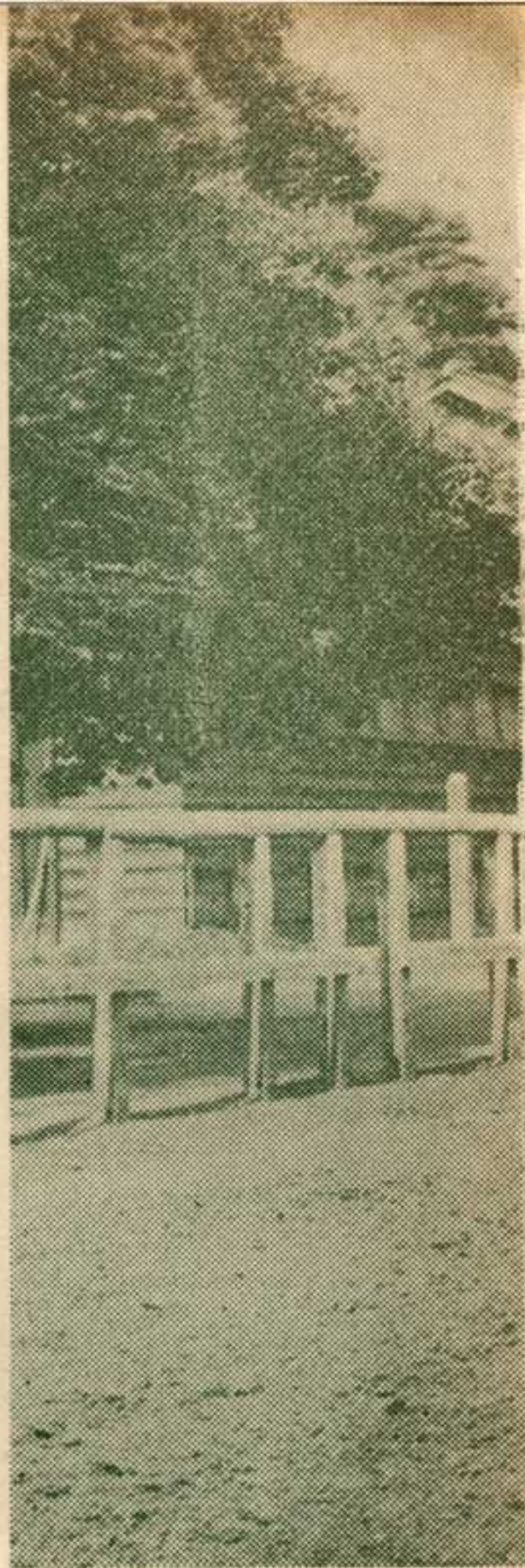
エルナ・モレナ——映画「リリーはウイリーを演ずる」のなかの写真で、ここらあたりから、現代的なにおいがする。



馬に乗る女たち

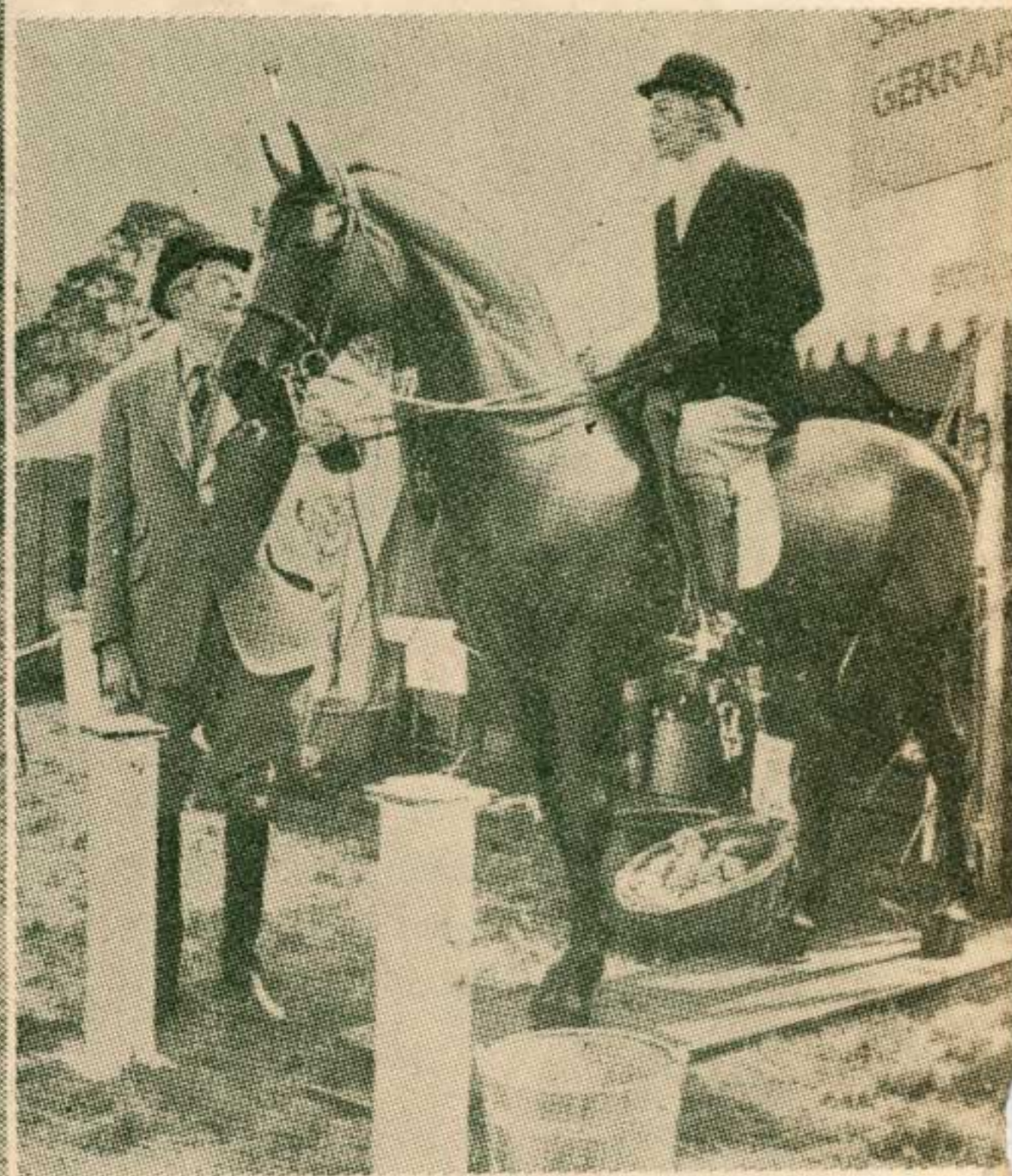


いずれも1959～1960年に、乗馬女性に対するフェチストによって撮影された写真。被写体の人物のなかには、サド的傾向をもっていることの確認できるものが含まれている。



左=ジェヌビエーブ・パージュの乗馬姿（『熱い手』に主演した女優）

下の2枚=イギリスの乗馬服ショーで乗馬服を着るモデル（アンバサダーより）



永遠の美と若さの泉

ザッヘル・マゾツホ

絶世の美人

一六一一年の、ある冬の天気の良い朝であった。

四人連れの若い紳士が、ぼかぼかと心地よい小春日よりの陽光を背に受けて、ウィーンのグラーベン通りを、なにか楽しげに語らいながら歩いていった。彼らは、生国を異にしていたが、非常に仲のよい友達だった。

どこからそうなったのか、話題はいつか、若い女性について論じられていた。それも、

それぞれが、自分の国の女性の美しいことを述べたてて論じあっていた。が、結局は、ウィーンの女性が、いちばん愛嬌あいぎょうがあって美しいという結論で、四人が一致した。

だが、それまでに、各人の主張したことは次のようであった。

イタリア人のマッフェイは、金髪のドイツ女の美しいことを説明した。

オーストリア人のスターレムベルク伯爵はベニス女の瞳が美しいと賛美した。

チェッコスロバキア人のツェルニンは、当

時ハンガリアの典型的な美人として評判の高かったツァバリ伯爵夫人のことを、熱心に話した。

だが、残りのひとり、ハンガリア人のエメリッヒ・ケーメンだけは、黙々として何も語ろうとしなかった。

「君は、さっきから、少しも口をきかないが、まだ、これぞと思う女が見つからないのかねえ」

と、スターレムベルクがたずねた。

「いや、そういうわけじゃあないのだが……」

ただ、ぼくの意見には、限界がないんだ」と見るからに端麗な、美青年のエメリッヒは、いった、そして、話をついで、「君たちも知っているとおりに、ぼくだって、今までに、多少は女性と関係してるさ。ただ君たち都の伊達男たちが盛んに御高見をご披露に及んでいる最中に、ぼくが長談義をして防害するのは悪いからさ」

「ちょっと待った」と、チェッコ人のツェルニンが叫んだ。「ぼくが結論を下すことにしよう。エリザベート・ナグスディ伯爵夫人ならば、諸君にも異存はあるまい」

「ナグスディ夫人！」とマッフェイがことばをはさんだ。「あの女は、評判どおり、そんなに美しいのかい？」

「うむ。ぼくも彼女のことは聞いている」

と、エメリッヒは叫んだ。

「そうだ。じっさい、彼女ぐらい美しい女性はないだろう！」と、スターレムベルクは念を押した。「せめて一度でいいから、夫人に会いたいね」

「マッフェイ君、ぼくも同感だ！」

と、エメリッヒは、イタリア人のことばに同調した。

「そんなことは、ワケないさ。ウィーンにい

るときは、夫人は毎日、必ず、サン・ステファーンのミサに行くんだ。だから、そこへ行って、ブラブラしていれば、きっと彼女に会うことができるさ。請け合ってもいいよ」

と、ツェルニンが、得意気にいった。

「じゃあ、これから、そこへ行ってみようじゃないか、諸君！」

と、これは、エメリッヒの提案である。

かくて、四人の青年は、腕を組んで町を半周し、広場を横切って、崇厳な寺院のほうへと足を向けた。

四人が、サン・ステファーンの教会へついでみると、そこは、信者たちでいっぱいだった。そこで、青年たちは、人を押しわけて、やっとのことで、玄関から祭壇のところまで行くことができた。

「あれが、そうじゃないのかい？」

と、エメリッヒが、ボヘミア人の耳もとでささやいた。

彼の指さしたところには、黒のビロードずくめの一人の貴婦人が、第一列目の席にすわって、祈禱の聖書をひもといていた。

「うん、あれだよ」

と、ツェルニンが念を押した。

「じつに素敵な美人だね」

と、エメリッヒは叫んで、しばらく恍惚と彼女を見つめていた。

じっさい、伯爵夫人の美しさは素晴らしいものであった。その上品な瓜実顔、長く垂れ下がった濃いマツ毛、高い鼻筋——それらは教会の崇厳な雰囲気と相まって、神々しいばかりであった。

スターレムベルクの腰の短剣が、石だたみの上でガチャツと音をたてたので、彼女は、思わず顔を上げた。そして、彼ら青年たちと瞳が合った。

彼女の大きな空色の瞳には、一瞬、不安な光がひらめいたが、その美しい顔には、少しの変化も認められなかった。だから、瞳が合ったということは、彼女が、この四人の青年に特別の殷懃さを示したというわけではなかった。

若さの魔法

青年たちは、彼女が教会から出てくるのを待って、あいさつした。だが彼女は、ちょっと頭を下げて答礼したが、そのまま馬車に身を投じてしまった。エメリッヒは、彼女の上品で優雅な物腰に親しく接して感動し、彼女の馬車が町角に隠れるまで、悩ましげに、ジ



ーッと見送っていた。

「スターレムベルク君！ ぼくは、もう我慢
ができないよ。どうしても、彼女と親しく交
際するんだ」

「ケーメン君、大いにやりたまえ！ ぼくは
あの金持ちの美しい寡婦に君を紹介する労を
いとわないよ」

スターレムベルク伯爵は、素晴らしいながら
親友の肩をたたいた。

「え？ 伯爵夫人は寡婦だって？」

エメリッヒは、よろこびに顔をまっ青にし、
口ごもりながらたずねた。

「うん。だが、断わっておくがね、ナグスデ
イ夫人は、君よりも、倍も年が上なんだぜ」

「冗談いうない！」

「冗談だって！ いくら若くたって、彼女
は五十歳を下るまいよ」

と、スターレムベルクは、きっぱり言った。

「いや、そんなはずはない。少なくとも彼女は
二十代の女性だ」

「いや、違う。君たちは、なんにも知らない
からだ。あのように永遠の若さを保つために
は、彼女はある魔法を行なっているんだ」

と、スターレムベルクは叫んだ。

「なんだって？」

と、ほかの三人は、異口同音に、疑問をなげかけた。

「つまり、人間は、あの絶対な信仰心をもって、常に人間の血潮で沐浴すれば、永遠の若さと美とを保ちうるって言うのさ」

「じゃあ、あの伯爵夫人が、そうだといふのかね。そんな子供ダマシのような話を、誰が信ずるものか」

と、イタリア人がさえぎった。

「伯爵夫人に対して、そんな憶測はやめようじゃないか。とにかく、論より証拠だ、彼女と親しく交わって見れば、わかることじゃないか」

と、エメリッヒは叫んだ。

お前、ムチが欲しいの？

それから数日後、エメリッヒは、スターレムベルクに伴われて、エリザベート・ナグスディ伯爵夫人の屋敷を訪問した。

彼女は、この二人の青年を、非常な好意をもって歓待した。彼らは、最近に起こったいろいろの出来事から、宗教上の論争などについて話し合った。彼女は、その談話中、しばしば、その空色の美しい目で、眉目秀麗なハンガリアの一青年エメリッヒを眺めていた。

そのときをキッカケとして、エメリッヒはナグスディ夫人の屋敷を、しばしば訪問するようになった。そして、彼ら二人の交際は、次第に親密の度を増していった。ついには、エメリッヒは、ほとんど毎日のように、夫人の屋敷を訪れるようになった。

その間、夫人は、彼女を取り巻く多くの男性とエメリッヒを全然区別して、あたかも子供をしつけるように、彼を馴らした。

「若い殿方が、分別盛りの女性と交際すれば、すぐれた十人の先生について学ぶよりも、もっと価値のあることを覚えるでしょう。じつさい、ここは、小さな大学みたいなものですよ」

と、彼女は、いつも言っていた。したがって、彼女は、エメリッヒを、あたかも自分の忠実な弟子かなんかのように扱っていた。

ある日、エメリッヒは、前ぶれもなく、夫人の屋敷を訪れた。夫人は、ちょうどそのとき、若く奇麗な一人の娘さんに、その美しい髪の毛にみがきをかけさせていた。

だから彼は、夫人の部屋に踏みこむことを躊躇して、ドアのところまで止まった。が、しかし夫人は、彼を、侍女かなんかのように、あっさり部屋のなかに入れた。そして、微笑

を浮かべながら、ひじ掛けイスを彼にすすめた。

ところが、ちょうどそのとき、その若い娘の手に持った金製の櫛が、夫人の毛髪にからまって、いやというほど、引っ張った。

夫人は、痛さのために跳ね上がった。娘はひざまずいて、おののきながら、夫人に許しを乞うた。が、夫人は、その娘をキッとにらみつけて、重々しい口調で言った。

「おや、おまえは、また、ムチで打たれたのかい……きょうは、まあ、大目に見て許してあげるが、そのかわり、あたしを苦しめたおまえの手を、罰してやるよ」

と夫人は、エメリッヒの驚くさまを尻目に掛けて、ぶるぶる震えている若い娘の右手をつかみ、化粧机の上においてあったピンを手にとって、悲鳴をあげている娘に向かって、

「さあ、どこを刺してもらいたいのだい？」

と、よそよそしいやさしさで、たずねるのだった。

「奥様、どうぞ、お許しくださいませ。あたし、恐ろしゅうございます」

娘は哀願して、ひたすら、許しを乞うのだった。

「ああ、よしよし。それなら、こうしてやる

よ！」

と、夫人は、娘の手を爪でひっかいて、一本のピンを突き刺し、娘が身をもがいて苦しむさまを、心地よげに眺めていた。

あたしの命令です

夫人とエメリッヒと二人きりになったとき彼は、彼女に向かって言った。

「伯爵夫人、ぼくは、あなたのような美しいお方が、あんな残酷な仕打ちをなさろうとはどうしても信じられません」

「まア、あなたはわからない方ね……拷問によつて、どのくらい肉欲が満足されるかということを、あなたはまだ、ご存知ないのですか？　ことに相手が美しければ美しいほど、その機会を与えてくれるものです。そういう機会を利用しないのは、つまり、利口じゃないということになるのですよ」

「なるほど、ぼくは、あなたの方婦人というものをまだ知らないのですね。奥さん、ぼくのぶしつけなことばを許してください。とにかく、あなたみたいなお方に会ったのは、生まれてから始めてなのです。じっさい、ぼくは、これまで、女性というものを、まったく知らなかったのですから」

「まア、それはほんとなの、お坊ちゃん？

では、あなたは、今まで一度も女を愛したことがないというのですね？」

伯爵夫人は、半ば冗談に、半ば驚きの表情をしながらたずねた。

「ええ、一度も……」

これを聞くと、夫人は、にこやかな、悩ましげな微笑を浮かべつつ、身をかがめ、乱れた頭髪を手で直しながら、

「まア、あなたは、それじゃあ、二重に嬉しい人よ！　こっちへいらっしゃい。そして、あたしの足のそばにすわってちょうだい！」
エメリッヒは立ち上がって、この若い女性の膝に接して腰掛けた。

彼女は、しばし、悩ましげに彼の顔をジッと見つめていたが、やがて、柔らかい、ふくよかな腕で、彼の首を抱いた。

「ね、あたしと約束してちょうだい！」

「ええ、なんでも、お望みのことをいたします」

彼女は、声を低くして、彼の耳もとにささやいた。

「あたしのエフェース城へ、いっしょに来てください、あたしが帰るときに」

「あなたは、それを、ぼくに許してくださる

のですか？」

「いいえ、命令するのです」と彼女は、ほほえみながら答えた。「命令なんてことばを使ってもよければ、ネ」

「構わないどころじゃありません。ぼくは、あなたの召し使いのなかの、もっとも卑しい召し使いです」

彼女は、なんとも言いようのない表情でエメリッヒを眺めていたが、やがて叫んだ。

「エメリッヒ！　琴をとってちょうだい。そして、あたしに何か歌ってちょうだい！」

「何を歌うのです？」

「おお、あたしのお坊ちゃん、なにか、愛の歌を！」

道づれになった娘

春になると、ナグスディ夫人は、ウィーンを去って、自分の領地に帰った。彼女は、帰るに当たって、重ねて、彼女の愛人に手紙を送った。

エメリッヒ・ケーメンは、彼女の乞いがなくとも、すでに旅装を整えていた。彼は、オーストリアと、高地ハンガリアを横切った。そして、ちょうどそのとき、彼は、一隊の兵士を従えた、いかめしい馬車に出会った。彼

は、兵士たちの質問に答えて、うやうやしく頭を下げて敬礼し、彼の名前と、旅行の目的を語った。

「われわれも、ナダスディ夫人のお城に行くところですよ」と馬車の主は叫んだ。「ぼくは、コロマン・ド・ベルジックというものです。ぼくの妹を、ナダスディ夫人のところに連れて行って、一人前の女として教育をつけてもらいに行くところなのです。どうです。よろしかったら、ごいっしょにまいりませんか。そのほうが、お互いに好都合じゃないかと思えますが……」

エメリッヒは、喜んで一行のなかに加わった。ド・ベルジックはやはり貴族であるらしく、騎士風な上品な態度で、妹のド・ベルジック嬢を、エメリッヒに紹介した。彼もこれに答えて、騎士の作法にならってあいさつした。

道すがら、彼らと話をしているうちに、エメリッヒは、この紳士が、自分の妹を、エフ・ハース城に連れて行くことに対して嫌悪の感を抱いていることを知った。彼は、談話の最中、しばしば、妹が危険に陥ることを気にかけていた。だが、若い妹は、これに対して、兄の杞憂をあざけり笑った。

鬼女のウワサ

ナダスディ伯爵夫人は、ハンガリアにおいては絶大な尊敬を受けていた。そして、多くの貧乏貴族は、その娘を、夫人の荘麗なお城に入れて、彼女から、将来社交界に立つに必要な、いろいろの教育を教え込んでもらうために、侍女として差し出すのだった。

「ナダスディ夫人の永遠の若さと美とに関して、妙なウワサが立っているんですよ」と、コロマンは、妹の制止もきかずに語った。「今では、彼女は、ハンガリア第一の美しい女とされています。そして、社交界のあらゆる高位官連が、彼女の寵を得るために、毎日、行列してやってくるという有様です。それに美人であるばかりでなく、彼女は、かつてはこの国の最大の金持ちとして令名の高かった故ナダスディ伯爵の夫人です。彼は最近死にましたが、その死因についても、疑わしいところがあるということです。なんでも、人のウワサによると、夫人が、彼の食膳に、なにか悪いものを盛ったというのですからね」

「まア、兄さんは、なにをおっしゃるのですか、人様に対して」

兄をたしなめた。コロマンは、それには耳をかさず、さらに語りつづけた。

「ハンガリアの法律によって、彼女は、自由に夫の莫大な財産を処分しました。そして、彼女は、夫の遺族を養うどころか、あるときはウィーンに、あるときはエフェース城に住んで、数多くの召し使いたちにかしづかれながら、ぜいたく三昧の生活をしているのです。そして、日に増し、彼女の顔は美しくなるばかりなのです。ところがどうでしょう。そういう若い彼女たちは、不思議にも、一人々々見えなくなってしまうのです」

「なんですか？ そのお話を、もっとくわしく聞かせていただけませんか？」

と、エメリッヒはたずねた。

「まア、そんなことを言うものではありませんわ。そんなことを言うと、兄さんの値打ちが下がってしまいますよ」

と、イサベラは怒って兄のことをさへぎった。彼は不承々に、しばらく黙っていたが、やがてまた、しゃべり出した。

「あの女は、顔の美しいに似合わず、非常に残忍な性格を多分に持っているのです。自分の支配下にあるものが、ちょっとでも誤ちをすると、彼女は拷問にかけて、底知れぬ自分

の情欲を満たそうとするのです。だから、あきがこないように、夫人は、絶えず、新しい拷問の方法を工夫しているのです。ときには夫人の拷問の犠牲となって死んでしまうものさえある様子です。彼女は、その罪人に対しては、いささかも哀れみの心を持っていません。去年の冬のことでした。彼女が、ウィーソンの町に帰る少し前のことです。一人の若い侍女を、城の中庭に流れている泉水のなかへクサリで縛って投げ込んでしまいました。そして自分は、おりからの寒風に、毛皮の暖かい衣服にくるまって、まるで氷のかたまりかなんぞのように冷たくなった罪人を、あかず眺めていたということです……」

「そりゃあ、まるで、紡績の女工部屋にでも起こった話のようだわ」

「いや、ぼくも、コロマン君のことばを信じますよ。じっさい、彼女としては、やりそうなことです。いずれにしても、ぼくに妹さんをまかせてください。きっとお守りいたしましょう」

「ありがとう！ 妹のことは万事君に頼みます」

と、コロマンは、急に青年の手をにぎって感謝のことばを述べた。

トゲのあるムチで

やがて彼らは、エフェース城に到着した。彼らが、広大な中庭に通されたとき、コロマンは、エメリッヒに、意味ありげに、目で何ごとか語った。というのは、彼らは、入り口のところで、奇妙な場面に出会ったからである。

一人の、貴族らしい青年が、杭に縛りつけられて、二人の、獣のような男に、トゲのついた小枝で、ビシビシとなぐられていたのがある。そして、彼らのかたわらに、伯爵夫人は、涼しい顔をして立ちながら、さも心地よげに、その青年の五体から流れ出る血潮を眺めていた。

が、中庭にはいつて来た遠来の客を見ると彼女は、急いで拷問をやめさせて、その犠牲者を放免してやった。

「あの青年は誰なのですか？ なにか悪いことでもしたのですか？」

と、エメリッヒは、夫人にたずねた。

伯爵夫人は、にこやかな笑みを浮かべながら、

「あの若い犯人は、大胆にも、あたしに上目を使ったのですよ。彼は、あたしの召し使い

なのにもかかわらず、あたしに尊敬を怠ったのです。ですから、あたしは、あのヘッドウィヒ侯爵夫人が僧侶のエギンハルトに対してやったと同じようにしたにすぎないのです。でも、こんな愉快なことは、たとえ万金を投じて、なかなか、できるものじゃありません」

イサベラは、この恐ろしい女性を、ぶるぶると身を震わしながら眺めていた。エメリッヒ自身も、思わず身をふるわした。しかし、伯爵夫人は、あふれるような愛嬌と微笑を浮かべて、彼らを歓待したので、その恐怖の念も、一瞬にして消えてしまったのだった。

人間えもの

翌日も、コロマンはまだエフェース城に滞在していた。伯爵夫人は、城の近くに貴族たちを招待して、一夕のぜいたくな饗宴を催した。部屋々々の豪華な装飾は、国じゅうのすべての贅美を集めたようであった。

女城主の自慢の種となっている侍女たちがダンスをしたりして客をもてなしていた。エメリッヒは、これらの娘たちのなかで、とくに愛らしい十六か七ぐらいの無邪気な乙女に心をひかれた。

彼女は、ギゼール・ケリーといって、南部ハンガリアの生まれで、その上品な物腰は、ギリシャ、ローマ時代の古典的な優雅なタイプを偲ばせた。とくに彼女もまた、この秀麗な青年騎士を見つけて、寂し気な同情の態度で、彼を見つめていたのだった。

エメリッヒは、彼女をダンスに誘った。そして、彼らの手と手が触れ合ったとき、この純情な美しい娘は、恍惚となって、彼の腕に抱かれた。そして、踊りが一曲終わって彼らが離れなければならなくなったとき、この純真な処女は、彼に、美しいメロディーのような声でささやいた。その声は、伯爵夫人とはまた全然違った、やさしく雅やかな声であった。彼は、その声から、神秘的であり、そして隠されている女性の心を聞きとった。

エメリッヒは、ギゼールを可愛く思った。彼女もまた、純な真心をこめて彼を慕った。彼ら二人は、なんの疑う心もなく踊った。そして、伯爵夫人が、ぬすみ見るようにして彼らを眺めているにもお構いなく、ほとんど夜どおし語り合った。

伯爵夫人は、彼女の競争者が出て黙っているような女ではない。そのうぬぼれの強い心のうちに、むらむらと嫉妬心が湧き出た。そ

して、自分の領域を侵略した、この生意気な娘を憎悪の念でにらんだ。それだけでなく、エメリッヒが彼女のそばに行ったとき、夫人は、それとなく彼を責め、その心に針を打った。

人々が、このように楽しく踊ったりしゃべったりしている最中に、突然、鋭い物音が起った。召し使いが、一人の密猟者を引き立ててきたのである。この男は、数年前から夫人の領地で密猟していて、その行方を捜査中であつたのが、捕えられたのである。

「お前は、とうとう捕まったね」と、伯爵夫人は、喜びに輝く目つきをして叫び、客のほうに向かって言った。「さア、あたしの最も親しいお客様方、あすは、それはそれは愉快な新しい遊びをお目にかけますよ」

ギゼールは、このことばを聞くと、思わすぶるぶると身ぶるいした。エメリッヒが、そのわけをたずねると、彼女は、小声で、彼に耳打ちした。

「あした、可哀想なあゝの男の運命が決まるのです。奥様はまた、なにか残忍な計画を、あの男についてお立てになったのですわ」

このとき、偶然にも、この純真な美しい処女と、艶麗な女城主とのひとみが、パツタリ

合った。

エメリッヒは、天使のようなギゼールと、悪魔のような伯爵夫人とを等分に眺めた。じっさい、彼は、二人とも好きでならなかったのだ。彼は、ギゼールに対しては、その純真なやさしさを愛した。が一方、伯爵夫人の強烈な熱狂的な愛情も、容易に捨てることはできなかった。

饗宴は明け方になって終わり、付近から来た城主たちは、みな帰っていった。

エメリッヒとコロマンだけが残って、伯爵夫人と朝の食事をともにした。そして夫人は彼らに狩りをすすめた。彼らは快く夫人の申し込みを受けた。

彼らが食事をすませて中庭に出て行くと、すでに狩りの支度はできていて、活気を呈していた。猟犬は嬉しそうに吠え、馬は前脚で足踏みしていた。そして女城主の乗用の黒毛の駿馬は、後脚で立ち上がりながらクツワを噛んで暴れていた。

エリザベート・ナグスディ夫人は、緑のピロードの乗馬服に身を固め、羽毛で飾った縁なし帽子を目深くかぶり、踏み段から降りてきた。

エメリッヒは、彼女が馬に乗るのを手伝っ

た。夫人は彼の頬を軽くたたいて馬上の人となった。そして馬は勢いよく歩み出し、城の釣り橋を渡って、緑色にくっきりと染まった草原のほうへ突進した。

人々は、彼女のあとを追った。山の麓のところには、すでに、一隊の勢子と、馬係りの者が、主人を待っていた。

エメリッヒは、その人々の群れのなかに、人間のようなものが、一匹の鹿の背につながれているのを認めた。

「あれは、なんですか？」

と彼は、口ごもりながら夫人にたずねた。

「まだ、あなたが一度も見なかったことのない、おもしろい狩りをするためのものです。ゆうべ捕えた、憎い密猟者を、あのように鹿につないだのです。そして、あたしたちと犬どもがいっしょになって、あいつが参ってしまうまで追いかけるのですよ」

「奥さん、ぼくは、そんな残酷な遊びに仲間入りするのはご免こうむりたいですな。もしあの男が死刑に価するのでしたら、そんな拷問なんかにかかず、ひと思いに殺しておしまいにしたらいいでしょう」

「まあ、あきれたお坊ちゃんだこと！ こんな奇抜で、おもしろい狩りは、ほかにないじ

やあないの。あたしの神経は、それをしなければ、どうにも我慢できなくなっているのだわ」

「じゃあ、奥さんは勝手にやりなさい。ぼくは、ご免こうむりますよ」

「それから、ぼくもお許しを願うとうございます」

と、コロマンが、急いで、エメリッヒにつづいて言った。

伯爵夫人は、いまいまして肩をゆすった。そして、密猟者を鹿の背から下ろすように命令した。

鹿は自由に解放されて、跳ねるようにして森のほうへ飛んでいった。すると、猟犬どもが激しく吠えたてて、これもまた非常なスピードで、鹿のあとを追った。

伯爵夫人は、優雅な態度で、それらの光景を見送り、長い狩り用のムチを、ヒューヒューと空中にふりながら、猟犬の群れを従えて、狩猟者たちと、駒のヒズメも軽やかに、出発した。

エメリッヒとコロマンは、途中、ひとことも交わさず、黙々として城のほうへ引返した。そして翌日、コロマンは、従者を従えてエフェース城を出発した。

満月の夜の奇怪事

エメリッヒは、城に滞在しているうち、いつか伯爵夫人の奇癖にも、次第に慣れてしまった。彼にとって、彼女は、その支配下にあるものの全部を拷問するために生まれてきたかのように感じられた。しかも彼女は、その後も、依然として、地獄の毒々しい優雅さで、いろいろな残忍な醜行を、心地よげに敢行しつづけた。

ハンガリアの秀麗な青年エメリッヒは、夫人の、このようないまわしい陥穽をじゅうぶん知りつつも、次第に、夫人の足もとにひれ伏して、彼女の気まぐれな玩具とならざるをえなくなった。

そのように彼が、日ごとに深い陰惨な深みに落ちていく姿を見て、ギゼールは、どんなにか悲しんだことだろう。

ある日、夫人が、一人の馬盗人を例の残忍な方法で拷問しているとき、ギゼールは、ひそかに夫人の目を忍んで、恋しい人に近寄った。エメリッヒは、このとき、ちょうど、バルコニーの上において、その足下で行なわれている恐ろしい残酷な拷問を見て、ぶるぶるふるえていたときであった。

「もう、あたくしたちは、一刻の猶予もありません」と、ギゼールは、口早に、熱情をこめて言った。「さア、エメリッヒ！ どうかあたくしのことを聞いてちょうだい！ そして、たった今、この城から逃げてください。あなたは、ご自分の力を信じなければいけません。愛もなく、同情もなく、ただ圧制だけであなたを押える女のことなんか、考えてはいけません。さア、あなた！ 早く逃げてください」

「そりゃあ、伯爵夫人は、なるほど、高慢ちきで、残忍性に富んでいるのは事実だが、ぼくがそれに従って罪を犯すわけじゃないんだから、ぼくを責めることはないだろう」

「まア、それでは、あなたは、夫人を愛していらっしゃるのね。これほどまでに、あたくしがあなたを思っているのに」

と、この若い乙女は、苦悶に堪えかねて、彼に訴えた。

「ギゼール！ そんなことがあるものか」

と、彼は、彼女が抵抗するのも構わず、彼女を抱いて、胸に引きよせた。

「それがほんとうなら、逃げてください！

あたくしを連れて、逃げてちょうだい！ あたくしは、あなたを愛しています。伯爵夫人

は、あなたを少しも愛してはいません。奥様は、あなたに対して、どんな考えを持っているのか知りませんが、きっと、恐ろしいことを計画しているに違いないのです。さ、あなたは、奥様のもとから逃げなければ、いけません！」

「でも、夫人はぼくを愛しているのだ」

と、エメリッヒは、力なくつぶやいた。

「奥様が？ そんなことは、決してありません。あの方は、あの方と同じくらいに恐ろしい悪魔のような男と、恋に陥っているのです。ご用心しなければいけません」

「ギゼール、おまえのいうことは間違っているよ。恋がおまえにウソをつかせるのだ」

「まア、エメリッヒ！ あなたは、あたくしの忠告をお聞き入れにならないのですね。あたくしは誓います。あたくしにはウソなんかつけません」と、彼女は、いじらしいまでに真面目な顔をして、手を高くあげて誓うのだった。

「じきに、また満月の夜が、やってきます。毎月、満月の夜になりますと、きまつて、伯爵夫人の侍女たちの一人がいなくなってしまうのです」

と、若い娘はつぶやいた。その声は、なんとなく悲しみに満ちて、目には、いっぱい涙

が溢れていた。

「ギゼール、どうしてだい、それは？」

「その夜、見えなくなるのは、奥様の浴室にかしづく番に当たった者に限っています。ああ、そして、今度は、あたくしとその番に当たっているのです」

と、彼女はとうとう、その場に泣きぐずれてしまった。

「そんな気まぐれ沙汰を、誰がするものか。さア、泣いてはいけない」

と、エメリッヒは、痛々しい彼女の頬に接吻して、涙を拭いてやった。

ちょうどそのとき、伯爵夫人が、姿を現わした。彼女の瞳は、憎悪の炎と、血なまぐさい喜びに燃えていた。しかし、それをじっと我慢して、ギゼールを追い払い、何事も起こらなかったように微笑を浮かべて、エメリッヒと語り合った。

だが、その晩以後、エメリッヒは、ギゼールに親しく会うことができなかった。あらゆる努力を払って彼女に近寄ろうと試みても、いつも不可能に終わった。伯爵夫人が、彼を自分のそばから一步も離さなかったからである。

そのうちにまた、満月の夜がやってきた。

城の人々は、みな一様に、恐怖の念に満たされた。

その夜、エメリッヒは、寝床についてからも、ギゼールの面影が目の前にちらついて、しかもそれが、彼の救いを切望しているようなので、どうしても安眠できなかった。

彼は、堪えきれなくなって、戸外に飛び出した。そして城壁によじのぼり、堡塁を一巡した。

と、突然、けたたましい叫び声が、不吉な満月の夜の沈黙を破って、あたりにこだました。

エメリッヒは、急いで、声のするほうへ走ったが、何も発見することはできなかった。

(叫び声のやんだのは、すでに、人間の死を意味しているのではなからうか?)

(ギゼールの言ったことは、果たして真実であつたのだろうか?)

彼は部屋に戻ったが、それからは一睡もすることができなかった。

翌日、エメリッヒが客間に姿を現わしたときは、彼の顔は、非常にやつれて、蒼ざめていた。

伯爵夫人は、多くの侍女に取り巻かれ、軽快な化粧服を身にまとい、あふれるような



微笑を浮かべていた。彼女は、一夜にして、より美しく、より若返ったように見受けられた。しかし、夫人を取り巻く若い侍女たちのあいだには、ギゼールの姿は見られなかった。エメリッヒは、勇気を出して、夫人に、ギゼールのことをたずねた。

「あたしは、ほんとうに不幸な目にあいまして。あたしの大切にしていた宝石の一つがなくなってしまったのです」

と、伯爵夫人は冷淡な口調で、彼の質問に答えて、言い放った。

その後、数日たって、エメリッヒは、廊下で、イサベラと会った。彼女は、彼の両手をとって、押し止め、

「あたしたちは、いま、恐ろしい牝獅子のすみかにいるのです。ギゼールは、決して、奥様の宝石を盗んだのではなりません。あの方には、逃げそこなって、殺されてしまったのです」

途端に、廊下のドアが開いた。イサベラは急いで青年から離れ、姿を隠してしまった。

悪魔のような男

ギゼールの謎の失踪後、月日はどんどん流れていった。ナダスディ伯爵夫人の侍女の若

い娘たちは、表面は一樣に、晴れやかに見えただが、エメリッヒは、しばしば恐怖にこのくような事実につかつた。

しかし、彼の、夫人に対する恋慕の思いはますます激しく燃えるばかりであった。ついには、エリザベートなしでは生きていけないくらいになってしまった。だから彼は、よくれ悪しかれ、ただわけもなく、彼女の肉体と魂に盲従するばかりであった。

この、美しくて冷酷な女は、もうほかのこゝでは刺激を感じなくなったので、今度は、嫉妬心を用いて、自分の病的な熱情をあおろうとした。ギゼールの場合が、それだった。つまり、伯爵夫人は、イポルカルという男に命じて、ギゼールをこの城に連れてこさせたのだった。そして、ギゼールとエメリッヒとに恋愛関係を結ばせ、それを見て起こった嫉妬心によって、自分の変態的な情欲を刺激させたというわけであったのだ。

イポルカルという男もまた、伯爵夫人に劣らないほど悪魔的な性格を多分に持った男であった。

ある日、エメリッヒは、夫人とイポルカルが散歩から帰ってきて、中庭を歩きながら話をしていてところを見つけた。

「あたしは、どうしても若い娘が入用なので。この前のは逃げられてしまいました」

と、エリザベートは言った。

「オレも、おまえのためを思って、ハンガリアじゅうを走り回って若いのを見つければよかったが、どうしても、いいのが見当たらないのだ」と、イポルカルは、彼女に答えて、さらにしゃべりつづけた。「もう、この近辺には、いくら捜しても、いいのはいない。どうだい、あの、今度来た若い男を、おまえに、いとめる気があるかね？」

夫人は、それに答えようとしたが、ちょうどそのとき、エメリッヒの姿を見いだしたので、そのまま口をつぐんでしまった。

イポルカルは、馬から下りて、夫人の腕をとり、エメリッヒには少しの注意も払わず、彼女を庭園のほうに連れて行った。彼は、エメリッヒなどは、全然、眼中にないかのようにだった。

夕方になって、イポルカルは城を出て行った。伯爵夫人は一人きりになった。エメリッヒは、この機会を利用した。そして彼は、悲しげな態度で、彼女の前にひざまずき、その手をとって接吻した。

「まア、どうしたというのです。そんなにま

「青な顔をして？」

「もう、ぼくは、あなたのお氣に召すことなら、なんでもします」

「まア、そんなこと。あなたがもしウィーンに帰りたいのなら、いつでもお帰りになってよろしゅうございますよ」

と、夫人は、冷ややかな微笑を浮かべて叫んだ。

「エリザベート！ あなたは、ぼくを追っ払うつもりなんですネ。ぼくはあなたを愛しているのです。あなたなしでは、ぼくは生きていられません」と、彼は盲目の少年のようにあえいだ。「どうか、ぼくを、あの密猟者のように鹿の背に縛ってください。そして、お氣のままに殺してください。ぼくが死んで、あなたの若さと美しさとが増すのでしたら、どうか、思う存分に殺してください」

「あなたは、あたしのためなら、喜んで死ぬとおっしゃるのネ」伯爵夫人は、不思議な表情をしながら、エメリッヒを見つめて、ささやいた。「それは本氣なのネ？」

「ええ、ぼくは誓います。あなたが死ねとおっしゃるなら、ぼくは、あなたの足もとで死んでみせます」

「まア、なんていう坊ちゃんなんでしょう」

と、夫人は微笑しながら言った。そして、彼女の乱れた髪の毛を、彼の上氣したひたいの上にふりかけて、彼をひしと抱きよせて、こ

とばをついだ。「それなら、永久の幸福のために、あなたは死になさい」

「エリザベート！ あなたは、ぼくに死んでもらいたいというのですね」

と、喜悅の情を浮かべて青年はいった。

「ええ」

「いつです。いったい、いつ、死ねというのです？」

「今……たった今」

青年は幸福感に陶醉し、彼女の両足に熱い接吻をつづけた。

一人残った娘

イサベラ・ド・ベルジックは、ある朝、教会の礼拝堂に行く途中、一人の、年とった中風の乞食に出会った。彼は、彼女の与えた布施には目もくれず、しつこく彼女のそばに寄ってきた。

「ご老人、おまえは何がほしいの？」

「おお、おまえだ！」

と、その老人は、彼女も見知っている指輪や、日の光に輝かせながら叫んだ。

「まあ、コロマン！」

「そうだ、オレだ。おまえの兄だ。おまえは人々が礼拝堂を出て行っても、ひとりに残っていておくれ、オレは、おまえを待っているから」

ミサが終わると、伯爵夫人や、その侍女たちは城へ帰って行った。だが、イサベラはひとり残って、ざんげ室でお祈りをつづけていた。

コロマンは、妹を見つけるやいなや、ぶるぶると体をけいれんさせて、彼女を抱いた。

「それでも、おまえは、よくオレだということとがわかったね。あの伯爵夫人は、人々のウワサのとおりなのかい？」

「ええ、やはりそうでしたわ。ほんとうに恐ろしい人なの。毎月、満月の夜になると、きっと、奥様に仕えている若い人たちの一人がいなくなるのです。そして、みんなはもう逃げてしまつて、あたくしひとりだけが、残されているのです。まるで地獄のすみかです。あたくしを助けてください」

「いやいや、まだだ。オレは、あの悪魔の仮面を、じゅうぶんにはがしてやらなければならん。計画はもうできている。この次の満月の夜、おまえの部屋の窓をあけて、これを、

とびらの穴に結ゆわえておいてくれ」と、彼はポケットから縄梯子なわばしを取り出して妹に渡した。「それじゃ、さようなら。決して心配するんじゃないぞ。神様はわれわれを守ってくださいのだから」

彼女と親しい抱擁をして、コロマンは、びっこを引きながら姿を隠した。

やがて満月の夜が来た。

伯爵夫人は、イサベラを呼び寄せた。夫人は絹布団に身を投げながら、イサベラにやさしい口調で言った。

「あたしは、おまえが好きでならないのだよ……だから今夜、おまえに、永遠の若さと美しさを保つ秘法を教えてあげようと思うのだよ。あたしの浴室に来ておくれ！」

「奥様、ありがとうございます」と、イサベラは不安と恐怖におののいて答えた。「あたしは、奥様のそのおことばを聞いて、どんなに嬉しいかわかりません。けれどあたしは、そのおことばにかなう女ではございません。あたしくしの良心が、それに反対いたすのですもの」

「おまえの良心だって？」

「キリスト教徒であるあたしたちは、時の

経過にさからう権利を持っていません。もしそれにさからうならば、あたしたちは、たちまち重い罪に罰せられます」

伯爵夫人はびっくりした面持ちで、イサベラを見つめた。

「まア、おまえは、そんなことを信じておいでかい？ よろしい、では、あたしが、お前にそれを命令する！」

「奥様は、そんな権利をもっていられませんか」と、彼女は、急に大胆に、主人に向かってさからった。「あたしは、絶対に、あなたに服従しません。もし、しいてあたしを従わせようとなさるなら、あたしくしの兄は、必ず、あなたに復讐するでしょう」

「そんなおどし文句はやめてくれ！」

と、伯爵夫人は、とび上がりざま叫んだ。「おどしたのではありません、ただ、ご忠告しただけです」

若い娘は、はばかるところなく反抗した。

「あたしは見そこなった。あした、あしたの朝かぎり、おまえは、この城を出てお行き！」

イサベラは、黙って、そのまま自分の部屋に戻った。

そして彼女は、祈禱と苦悶のうちに、夜の明けのを待った。

悪魔のヒミツ

夜は、次第にふけ渡って、城の内外は、恐ろしいまでに静寂であった。ときどき、不気味なフクロウの鳴き声が、イサベラの胸を刺した。彼女は、恐怖にふるえながら、部屋の窓をあけた。皎々たる満月の光は、ものすごいほどはっきりと平野を照らしていた。彼女は月の光をたよりに、縄梯子を窓のところにしばりつけ、その端を地上に垂らしておいた。時計が十二時を打った。誰かが、窓の下を歩いているように思われたので、イサベラは身を屈めて、それを見ようとした。

だが、不幸なことに、彼女の兄は来なかった。彼女は、誰かにねらわれている苦悶と恐怖におののいた。そして、一時に沸き起こった不安が、たちまち彼女の正気を失わせしめ、イサベラはそのまま、ぼったり床の上にたおれてしまった。

それと同じ時刻——エメリッヒは、伯爵夫人のおつきの女魔法使いの一人によって、呼び起こされた。

「なんの用です？」

と、彼は、寝たままたずねた。

「あたたのところに幸福がまいりました。さ

ア、起きなさい、お若い方。あたしが、あなたを奥様のところに連れて行ってあげますから」

と、その老婆は、歯をむき出して言った。

「伯爵夫人のところですか？」

「そんなにあわててはいけません」

エメリッヒは急いで着物をきた。老婆は彼の手をとって、陰気な廊下を横切り、不気味な長い階段を登って彼を導き、登りつめたところで立ち止まった。

一すじの光線が、エメリッヒの足もとを刺した。ドアが開いたのである。青年は突然、豪奢をきわめたアジア風の光彩に満ちた部屋に案内された。

その部屋の中央には、黒い大理石の湯槽ゆがめがおかれてあった。老婆は、悪魔のような微笑を浮かべつつドアを閉じてしまった。

エメリッヒは、思わず驚愕の叫びを上げてしまった。ちょうど、東洋風な布団椅子の上に伯爵夫人が、すごいほど濃艶な姿態でねそべっていたからである。そして彼は、わけもなく彼女に引き寄せられてしまった。

夫人は、彼を両腕でやさしく抱きながら言った。

「今夜、いよいよ、あなたの式をあげます。」

しかし、その前に、あたしの秘密をあなたに打ち明けましょう。ねえ、あたしの可愛いお方、あたしは、あなたより二倍も年上なのですよ。それなのに、あたしは、こんなに若いのです……」

「ぼくに、そのナゾをきかせてください」

「あなたは、あたしが残忍性に富んでいることをご存知でしょう。しかし、このことは、あたしの若さを失わないための手段なのよ。」

……ある日、あたしは、ある反逆した百姓男の首を斬らせたことがありました。そのときあたしは、死刑に立ち会ったので、その男が首を斬られたとき、その血潮が、あたしの手にふりかかりました。その後数日たってみると、驚いたことに、あんなにたくさんあった皺しわが、全部なくなっているのです。あたしの年老いた乳母のアルヴァは、これは、あの死刑囚の血潮のためだと思いました。それからあたしは、また、死刑囚の血潮を浴室で浴びました。そして一カ月ほどたつと、まったくあたしは若返ってしまったのです。それからというものは、満月の夜ごとに、人間の血潮を浴びることにしたのです……」

「それで、あなたは、今までに、多くの侍女たちを殺していたのですね」

「そうです。あたしの永遠の若さを保つために」

と、伯爵夫人は、冷ややかに言い放った。

「そして、今夜も、あなたはそれを……」

「そうです。あたしは人間の血潮を浴びたいのです」

「いったい誰が、あなたの犠牲者になるのです？」

「あなたの血潮を浴びるのです」

と、悪魔は、彼女の足もとにいる秀麗な青年に、微笑を浮かべて叫んだ。

「あなたは気が狂っているのです」

「あたしに生命を捧げたあなたこそ、気が狂っているのです。あたしには、少しの同情心もないことは、あなたもよく存じていらっしゃるでしょう。もはや、あなたは、あたしのもので、あなたは、あたしなしでは死んでしまうと言いました。さア、死になさい。たった今、あたしは、あなたの満足のいくように殺してあげます」

そういつて彼女が合図すると、数人の、仮面をつけた男が、秘密のドアから現われて来た。そして彼らは、青年がひざまずくのもかまわず、その手足を縛り上げてしまった。

この残忍な女の、残忍な愛人であるイポリ

カルも、そこへ姿を現わした。そして、この哀れな、恋の競争者に対して、死の引導を並べたてた。

夫人は、悪魔のような笑みを浮かべながら叫んだ。

「さあ、あたしのいいなずけさん、すなおに往生なさるがいい！」

「勘弁してください、お願いです！」

と、死の恐怖にかられて、哀れな青年は哀願した。

「さあ、イポルカル！ あたしに、早く血を浴びさせてちょうだい！」

と、伯爵夫人は、彼女の愛人の苦悩のさまには目もくれず、命令した。

イポルカルは、恐ろしい力で青年をつかんだ。そして美しい悪魔は、仕事に取りかかった。

彼女は、「愛人」の胸、両腕、両足に、剣で傷をつけた。それから手足を寸断した。

哀れなエメリッヒは、エリザベートとイポルカルの嘲罵にあいながら、深紅の自分の血潮が、ポトポトとしたたるさまを眺めた。この恐ろしい拷問の餌食にあえぎながら、彼はついに失心してしまった。

湯槽はほどよく血潮で満たされた。伯爵夫

人は、足をはしょって心地よげにひたり、次いで、上着を脱いで、熟したさざなみに、そのからだを休ませようとした。

因果は応報あり

ちょうどそのときである。戸口のところでけたたましい物音が起った。

「誰だ？」

と、イポルカルは叫んだ。

「王の名において、このとびらをあけろ！」

「おお、露見したか。みんな逃げるんだ」

と、イポルカルは、一座の者に叫んだ。伯爵夫人は秘密の戸口から逃げようとした。だが、そこにはすでに、コロマンとその部下たちが張り番していた。

ほかのドアは、マサカリで破壊された。そして、一隊の兵士が、この部屋へ乱入した。

伯爵夫人、イポルカル、および、その共謀者アルヴァとサラは、クサリに縛られて、城の土牢に監禁された。

役人の取り調べに対して、彼らは頑強に自白をこぼんだ。それゆえ、役人は、数度にわたって彼らを拷問して、やっと全部を白状させた。

伯爵夫人は、エフェース城の土牢に永久に

幽閉されることとなった。ありし日の豪華な生活に比べて、いまの彼女は、あまりにも寂しく、陰惨であった。地底ふかく掘られた土牢は、全然太陽の光が見られないのである。こうして彼女は、死よりも千倍の苦痛をなめることを余儀なくされたのだった。

イポルカルは、城の中庭で斬首の刑に処された。

ほかの女魔法使いたちは、人々の願いによって、火あぶりの刑に処せられることになった。

かつては、ハンガリア第一の美人として評判の高かったナグスディ伯爵夫人は、その後、暗黒な土牢に三年間呻吟した末、ついに、一六一四年八月二十一日、地上の満月の夜、悶死を遂げてしまった。

画報・風俗奇譚 秘蔵版

定価 二〇〇円

昭和三十五年八月五日印刷
昭和三十五年八月十五日発行

編集人 高倉一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一三五

発行所 文献資料刊行会

電話東京(291)二四三〇番